
理不尽な神様と勇者な親友

廉志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理不尽な神様と勇者な親友

【Nコード】

N7362U

【作者名】

廉志

【あらすじ】

この物語は俺を中心には回っていない。あくまで俺の視点で描いているだけだ。

『俺』こと佐山雄一は異世界に召喚された。……いや、正確には親友の巻き添えを食らった。

異世界召喚ものによくあるように、初めは神様の説明を受ける…わけでもなく「おまえ手違いでこっち来ちゃったけど戻れないからテキトーに頑張つて」と投げやりに異世界に放り出され、召喚された王国では「勇者じゃないなら出てけ!!」と再び放り出された。

……いくら俺でも泣くぞコラァ!!

悪い意味で期待を裏切らない!

先が読めるテンプレファンタジー!! いざ開幕!!

ブローグ

「あゝ、退屈だ」

空を仰ぎ見ながらため息をつく俺。

あつ、『俺』って言うのは、多分この物語の主人公である音竹護^{おとたけまもる}……の親友である佐山雄一^{さやまゆういち}のことだ。

「退屈って……この後糸田先生の鍛錬があるだろう」

ちなみにこいつが音竹護だ。イケメン、畜生め。

「鍛錬つつつてもあの分けわからんねえ古武術だろ？ あんなの現代日本で何の役に立つんだよ」

そう。俺と護が住んでいるのは、都心より少し離れたとある児童養護施設なのだが、その院長である糸田孝三^{いとだこうぞう}の方針により、施設に住んでいる人間は全員が武術を習う必要があるのだ。

「健全なる精神は健全なる肉体に宿るっていうのが先生の考えだからね。それに文句言ってるけど雄一は施設の人間では先生に次いで強いじゃないか」

確かに俺はそこそこに強い。といっても護と大差無い程度だ。つまり護も十分すぎるほど強い。しかも護は勉強も全国レベルにできるのであまり比べられたくは無い。

「しょうがねえだろ。ジジイのやつが鍛錬しないならその分勉強に励め。って言いやがるから……」

正直に言っただけ俺は頭の出来がよろしくない。バカと揶揄されても納得してしまうほど勉強がだめなのだ。

まあだからこそ勉強の時間を鍛錬に費やしたわけなのである。

「ははっ、雄一を見てると先生の考えが間違っているかもしれないと思うよ。肉体を鍛えても精神のほうがまるで「ぶっ」……」

護が俺をなじっているのが分かったのだが、ツツコミを入れる前に俺の顔面が護の背中に突っ込んだ。ああ、こいつ男のくせに良いにおいがするなあ。

「雄一。道の真ん中にドアがある」

「は？」

鼻をさすりながら護が指差す方向を見てみるとな、なんと……

……何も無かった。

ああ、勉強のし過ぎで逆に頭がおかしくなったか、親友よ。

「お前に見えるのならきつとそこにはドアがあるんだろう。大丈夫。俺はお前を信じているよ」

護の肩にやさしく手を置く。大丈夫。こいつはきつと疲れているんだ。

「アレが見えないのか！ あんなにハッキリ……うわあ！」

護が地面に突っ伏し何かに引つ張られている……ように見える。おいおい、とうとう小芝居まで始めたぞこいつ。

「護！ 水臭いぞ！ なにか悩んでいるなら相談してくれよ！」

一人芝居をするほど追い詰められていたなんて……もっと早く気づいてやれば……くっ（泣）。

「いや！ そういふのとは違うか……うわああああ！」

勢いよく引つ張られる（俺にはそう見える）護。そしてその手が俺の服の袖をつかむ。

「ん？ おおおおおおおおおおお！？！？！？」

途端、俺も護のように見えない何かに引つ張られる感覚に襲われた。

「なんじゃー！ こりゃー！……！」

これは地球での俺、佐山雄一の最後の叫びであった。

プロローグ（後書き）

はじめまして。 廉志です。 このたび初めての小説を書くことになりました。

正直知識が乏しくお見苦しいものをさらしてしまう可能性もありますが、これからよろしく願います。

第一話 神様のお導き……？

俺は目を覚ました。

ていうか俺はいつ眠ったんだ？

たしか、俺は護と一緒に下校していたはずだが……

「あっ！！」

そうだった。たしか下校途中で護がおかしなことを言い出して…

周りを見回してみる。

そこには何も無い。

白い空間？と言っているのかもしれないがはるか彼方、地平線の向こうまで何も無いのだ。普通の場所でないことは確かだろう。

「うつ…」

誰かがうめいた。いや、この声は護だ。どこだ！？

再び周りを見回してみる。

やはり何も無い。

「うつ…」

再びうめき声がした。……足元から。

見てみると俺は護の腹の上に立っていた。気づけよ俺。

「うわぁ！！ す、すまん！」

慌てて護から降りる。

護はうめき声こそ上げなくなったが、起きる気配が無い。

「大丈夫か！？ ていうかここは一体……」

「それに関しては俺が説明しよう」

近くから声がした。

声が出た方向に顔を向けてみると、一人のオッサンが立っていた。くわえタバコにボサボサの髪の毛。服もダルダルで、一見ホームレスにも見える。

「誰だあんた。それにこの場所の説明って」

「あー、俺の名前は……いや、というより役職は神様だ。ちなみにここは天国だ。」

サラッと言っなあんた。……ん？神様？天国？

「神さ……いやそれよりも、天国だって？」

天国？それが本当だったとしたら俺と護って死んだってことか？

俺が絶望に打ちのめされそうになっていたとき、天使。そう、天使と呼ばれるもの。フランダースの犬のラストに出てくるような子供が神様のもとに飛んできた。

天使は神様の耳元を手で隠し、ひそひそ話をし始めた。

「ん？……ああ、そうか……いやご苦労」

神様がなにかに納得すると天使が神様の少し後ろに降り立った。

神様は再び俺のほうを向き、こう言った。

「ここは天国ではない」

「って違うのかよ!!」

かなり安堵しつつ俺は突っ込んだ。相手が神様と言えどそりゃあ突っ込むだろう。本気で絶望しかけたっての!!

「ここは『時空の狭間』と呼ばれる場所……らしい」
あいまいだなオイ。

「おまえは……えーっと」

神様が何かを言いかけると、後ろで控えていた天使が何か書類のようなものを神様に手渡した。書類？をめくると再び口を開く。

「音竹護。お前を異世界『アストラム』に勇者として召喚する」

.....

二人の間に沈黙が流れる。

「ん？」

今俺に言ったのか？でも俺は音竹護ではないし……

「おい、返事をしろ音竹護。」

やはり俺か

「俺は護じゃない。護はそこで伸びてるやつの方だ」

そう言つて護を指差す。

気持ちよさそうに寝やがって。

「む？　なら貴様は誰だ」

当然の疑問であるが、神様なら分かりそうなものだろ。

「俺は佐山雄一だ。護の親友っていうか」

「ふむ。どうやら手違いのようだな。ならお前はもう帰っていいぞ」

書類に何かを記入しながら神様が言う。

「つて言うことは俺はもとの世界に帰れるってことか？」

いきなりすぎてまだ頭が回らないが、もとの戻れるならなんでもいいや。

希望がわいてきた時、再び天使が神様に耳打ちした。

「ん？……ああ、そうか……いやご苦労」

神様がなにかに納得すると天使が神様の少し後ろに降り立った。

神様は再び俺のほうを向き、こう言った。

「いや、帰れないようだ」

「つて帰れないのかよー!!」

さっきもやったぞこのやり取り！

「じゃあ俺はどうなるんだよ！」

「む、とりあえず『アストラム』に送るから、その…なんだ…頑張れ」

投げやりだなオイ!!

そう突っ込もうとしたが叶わなかった。なぜなら急に地面がなくなつたように俺の体が落下し始めたからだ。

「なんじゃそりゃ————!!!!!!!!!!!!!!」

これは時空の間?での俺、佐山雄一の最後の叫びであった。

第二話 主人公（仮）

「痛つてえ」

さつき目を覚ましたはずなのに再び目を覚ます俺。

何を言っているのか分からないだろうが、俺にもわからないので説明できない。

「…お！……………様…！や……………で……………」

頭がガンガンと鳴っているなか、周りでは複数の人間が俺に視線を向け何かを話している。

頭痛のせいでほとんど聞き取れないが。

「シルフィ様！ 成功です！ 勇者様が「待て」…」

ぼやける目をこすりながら前を見ると、きらびやかなドレスに身を包んだ少女が立っていた。

歳は13歳前後といたいでたちだが、その身に纏う迫力は決して少女と呼べるものに発することができないものではない。

「貴様は何者だ！」

いきなり俺の胸倉を掴んだ少女が叫んだ。
顔が近い。ドキドキするじゃないか。

「シルフィ様！？ 勇者様に何をなさるのですか…！」

周りにいた神官らしき男たちが慌てて少女を引き剥がしにかかる。

「お前たち！ こいつが勇者に見えるのか？ 魔力すら感じられないこの男に！」

シルフィと呼ばれる少女の言葉に神官たちが困惑の表情を浮かべる。

「確かに、伝承では勇者様には竜人^{ドラゴン}族すら上回ると言われる魔力が備わっているはずではないか」

「この男からは微々たる魔力すら感じられないぞ！」

「ああ！ では召喚の儀式は失敗だったのか！」

盛り上がっているところ悪いが、俺には何のことかさっぱりだよ。

「もう一度聞く。貴様は何者だ！」

再び少女が俺に迫る（迫るだなんて、照れるな）

「え、えつと、とりあえず離してくれるか？」

なにしろ胸倉をきつく掴まれているのだ。息が苦しくて話すことができない。

「ふんっ」

さげすむような視線を俺に向けつつ、一応手を離す少女。

息が通常通りできるようになり、とりあえずは落ち着いていた。

冷静になり周りを見渡してみると、なにやらレンガ造りらしき壁や、神官服に身を包んだ男たち、レトロにも照明には口ウソクが使われていた。

はっ、まさかカルト集団とかか、さつき召喚の儀式とか言ってたし。

「お前らこそ何者だ！ 俺はこんな宗教に加入した覚えはねえぞ！
ていうかこどこだよ！ あと護のやつをどうしやがった！」

まだ言いたいことはあつたが、一息で言い切ったので大きく息継ぎをする。

「……質問を質問で返すとは、不敬極まりないがいいだろう。説明してやる」

呆れ顔で少女が答える。

「私の名はシルフィ・ド・アラム・モントウ。モントウ王国第三王女だ。そして、ここはアストラム王国首都、グロリアである。……あとマモルとやらは知らん」

俺が聞いた質問に対してしっかりと答える……シルフィ？という少女。とりあえず話は通じそうだ。

「さあ、三度目になるが貴様は何者だ。少なくとも勇者様ではないようだが……」

「ああ、俺は佐山雄一だ。勇者とやらのことはよく分からないが……ああっ……」

思い出した。ああ、思い出した。………思い出さなきゃ良かった、と思ったのはこのしばらく後だったか。

そう。この時、この世界での俺の立ち位置が決定したのである。その名も………主人公（仮）

第三話 腹が減っては……死ぬ

思い出した。

思い出してしまった。

神様とのやり取りを思い出し、シルフィにかいつまんで説明した。俺が手違いでこの世界に召喚されたこと、そして俺が勇者ではないこと。

説明をしている中、シルフィの表情が目に見えるように暗くなっていた。

終いには目に涙をためはじめた。

周囲の神官たちが慰めようと声をかけるが、全く効果が無く、「このままでは世界が」とか「最後の希望だったのに」とかぶつぶつとつぶやく有様である。

さすがに俺も目の前で女の子が泣いているというのは居心地が悪いので慰めようとした。

うん。

それが悪かったのか？

このような怒号が飛んできた。

「勇者じゃないなら出てけ!!!!!!!!!!!!!!」

そんな感じで俺は今城門前へと追い出された。

急ではあるが、ここで俺の装備品を紹介したい。

高校の制服一式 防御力0 腐女子への受け3

財布 特殊効果無し

所持金 日本円 313円也

ちよっ！ 死ぬ！！

「ちよっと待つて！！ 死ぬから！！ 死んじゃうから！！！」

俺は城門を叩く。そりゃあ叩くだろう。死活問題だから。

数回門を叩くと中から兵士が出てきた。睨まれた。……恐れ！！

俺は城に助けを求めることをあきらめた。

だって兵士さんに槍を突きつけられたらあきらめるしかないじゃないか！

とりあえず街に行ってみよう。というよりそれしか選択肢しかない。ドラクエで最初のモンスターを仲間にするときに選択肢が実質一つしか無い時と一緒だ。選ばなければ前に進まない。

街に入ると、そこは驚くほど活気に満ち溢れていた。行きかう人々の表情は一樣に笑顔である。

例えるなら日本の夏祭りのような雰囲気だ。

ぐううう

む？ 何の音だ！？

まあ、俺の腹の音だ。

腹が減ってくらくらしってきた。

とにかく飯だな。腹が減っては戦はできぬというらしいし。

食事ができる場所を探し、少し町を歩いたところ、俺はあることに気がついた。

この世界では言葉が分かるだけではなく、文字も理解できるということだ。

と言っても日本語の看板が掲げられているわけではない。

地球で言うところの中東？……アラビア語のような文字が羅列してある。だが、俺はアラビア語をマスターしていたわけでは当然なく、頭の中で自動的に翻訳されているようだ。なんという都合主義。

そうこうしているうちに食堂らしき店を発見した。

店のメニューが載っている看板に目を向けてみる。

パルトの煮物定食 銅貨6枚

メチカワとカララギの炒め物 銅貨4枚

カラマチ 銅貨9枚

すげえ、料理名だけでは肉料理なのか魚料理なのか野菜料理なのかさっぱり分かん。

まあ、とにかく情報収集だ。

もちろん料理についてではなく、料理の値段についてだ。

「すみません」

店の中で働いている女性に声をかけてみる。

ちなみにこの女性は少し太った体型のおばさんである。なんというか……ジブリの映画に出てきそうな気持ちのいい女性だ。

「ん？ なんだい？」

「この店で一番安い料理ってこれですか？」

看板のメニューを指差し尋ねる。

「ああ、定食で一番安いのはパルト定食だけど単品だと銅貨3枚だよ。食べてくかい？」

「いえ、今は持ち合わせが無いので。物を売ろうと思うんですけど、どこか買取をしてくれる店ってありますか？」

「武器とかだったら街の反対側にあるけど……そんなの持って無さそうだしねえ。雑貨ならこの道の向かい側で買い取ってくれるよ」

親切にもおばさんが道に出てきて教えてくれた。本当に気持ちのいい人だ。

「ありがとうございます。お金ができればまた食べに来ますので」

そう言つて俺は頭を下げる。うん。やはり礼儀は大事だな。……神様と王女様にタメ口叩いていたことは忘れよう。

「あら、礼儀正しい子だねえ。待ってるよ」

その場から離れ、おばさんに教えてもらった店に向かう。

その間に食堂での情報を整理しよう。

食堂で一番安いメニューが銅貨3枚。一食を単品では済まさないだろうから定食で一食約銅貨6枚。

一日三食……いや、最低2食で銅貨12枚。自炊すればもう少し安くなるだろうが、大体そのくらいで一日食べることができる。もちろん住む場所やら何やらでもっとかかるだろうが、野宿をすれば食事分だけで生きていけるか……

「まずどうやって金を稼ぐか……だよなあ」

思わずため息が漏れる。児童養護施設も大概貧乏だったが、食に困るほどではなかったもんなあ……

無い頭を悩ませているうちに雑貨店に着いた。

店の前には鍋やフライパン。何に使うのか分からないものまで様々なものが並んでいる。

「すみませーん」

店内に声をかけてみる。

返事が無い。

「ん？留守か？」

まずいな、金が作れないと飯が食えない〃BAD END
やばい。戦なんてしてる場合じゃねえな。死ぬわ。

つってもそこまで悲観することではないな。

店の人が戻ってくるまで待てばいい話なんだから。

とりあえず店員が戻ってくるまで雑貨でも見ていることにしよう。

「これは…鍋か、しかしやけにぼろいな。ほかには置物？ネツクレスに本あと手とビンと……手？」

手。

うん。
手。

それが雑貨の中から生えていた。

そしてその根元から何か聞こえる。

「タスケテ」

[illegible]

思わず叫んだ。いや、叫ぶだろう普通。雑貨の中に人が埋まってた
ら。

俺はその手を掴み引っこ抜いた。

難なく瓦礫の中から引つ張り出せた。歳は俺よりも少し下ぐらいの少年だ。

「ああ、ありがとうございます」

少年は少し目を回しているようだったが大事は無さそうだ。

「大丈夫か？」

「はい。大丈夫ですよ」

少年はヒビの入った眼鏡をかけ直し、店の片付けを始めた。

まあ、大丈夫ならいいか。

「埋まつてたところ悪いけど、買取をお願いしたいんだが」

そつだ、金がないと飯が！ 飯が！！

「ああ、はい。どれを買取いたしましょう」

「これなんだけど」

俺は唯一の所持金である313円を財布から出した。

所持金と言ってもこの世界では何の役にも立たないからな。

「はい。こちらですね。これは……硬貨……ですか？珍しいものですね」

そう言つと少年は百円玉をつまみ、指ではじいた。

周りに百円玉の音が響き渡る。

「……………これは、見た目は鉄ですけどほとんどが銅ですね」

へえ、そうなのか。俺は見たまんま鉄だと思ってた。

そのほかの硬貨、十円玉と一円玉も同じように指ではじくとようやく査定結果が出た。

「占めて銅貨1枚、銅板5枚ですね」

銅板？また新しい硬貨がでてきたな。つーか足りない……食堂の単品にも届いてない。

「も、もう少し何とかならねえか？」

値段交渉に入る。日本にいたときは値切りなんてしたこと無かったけど今は本気で死活問題だ。

「すみませんが、同じものがもう一枚あれば銅貨3枚まで出せますけどこれだけだとこれ以上はだせません。」

あと一枚？

くそっ！ どうかにねえか！？

ズボンのポケット…無い

上着のポケット…無い

もう一度財布…無い

ああ、やっぱりもう無いか。

がつくりとうなだれる俺。ああ、かわいそうな俺。こんなことなら昨日の帰り道で買い食いなんてしなけりゃ良かった。

「あつ、それって」

顔を上げると少年が目を輝かせながら俺の手元を見ている。いや、手元ではなく財布だ。

「もしかしてこれ、売れる？」

恐る恐る聞いてみるとすばらしい速度で財布を奪い取られた。

「これは……うわあすごい……どうやってこれを………何だこの素材……」

一人でぶつぶつとつぶやく少年。端から見ると少し気持ちが悪い。

「査定終わりました。この財布ですが、銀貨1枚と銀板5枚でどうですか？」

「銀貨？」

銀貨？多分銅貨よりも高価な硬貨だろうが、価値が分からないので呆けた返しをしてしまった。

「あつ、安かったですか？んゝ苦しいですが、銀貨2枚までなら何とか出せますが」

俺の呆けた返事を違う方向に受け取ったらしい少年。交渉をすればもう少し高く買い取ってくれそうだが、俺にはそんな能力は備わっていないかったため交渉はこれで決着した。

今回の利益 313円 銅貨1枚銅板5枚

財布 銀貨2枚

計 銀貨2枚銅貨1枚銅板5枚

あとはこのお金がどれくらいの価値なのかを調べる必要があるが、その前に腹ごしらえだ。さすがにもう限界……。

腹減ったー！！

第四話 異世界調査結果

「ご馳走様でした」

何とか金を作ることに成功し、食堂で食事を取ることができた。予想外にお金が入ったため、この食堂でもっとも高いカラマチと呼ばれる料理を頼んだ。

どんぶりサイズのお椀になにやら紫色の物体が敷き詰められており、正直食欲をそそるものではなかった。しかし以外にも味はよく、十分足らずで食べきってしまった。ちなみに最後まで何の料理かは不明でした。

「はい。お粗末様」

俺は食堂のカウンターに座り、おばさんと向かい合っている。

先ほどまで店には大勢の客がいたのだが今は俺以外の人間は居らず、おばさんも暇そうにしている。

「しかし、一気にお客さんが減りましたね」

「ああ、一番込む時間帯を過ぎたからね。今はみんなギルドに戻って仕事再開してるんだろっさ。今は向こうのほうで混んでるだろうね」

ギルド？

また新しい単語が出てきたな。RPGとかに出てくるような冒険者ギルドみたいなものだろうか。

「そのギルドって言うのはなんですか？」

何気なく聞いてみたのだが予想外に驚かれた。

「あんたギルドを知らないのかい？ どこにでもあるものだろう？」

どうやらこの世界ではギルドと言うものは一般常識レベルだったらしい。ふむ、どうしたものか。

「え、えーとですね。俺が住んでたのは本当に辺境の村でして、ギルドと言うものが無かったんです。それに外部の情報がほとんど入ってこなかったものでこのあたりの一般知識もよく分からなくて……お金の価値すらあいまいなんです」

よくもまあ口からでまかせを……まあ、異世界からやってきたのでこの世界の仕組みなんて分かりません。なんていったらかわいそうな物を見る目でみられそうだからしょうがないか。

「はー、だからそんな変わった身なりをしてたのかい」

どうやら……というよりやはり学生服はこちらの世界では珍しいようだ。

むしろ今まで突っ込まれなかったほうがおかしい話だが。

「ええ、俺の村の民族衣装なんです」

嘘だな。

「ふーん。とにかく説明してやるよ。まずはお金の価値からだね」

おばさんの説明を要約するとこんな感じだ。

一食あたり平均銅貨7枚

兵士などの力仕事をする人間は一日三食だが、商人などは基本的に一日二食で済ますらしい。

商人の平均月収が銀貨10枚前後で、兵士の場合は月収銀貨15枚と言ったところだ。

その他に果物や料理の材料の値段を聞くと硬貨の価値が大体分かってきた。

銅板＝10円

銅貨＝100円

銀板＝1000円

銀貨＝10000円

金貨＝100000円

白金貨＝1000000円

こんな感じ。

ということは俺の今の所持金は

銀貨2枚銅貨1枚銅板5枚＝20150円

まあまあ大金だな。

ちなみに各硬貨が10枚で次の硬貨。銅板10枚で銅貨1枚といった具合だ。

「じゃあ次はギルドのことだね。ギルドって言うのは、農業や商業。冒険者や魔法使い。果ては盗賊まで幅広い職業の管理をしている組合のことさね。農業と商業は互いの仕入れルートを確保したり、買い取り相場を決定したりだね。冒険者は街の人間や城の人間からの依頼を受けて薬草や鉱石を手に入れたり魔物や盗賊を討伐したりす

る仕事。魔法使いは……よくは知らないけど、薬草の調合や兵器の発明だったかな？ 最後に盗賊だけど……これは非法組織だから知らなくてもいいさ」

なんだか物騒な単語がいくつか出た気がする。盗賊やら魔物やら……

おばさんの話によるとどんな仕事に就くのであれ、必ずギルドに登録しなければなららしい。

そうしなければ法律違反にあたるそうだ。

これらの中で俺に就けそうな仕事は……

農業〃あまりかつこいい仕事ではないが、力仕事かつ単純作業（思い込み）なため最有力候補。

商業〃正直俺の頭で物売り買いできそうに無い。没

冒険者〃俺も一応腕に覚えがあるため候補の一つだが、魔物や盗賊と言った物騒なものには極力関わりたくない

魔法使い〃そもそも魔法と言う概念が分からない。没

盗賊〃あほか。

と、こんな感じである。

………は、働きたくないでござる。

この職業の中ではやはり農業が最有力だろう。

冒険者もかつこよくてやってみたいが、できれば平和に暮らしてきたいからな。

「ところで坊やはこの街で働く気なんだろう？ 何か特技とかあるのかい？」

「一応体力には自信がありますよ。あと、武術の心得もあります」

「だとしたら農業が冒険者かね……でも坊やに農業は難しいかもね」

ん？なんでだ？

体力には自信があると言ったはずだが……

「農業をする場合は一定以上の土地を所有している必要があるんだよ。坊やはこつちに来て間もないんだろう？ お金にも困ってたようだし……無理じゃないかい？」

「それじゃあ、俺にできそうなのは冒険者位ですか……はあ、できれば危険な仕事は避けたいですけど」

現代日本に住んでいた俺が魔物退治なんて……かけ離れすぎだ！！

「そうだねえ、冒険者以外だと身分証登録もしなきゃなんないし。坊やがギルドも無い田舎からきたって言うんなら身分登録もされていないんだろう？ だったら登録無しで加入できる冒険者になるしかないねえ」

「身分登録が必要なんですか！？」

身分登録が必要ならやはり冒険者以外は無理だろうな……だって異世界からきたんだからこつちでの身分なんて持っていないもん。

「ちなみに何で冒険者は身分証登録が必要ないんですか？」

「それはだね、最近魔軍の勢いがすごいだろう？ 城の兵士たちは

ほとんどが戦場に出払っちゃまって治安が悪くなってるんだよ。だからできるだけ腕のたつ人間が必要なわけさ。元盗賊の冒険者なんてのもさらにいるんだよ？」

だ〜か〜ら〜！ 物騒な話はこれ以上やめてくれよ！ なんだよ魔軍って！！

「と、とりあえず冒険者になるのには身分証登録は必要ないんですね？ じゃあどこでギルドに登録できるか教えてもらっていいですか？」

「今から行くのかい？ さっきも言ったけど今の時間帯はギルドは混むよ？ しばらくしてからいったほうがいいよ」

「そうですか？ じゃあもう少しゆっくりさせてもらいます」

ずいぶん時間が経ったと思ったけどそれほど経っていなかったらしい。もうしばらくのんびりしておこう。

「アズラさん……荷物お届けに来ました」

コーヒー（らしきもの）をすすっていると食堂の入り口から誰かを呼ぶ声がした。えらくか細い声だったので聞き間違いだと思ったが…

「ああ、フラン。悪いけどこっちまで持ってきてくれるかい？」

どうやら聞き間違いでは無さそうだ……ていうかおばさん、アズラって言う名前なのか。

フランと呼ばれた少女は、少女がもてるとは思えないような大きな荷物を抱えている。

荷物をカウンターに置くと少女の姿がしっかりと目に付いた。
ぼろぼろで洗濯もしていないようなＴシャツを着ており、頬はこけ、
顔には複数のあざが痛々しく残っていた。唯一立派だと言えるのは、
くすみながらも輝きを失わない金色の短髪だけだった。

「はい、じゃあこれ代金ね」

荷物を受け取ると、アズラさんがフランに銅貨を何枚か渡した。

「ありがとうございます」

フランは弱弱しく、だが深々とお辞儀をした。

「……………大丈夫？」

そのあまりにみすばらしい姿に気づけば俺は声をかけていた。

「はい？」

フランがきょとんとした表情でたずね返す。

「顔。あざ……………痛そうだけど」

指を刺し先ほどの発言がフランのあざに対するものと付け加える。
俺の言葉を理解したのか弱弱しく笑顔を俺に向けるフラン。

「はい……………なれていますから……」

そう言って食堂から出て行った。

「さっきの子……」

フランが見えなくなっってからアズラさんに尋ねてみた。

「フランかい？ あの子もかわいそうにね……いくら奴隷でもあの扱いはひどすぎるよ」

アズラさんが苦々しく答える。

「奴隷？ ここには奴隷制度があるんですか？」

奴隷制度。

世界史に疎い俺でも知っている悪しき風習だ。

日本には表向きその制度は無かったらしいが、世界的には奴隷制度が無かった国はほとんど無いと言える。奴隷輸出国を除いては……ではあるが。

「坊やの村には無かったのかい？ 少なくとも王国では存在してるよ。それでもフランほどの扱いはひどすぎるけど」

「やっぱり虐待ですか？」

顔のあざを見たときから薄々気づいていたが、アレは人に殴られたときにつくものだ。ジジイの鍛錬の時によくつけられたものだ。

「うん。あの子の主人はひどい飲んだ暮れでね、フランが稼いできたお金で酒を飲んであの子を殴りつけるのさ。奴隷は主人に逆らえないように魔法がかけられているからね」

つくづくここは異世界なんだなあと思う。

でも、日本における幼児虐待なんかも似たようなものなのかも知れないな。

そんなことを考えつつ、支払いを済ませ、俺は食堂を後にした。

第五話 最低ランカー

ギルド

そう、俺は今ギルドに来ている。

アズラさんが言ったとおり中は人数が少ない。

それでも数人の冒険者らしき強面が扉から入った俺を睨みつけている。

城の兵士といいこいつら冒険者といい、人を睨みつけるのがはやってるのか？

まあ、喧嘩は買いたくないので目を合わせずに受け付けに向かう。

「はいはいこんにちは！ 本日はどのようなご用件で？」

受付のお姉さんが話しかけてきた。すさまじいテンションだ。

「あ、あの……ギルドへの加入をお願いしたいの「はいはい！ ギルドへの登録ですね？」……です」

せつかちな人だな。

「はいはい！ それではどのギルドへの登録をご希望ですか？ 商業ギルド？ 冒険者ギルド？ それとも魔術ギルド？」

にこやかに説明してくれるところ悪いが早口すぎてあまり頭に入っていない。

「一応、冒険者ギ」はいはい！ 冒険者のご登録ですね？ それではこちらの書類にサインをお願いします。」……ハイ」

差し出された書類書類にサインをする。

……この女性は何にか急いでいるのだろうか。

書類には冒険者の心得のようなものが書いてあるが、たいしたこと書いていないので割愛する。

「できま」はいはい！ ありがとうございます」……」

「……ああの！ 申し訳ありません。これはなんと読むのですか？」

受付のお姉さんが書類を確認すると書類を指差したずねてきた。

佐山雄一

俺にはそう見える。

そういえばこの世界では言葉の意味は理解できるが、言語自体はこの世界のものだったな。

文字を読むことはできるが書くことはできないようだった。

「それはサヤマユーイチって読むんだよ。こっちの読み方だとユーイチ」サヤマ「はいはいユーイチ様ですね。かしこまりました」……」

「はいはい！ それではひとつ質問があります。ユーイチ様はギルドでのお仕事をなさったことはございますか？」

「「ないのですね？ 分かりました。それでは簡単に冒険者ギルドの説明をいたします」……」

す、すげえ！ ついに俺が一言も話していないのかぶせてきやがった！！

「冒険者ギルドではその人間の能力に合わせていくつかのランクを設定しています。この冒険者ランクはFランクから順にE、D、C、B、A、S、SSとなっています。ユーイチ様はギルドでのお仕事をされたことが無いようですので最低のFランクからはじめていただきます」

Fランクか……どの程度のものかは知らないが、初めてなんだしこんなものだろう。

「ランクを上げるためには基本的には自分と同じランクの任務を二十こなすこと、もしくは自分より上のランクをこなしたり、上のランクの魔物を討伐することでランクをあげることができます。ただ、注意していただきたいのは、一度に上がれるランクは三つまでと言うことです。それ以上のランクをこなしても三つ以上は同時に上がることはできないので気をつけてくださいね」

ふむ、簡単に言えば任務をこなせばランクが上がるということか。

「質問「はいはい！ 報酬についてですね？」……………」

なんだかさっきから心を読まれている気が「いえいえ！ 心なんて読んでいませんよ？」……

考えてることにしかぶせられた！！？

「ではでは！ 報酬につきましてはランクにみあったものをご用意

しております。Fランクなら最低給を、SSランクなら貴族になれちゃうほどの報酬です。もちろんランクが上がることに任務の危険性は上がっていきますが、その分いい暮らしができると思って頑張ってください」

さて、俺はほとんど話していないのだが説明が終わったようだ。

「あとあと！ 任務についてのご説明は任務を受けるときに担当のものがいたしますのでそのつもりで」

「あゝ、ギルドのことは分かったけど、ちょっといいかな？」

「はいはい！ 为什么呢？」

「この近くに長期間泊まれる宿屋とかってある？ できるだけ安いところがいいんだけど」

そうだ。現在の俺は根無し草、宿無し、住所不定無職なのだ。……無職ではもう無いが。

「はいはい！ あ、ユーイチ様はこの街に来られたばかりなのです。ね。冒険者の方はギルドのほうから格安で宿を借りることができます。今空いているのだと……この近くの食堂の上の部屋ですね」

「食堂？ もしかしてそれってアズラって言う人がいるところか？」

「はいはい！ そうですけど……お知り合いですか？」

なにせそこからここにやってきたからな。

「まあな。そこに行けばいいのか？ 家賃とかは？」

「えとえと、確か一月あたり銀貨1枚だったと思います。お金はアズラさんに渡してくれば結構です」

「ああ、分かった。ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして。それでは本日はこれで終わりです。本登録に時間がかかりますので、任務は明日から受けることができます」

ふう、やっと終わった。家賃も所持金でまかなえるし、当分は大丈夫かな？

こうして俺、フランカーユーイチが誕生したのである……かつこ悪い……

第六話 初任務受付

「ふうー、疲れたー」

食堂のアズラさんに宿の案内を頼み、広くは無いが一人暮らしには丁度いいサイズの部屋を割り振ってもらった。

その部屋のベットのの上に寝転がる。

いや、しかし、今日は色々あったなあ。

神様に手違いでこつちの世界に召喚されて、召喚された国では理不尽にも城から放り出された。

その後はなんだかんだで生活をできそうくらいにはこの世界のことを調べたけど……

あれっ？

俺、なんかやけに冷静だな……普通なら異世界に放り出された時点でもっと取り乱してもいいんじゃないか？元の世界に帰りたい！！とか。

なんかちゃっかりとこの世界に順応できちゃいそうだなあ。

目が覚めるとそこは住み慣れた施設の布団……ではなく、食堂の二階にある何の反発力も無くバカみたいに硬いベットの上だった。外を見るとまだ薄明るい程度の明け方だったが、人々はもうすでに働き始めている様子だった。

「やけに早いなあ」

俺はもう一度寝なおそうと思ったのだが、外が人でにぎわってくるとなんだか寝づらくなってきたのでしょうがなくベットから起き上がった。

「おはようございますっ」

「ああ、おはよう。眠そうだね」

二階から降りてくるとアズラさんを始め、食堂は多くの人で賑わっていた。

俺は寝癖の立った頭をかきながらカウンターに座る。

「みんなこんな朝早くから活動し始めるものなんですか？」

「ん？ 早いっていつてもここにいるやつらは少し寝過ぎたくらいはやつらばかりだよ？」

今の時間帯でも遅いくらいらしい。

まあ、昨日の夜もかなり早い時間に街の機能がストップしていたから、みんな早寝早起きなのかもな。

……ああ、照明器具が発達していないから夜遅くまで活動できないのか。

「そうなんですか……あつ、なにか軽い朝食をもらえますか？」

「はいよ！」

大勢のお客さんの注文に駆け回りながらも威勢よく返事をしたアズラさんだった。

「さてと、そろそろギルドに行ってみようかな」

朝食を平らげた俺は、いまだ忙しそうに駆け回っているアズラさんにお金を置いておくと言ってから食堂を後にした。

ギルドについてみると、昨日来た時よりも大勢の人間であふれ返っていた。

「うわ、すげえな」

受付までたどり着けるだろうか…

待つには待ったが、予想よりも早く受付に到着できた。

「あの「はいはい！ あつ、ユーイチ様ですね。冒険者ライセンスの発行できてますよ。このライセンスですが、無くしてしまうと銀貨1枚で再発行となってしまうますから気をつけてくださいね。あと冒険者ギルドはこの建物の反対側にありますのでそちらで任務の受付を行ってください」…」

だから俺は一言も話していないんだって！

本当に簡単な説明をした後、すぐに列からどかされた。受付の女性はもうすでに次の人に説明を行っている。

まあいいや、これで俺も晴れて冒険者の仲間入りだ……フランクだけど……

指示された場所、建物の反対がわに行ってみると、表側と違いやけに人が少なかった。

あれ？

場所間違えたかな。

周りを見渡してみると受付には冒険者ギルド受付、と書かれていた。どうやらここであっているようだ。

「あの、冒険者ギルドの受付ってここでいいんだよね？」

受付にいる女性に話しかけてみた。

表の受付の女性は中身はともかく外見はOLと言った感じの色気……ゲフンゲフン……大人な女性といった感じがしたが、今目の前にいるのは、おそらく俺よりも年上だろうがなんというか……初めてバイトをした大学生？のようなあどけなさの残る女性であった。

「あつ、はい。こちらで任務の受付を承っています。任務の登録ですか？」

「ああ、初めてだからよく分からないけど……」

「初めての方ですか？ では簡単に説明をさせてもらいますね……あつ、紹介が遅れましたが、私は冒険者ギルドで受付をしておりますアルテナ、と申します」

受付の女性が名乗った。ああ、そういえば表の受付の女性の名前は分からなかったなあ。

「うん、俺はユーイチ〃サヤマだ。よろしく」

「ハイ。よろしくお願いします。それではまずライセンスの確認をさせてもらえますか？」

ライセンスを手渡す。アルテナはライセンスをみながら脇にある書類に目を通している。

「ところでさ、このあたりってやけに人が少ないけどどうしたの？
表側はあるのに人がいたのに」

「今の時間帯は冒険者の皆さんはまだ寝ている時間なんですよ。基本的に
お昼前くらいに来る方が多いですね」

ああ、だからアズラさんが昼は混む時間帯だっって言ってたのか。

「はい。ユーイチ様ですね？ 確認いたしました」

ライセンスを返される。

しかし、表の受付でも気になっていたのだが、このユーイチ様というのはどうにかならないのだろうか、よそよそしいし、なにより気持ちが悪い。

「あのさ、そのユーイチ様？ っていうのやめにしない？ なんか背中がムズムズするし……普通にユーイチって呼んでくれればいいから」

アルテナは意外……というより珍しいものをみるような目で俺を見返した。

「は、はい。それではユーイチさんと呼びますね」

まださん付けか、まあ、ちょっとはましになったかな？

「それではユーイチさん。任務についてご説明しますね。ユーイチさんは冒険者ランクがFなので、こちらが受けることができる任務になります」

採取任務

ポーター草採取 報酬 採取量に比例。ただし最低5枚は採取すること。

鉄鉱石採取 報酬 採取量に比例。ただし最低50グルクは採取すること。

討伐任務

フィルウルフ討伐 場所 アガルの森 五頭討伐 報酬 銅貨5枚。
ただし五頭以上討伐の場合一頭につき銅貨1枚を上乗せ

ブルラビット討伐 場所 アガルの森 三頭討伐 報酬 銅貨2枚。
ただし三頭以上討伐の場合一頭につき銅板5枚を上乗せ

ふむ、採取任務と討伐任務っていうのがあるのか……この『グルク』っていうのはこの世界の重さの単位かなんかか。

「Fランクの任務ですと普通の商人でも参加できる程度なので、割と簡単にこなせるものばかりになります。ちなみに討伐任務の場合、指定された部位を持ち帰ることにより討伐数を確認します。さらに持ち帰っていただいた部位はギルドのほうで買取をさせていただきますのでご安心ください」

「なるほど。効率よく金を稼ぐには討伐任務のほうがいいのかもしれないな……この部位っていうのが壊れたり回収できなかった場合はどうすればいいんだ？」

例えば部位ごと吹っ飛ばしたり、手の届かない場所に落としてしまった時だ。

「はい。その場合ですと一度ギルドまで戻っていただいて、確認任務というのを依頼していただく必要があります。ただ、こちらは依頼になりますのでお金をはらっていただく必要がありますが」

つまり、他の冒険者を雇って確認に行かせるわけか。

「ん、金を稼ぎたいからできれば討伐任務にしたいけど…武器が無いからなあ。とりあえずは採取任務にしてくか」

「え？ ユーイチさん、武器持っていないんですか？」

「あれ？ なんか問題あった？」

「え、えーっとですね……たとえ採取任務であっても街の外に出る場合は武器の携帯が義務付けられているんです。馬車とかに乗るのならともかく任務で外に出る場合は武器は必須ですよ？」

おっとっと、困ったことになったぜ。

武器が必要つつても買う金が無い。

というより金を稼ぐために任務がしたいのに任務をするためには武器が必要って。

武器ってどのくらいするんだろう、今いくら持ってたっけ、

所持金 銀板8枚銅貨9枚銅板5枚

こ、これはちょっと厳しいかもしれない。

昨日前払いで家賃払っちゃったからな。

「ち、ちなみに武器って一番安いのでいくらくらいするの？」

恐る恐る聞いてみる。まあ答えは分かりきっていたが。

「新品だと安くても銀貨8枚くらいはしますね。中古だと大体銀貨3〜4枚といったところでしょっか」

「さ、最低でも銀貨3枚……俺、今銀板8枚しかないけど」

アルテナが気まずそうな顔でこっちを見ている。そりゃそうだろう。ギルドに登録しながらも仕事ができないかもしれない人間が目の前にいるのだから。

「あ、えーっと……あつ、でも雑貨店とかだともう少し安くなるかもしれないよ！……多分」

ああ、この反応だと雑貨店でも俺の所持金じゃ足りないかもなあ。

思わぬところで躓いたな。

異世界に手違いで召喚され、勇者ではないと放り出され、さらには働くことさえできない俺。

さあ、ここで某ライトノベルの主人公の口癖を真似てみよう。

不幸だ————！！！！

第七話 おお！ テンプレ！

さて、困ったことになった。

ギルドに登録したはいいものを武器がないと仕事ができない。しかも武器を買う金も無い。

「はあ、これからどうすっかな」

俺は今、食堂に戻りカウンターに突っ伏している。

「なんだい？ えらく沈んでるねえ」

「いや、実はですね……」

ギルドで説明されたことをアズラさんに話す。

「なるほどねえ、武器ね………イスカの店なら安いのが置いてあったと思うけど……」

「イスカ？ 誰ですかそれ？」

「昨日坊やに教えた雑貨店があるだろう？ あそこの坊やがイスカって言うんだよ。大層な珍しい物好きでねえ、珍しいものならガラクタでも高値で買い取っちゃうけど、ガラクタなんて売れないだろう？ だから結果的に売り物の値段が下がるんだよ」

そつえば昨日も財布（セール品で千円）を高値で買ってくれたな。財布見たとたん目の色変えてたし。

てなわけで雑貨店に到着。

「イスカ！ ちょっと聞きたいんだが……」

イスカがヒビの入った眼鏡の向こうから俺を見ている。

「ああ、昨日のお客さんですね。あれ？ そういえば僕、あなたに名乗りましたっけ？」

「ああ、食堂のアズラさんからの紹介でな。ちなみに俺はユーイチって言う。っと、それよりも、この店に武器って置いてあるか？ できるだけ安いのがほしいんだけど」

「武器ですか？ そうですね……これなんかどうですか？ 切っ先が欠けているので銀貨1枚でいいですよ？」

銀貨1枚。

……微妙に足りないな。

「銀貨1枚………も、もう少し安いのは無いのか？」

「んー、そうですね……ちなみにどれくらいなら払えますか？」

「……ぎ、銀板8枚くらいならなんとか」

「ぎ、銀板ですか……えーっと………」

俺の無茶な要求に答えようとイスカが雑貨の山を崩しながら武器を探している。

……また埋まるんじゃないだろうな……

「あつ、これなら銀板5枚で売れますね。ただ………」

「ただ？」

「これ拔けないんです。多分刀身がさび付いちゃってるんだと思います」

イスラが取り出したのは、鞘に黒いベルトが巻きついた剣だ。ただ抜けないらしい。

そりゃ安いだろう。抜けない剣なんてただの棒だからな。

「どれどれ、フンッ……………」

カキンッ

予想外というか、案外簡単に剣は抜けた。

しかも刀身にはイスラの予想をはずし、さびの一つもついておらず、刀身全体が黒みがかったただだった。

……………なんで今まで抜けなかったんだ？

「ユーイチさんって、見た目と違って怪力なんですネ……………」

イスカが意外そうに俺と剣を見ている。

「いや、大して力入れなくても抜けたと思うぞ？　えらくスムーズに抜けたし」

確かに剣を抜くときに力はこめたが、力で無理やり抜いた感触ではなかった。

「……………あつ、もしかして抜けたから値段が上がっちゃうとか、ある？」

「ああ、いえ、元がガラクタなので値段は銀板5枚でかまいませんよ」

『ああん！？　誰がガラクタだこのクソガキ！！　しかも俺様の価値がたった銀板5枚だと！？　最低でも白金貨一万枚は積みやがれ！！』

.....ん？

「イスカ……今しゃべった？」

「い、いえ、僕は何も……」

『どこ見てんだよガキ共！ 俺はこつ……』

チンッ

俺は剣を鞘にしまった。

「これ返すわ……」

イスカに剣を返そうとするが、いきなり剣がカタカタと震えた。

「……………ッ！……………！」

俺は剣を抜いた。

『わあ！ うそうそ！ 冗談だから、とりあえず俺様の話を聞け！』

まあ、あれだ。テンプレと言っべきだろう。

剣がしゃべりだした。

第八話 魔剣 テネブラエ

「すごいすごいすごいすごいすごいすごい……!!!!!!!!」

『のわあああ————!!!!!!』

剣がしゃべれる。

そんなありえないことが目の前で起こった。

驚きこそしたが、まあ、異世界ならありえるのかもな。と思ったのだが、こつちの世界でも大変珍しいものだったらしい。

さつきから剣がイスカに弄繰り回されている。

昨日財布を見せたときよりもさらにテンションが上がっている。

「これ魔剣ですよーイチさん!! しかもユーイチさん以外に抜けなかったということはあの『聖剣』エクスカリバーと同じ伝説級の魔武器です!!」

『だ、だからいい加減触るのをやめろ!! あ、そこは敏感なところ……あふん……!!』

なんだか気持ち悪い声が剣から聞こえ始めたのでそろそろイスカを止めることにした。

「イスカ、そろそろ離してやれ。これじゃ話が聞けない」

何とか剣からイスカを引き離すことに成功した。が、いまだに興奮冷めやまぬといった風に剣を見つめ続けている。

『き、気色悪いガキだな……まあいい、オイ! 黒髪のがき! お前が俺様を抜いたのか?』

黒髪のがき……多分俺のことだろうな。イスカは緑がかった髪の色をしてるし。

「ん？ ああ。一応俺が抜いた。だが俺の名前はガキじゃない、雄一だ」

『あつはつは。それは失礼した。お詫びにユーイチ、お前にこの俺様、魔剣『テネブラエ』を所持することを許す。存分に力を振るうがいい！』

「……………なんかエラそうだし、イラネ」

「『えつつつつつ！！！！！？』」

イスカと剣……テネブラエつつたか？とにかく一人と一本が同時に驚いた。

なんか上から目線だし、一人称『俺様』だし。

「正気ですかユーイチさん！ 伝説級の魔剣って言うのは扱えるのは世界中でたった一人なんですよ？それがユーイチさんだったというのとはとてもない奇跡なんです！」

『そ、そうだぞユーイチ！ それにお前さん武器が手に入らないと困るんじゃないのか！？』

確かに武器が手に入らないと仕事ができなくて困る。

だが、しゃべる剣が欲しいかと聞かれたなら答えはNOだ。

「確かにそうだけど、これが珍しい魔剣とやらと分かった以上、店側としてももつと高値を付けるんじゃないか？」

何しろ伝説級の魔剣なんてものなら初めにテネブラエが言ったよう

に白金貨一万枚はしてもおかしくないだろう。あいにく俺は銀貨一枚の剣にも手が届かないほど金欠だ。とてもじゃないがそんな金は出せない。

「いえ！ その心配はありません！ この国の法律では魔剣に選ばれた者はその身分がなんであれ、その人間の所有物であらねばならない。とあります。ですから銀板5枚と言わずこの魔剣は無料で差し上げます！」

『おお！ 太っ腹だ！ 眼鏡の兄ちゃん。ホラ、眼鏡の兄ちゃんもこう言ってくれているんだ、遠慮せずに俺を受け取れ！』

んー、確かに無料って言うのは魅力的だ。しゃべる剣っていうのは気持ち悪いが、それを除けば超高性能の剣らしいし、ここは……………

「だが断る！」

断ってみる。

「『なんで！！？』」

再び一人と一本がハモる。

普通ならここで受け取るのが常識だろう。

しかし、俺はある言葉が耳に入ったのだ。

『魔剣に選ばれた者はその身分がなんであれ、その人間の所有物であらねばならない』

逆に言えば所有しなければ罰せられるということだ。

これは俺だけではなく、イスカにとっても弱みになる。

なにせ俺が「この人が魔剣を譲ってくれなかったんです！」と裁判

官（いるかは不明だが）に泣き付けば罰せられるのはイスカのほうだからだ。ケケケ。

「俺にテネブラエをもらって欲しくば何かおまけを付けてもらおうか！」

「『えええええええええええ！！！？』」

「ちよつとひどいですよユーイチさん！ 僕の店を潰すつもりですか！ 見損ないましたよ！」

失礼な。

合理的と言ってもいいものだ。

それにこれはイスカにとつても悪いことではない。

「まあまあ、イスカにとっても悪い話じゃないぜ？」

そう言ってイスカ肩に腕を回し、耳元にこうつぶやいた……

「考えてもみる、この店で伝説級の魔剣が見つかったと噂を流せば、もしかしたら他にも」って客が増えること間違いないぞ？ そうすれば売り上げもうなぎの滝登り状態になるにちがいない（多分）」

そうすればおまけ分もすぐに取り返せるだろう。

「う、ううううー。わがりました。すぎなものでもってくださ

泣かせちゃったよ。

まあいいか、くれると言っているのだ。しょうがないからもらってやろう。

「おい、テネブラエ。この中で使えそうな防具ってあるか？ 俺には良し悪しが分からないからな」

『あ、あんたも鬼だな。あゝ、この中でつてえと……その箆手と胸当てと……盾……は必要ないか、俺様両手剣だし。じゃあそのすねあてだな』

他にも選ぼうと思ったが、イスカがガチで泣き出しそうだったのでこれだけにした。

箆手、胸当て、すねあてを装着してみると制服には合わなかったのか、少しぐらつく。

でもまあ、この程度なら大丈夫だろう。

おお！ 冒険者っぽくなったんじゃないか？

第九話 いざ出陣！

「アルテナ！ 任務の登録をしに来たぞ！」

俺は意気揚々とギルドに来ていた。

もうすでにお昼くらいになっていたため、冒険者の数は少なかった。恐らく昼飯を食べに行っているのだろう。

ギルドに登録をして、武器を手に入れた。やっと任務を受けることができる。

「ああ、ユーイチさん。武器をお買いになられたんですね。あつ、防具も買ったんですか？ お金のほうは大丈夫でした？」

「うん。実はさ……」

俺はこののあらましを説明するため、テネブラエを抜いた。

『んあ？ 何だよ人が寝てるときに』

テネブラエがしゃべった。とりあえずお前は人じゃなくて剣だろ。っていうかお前寝るのかよ！！

「あ、あの……これって……」

「そ。魔剣。色々あってこの防具と一緒に手に入ってたんだ」

そう言つてテネブラエをかざして見せた。

『はっはっは。崇めてもいいぞ姉ちゃん』

あほか。

「す、すごいですね!! 魔剣なんて! 私尊敬しちゃいます!!」

あれ? 本当に崇めちゃってるよ。

しかも驚いているのはアルテナだけではない。

その場に居合わせた冒険者も一様に驚いている……………そんなにすごいものなのか。

「ま、とにかくこれで任務受けられるよな?」

「あ、はい。それでは任務登録についてのご説明をしますね……………まず、あちらをご覧ください」

アルテナが指差す方向を見ると、そこには巨大な掲示板が掛けてあった。

「あちらに冒険者の方が受けられる依頼書が貼り付けてあります。

そこでご希望の依頼を選んでいただき、こちらの受付で受理されれば任務の登録となります。なお、依頼書には受理できる冒険者ランク、依頼物の特徴、報酬などが記載されています。中にはパーティを組んでの護衛任務なども含まれますので、お一人の場合は受理できませんのでご注意ください」

「とりあえず、あつちの依頼書をこっちに持ってくればいいんだな?」

「はい」

ふむ、初任務だし簡単な採取任務とかの方がいいかな?

掲示板に向かおうと歩き出した俺だったが、数歩歩かないうちに何かにぶつかった。

目の前に広がる男の胸板……まあ、立派なお体なこと。

「よお、兄ちゃん。お前いい武器持ってんじゃねえか！」

うわぁ……これもテンプレだな……

「あゝ、何か御用ツスか？」

まあ、予想はついているが……

「ん？ お前みたいなひよろいガキにはそんな魔剣はもつたいな
いって話だ」

はい！！ 予想通り！！

「つまりかつあげってやつだな？ どこの世界でも代わり映えしね
えな。あんたみたいなチンピラ」

と言つてもここまでのテンプレ、元の世界でもドラマの中ぐらいで
しか見たことは無いが。

「分かってんじゃねえか！ ならとつとよこせ！」

チンピラがテネブラエに手を伸ばしてきた。

「誰がお前なんかやるか！ 汚い手で触んなー！」

俺は男の手を弾いた。

普通に考えれば当然の行為だろうが、チンピラにはこれが癢に障つ
たようだ。

「ああ！！？　ふざけんなガキ！！　痛い目みねえとわかんねえのか！！」

だからテンプレはもういいって！！

「おいお前ら！　囲め！！」

チンピラが声を掛けると、ギルドにいた全員（数にして3人）が俺を取り囲んだ。

威勢はいいが一人では喧嘩もできないチンピラ。これもテンプレだ。ちなみに、チンピラが四人に増えたためこれからは時計回りに、チンピラ一号〜四号と呼ぶことにする。

「やれやれ……」

俺は深くため息をする。

まったくめんどくさい事をするやつらだ。

しかも周りに止めようとする人間はいない。ギルド内にいたのが全員チンピラだったことと、受付のアルテナがオロオロとしているだけからだ。

「てめえらやつちまえ！！」

チンピラ一号が怒号を上げると、俺を取り囲んだ三人が一斉に殴りかかってきた。

だが心配ない。

なぜなら、俺は古武術が使えるという設定だからだ！！

まずチンピラ一号の顔面に右の肘鉄を喰らわせる。そしてそのまま回転し、左手でチンピラ四号の右ストレートを払い、顎に掌底を打ち込む。

チンピラ三号には足払いを打ち込み、バランスを崩したところを首に手刀を打ち込んだ。

あっという間に三人の屍（死んではないが）の山が出来上がった。

もちろんかなり手加減はしたが……

「……なっ!!」

チンピラ一号が絶句している。

無理も無い。自分が指示した後、十秒も経たないうちに取り巻きが三人もやられたのだ。

「こ、このやろう!!」

チンピラ一号が剣を抜いた。

構え自体は隙だらけではあるが、その体格（俺よりも一回り大きい）から来る威圧感はなかなかのものだった。

「おいおい！　こんな所で抜く「ううー」るせえええええ!!」

すさまじい雄たけびを上げて切りかかってきた。

と言っても俺から見れば隙だらけであり、難なく剣をかわして懐にもぐる。

「はっ!!」

がら空きの腹に正拳を放つ。

先ほどのチンピラ達よりも少し強めに打った。が、それでも手加減はしていたため、次の瞬間に起こったことに、チンピラ一号どころか俺さえも驚くことになった。

チンピラ一号が宙を舞っていたのだ。

……しかも十メートルほど先まで。

チンピラ一号は宙を舞った後、待合室の机や椅子を巻き込んで床に落ちた。

「……………なんだこれ？」

俺の倍近くの体格の男が吹っ飛んだ。
俺の放った拳のせいだ。

偶然……と言うことはないだろう。
ということは、俺にそれだけの力があつたと言うことだろう。だが、
もともと俺はバカ力ではない。
ならなぜか？

パワーアップしたという事か？

ああもう！ またテンプレだ！！ 多様すぎだろう！！

思い当たる原因は二つある。

一つはこの世界に来たことが原因。

もう一つはテネブラエを持ったことが原因。

とりあえず一つ確かめてみよう。

「おいテネブラエ！ このバカ力ってお前のせいか！？」

『いや？ 俺に身体能力向上の能力はついていない。それはユーイチに元から備わっていた力だろう？』

どうやら魔剣の能力ではないようだ。

と言うことは、異世界に来たことが原因か。

「ゆ、ユーイチさん！！ 大丈夫ですか？ い、一体なにが……」

アルテナが俺に声を掛けた。

現場の惨状に驚いている。

そして、アルテナの後ろには屈強な男が二人ついてきている。

「あ、この人たちはギルドの用心棒です。寝転がっている人たちです。拘束してください」

アルテナが指示すると、慣れた手つきでチンピラたちを拘束、連行して行った。

「ああ、いや、チンピラを殴ったら思いのほか吹っ飛んじまった。悪いな。ギルドの備品壊して」

机や椅子を壊してしまったことを謝罪する。

「いえ、非はあちら側にありましたからあの人たちに弁償させます。でも驚きましたよ、あの人たち、ランクこそCランクですが熟練の冒険者なんですよ？ ユーイチさんがこんなに強いとは思いませんでした」

俺もこんなに強くなっているとは思わなかったよ。

「あゝ、まあな。とにかく任務の受付してもらってもいいか？」

「あ、はい！ どれにしますか？」

俺は依頼書に目を向けた。だが、掲示板に貼ってあるものではなく、床に散らばっているものに、だ。

なぜなら、先ほどの騒ぎで掲示板の依頼書が吹き飛んでしまい、床に散乱してしまっていたからである。

「えゝつと……任務任務ゝつと……」

依頼書を掻き分けていくと一枚の紙が目に入った。

討伐任務

ファイルルフ討伐 場所 アガルの森 十頭討伐 報酬 銀貨1枚
銅貨5枚。ただし十頭以上討伐の場合一頭につき銅貨1枚を上乗せ
冒険者ランクD 確認部位 牙二本

「これって受けられる？」

アルテナに依頼書を見せる。

始めは安全な採取任務をしようと思っていたのだが、先ほどの喧嘩

で俺の古武術がこの世界でも通用するものだとか確信したため、討伐任務をすることにした。

「はい……ランクDのフィルウルフ討伐任務ですね？ ユーイチさんはFランクですけど、その3ランク上、ランクCまでは受けることができますので大丈夫です」

そういつて受付に行くアルテナ。

しばらくすると俺のいた場所に戻って来た。手には依頼書とは違う紙が握られている。

「はい。こちらが任務の場所と討伐対象が書かれた受注書になります」

受注書

対象 フィルウルフ十頭 場所 アガルの森 確認部位 牙二本

「分かった。んじゃサクツと行って来るわ」

さて、なんだかんだでようやく初任務だ。腕が鳴るな。

いざ出陣……！

「アルテナ、アガルの森ってどこ？」
.....
出陣.....

第十話 アガルの森で出会った萌え

アガルの森

モントウ王国首都グロリアの北門から歩いて三十分（多分）
その中で俺は……………狼と戦っていた。

「ぬおおおー！ー！！ 二十一匹目え！！」

『ユースケ！ 左からもう三匹来るぞ！』

ああ、またかチクシヨウ！！

依頼は十頭で十分なのになんでこんなにいるんだよ！

「あゝ！ あと何匹いるんだ！？」

『多分あと十匹はいるぞ』

「がぁぁー！！！」

俺は無心に剣を振った。

何とかすべてのフィルウルフの討伐に成功。その数三十三匹。

フィルウルフは普通、十頭くらいで群れを作るそうで、俺が当たったのは規格外に大きな群れだったようだ。

「っ、疲れた…………」

『おう！ ご苦労さん』

死闘は約三十分続き、太陽が傾き始めている。
疲れるわけだ。

『きやああああー！ー！』

戦いに疲れ、地面にへたっている俺の耳に女の子らしき悲鳴が聞こえてきた。

「ん？」

悲鳴が聞こえた方向を見ると案の定女の子の悲鳴だった。しかも、フィルウルフの生き残りに襲われそうになっている。さらに五十メートルほど離れているが、女の子には見覚えがあった。ぼろぼろの服、やせこけた頬、痛々しいあざに金髪の髪の毛。あれは……

「フラン！！？ くっ……………！」

距離的に助けるのは間に合わない。

とっさに俺がやったことは投げることだった。

何を投げたかって？

テネブラエを投げたのさ！

『おおおおおおお！？』

一直線にフィルウルフに飛んでいくテネブラエ。

ギャンツ！！

悲鳴が聞こえた。

だがそれは、狼に襲われるフランの声ではなく、剣が突き刺さり絶命する祭に放ったフィルウルフの断末魔だった。五十メートルの遠投。よく届いたな。

「大丈夫か！？」

すぐさまフランの元に駆け寄る。
フィルウルフに突き刺さったテネブラエを抜くと、周囲を警戒する。しかし、周囲にはもう獣の気配はなくなっていた。さっきのが最後の一匹だったのだろう。

「ふう」

俺が安堵のため息をもらす。
だが、一人お冠のやつがいたようだ。

『こらユーイチ！ なに人のこと投げてんだよ！ 剣は切るものだ！ 投げるもんじゃねえ！！』

テネブラエだ。

「しょうがねえだろ！ 緊急事態だったんだから！！」

俺とテネブラエが言い争う。

遠目から見ると俺が一人で騒いでいるように見えるシュールな画だ

ろっ。

「……あつ、あのっ！」

「『ん？』」

フ란の声に我に返る二人。

「た、助けていただいてありがとうございます！-」

深々と頭を下げるフ란。

「ああ、気にしなくてもいいよ」

うん。紳士だなあ俺。

「いえ！ ぜひ何かお礼をさせてください」

フ란は頭を下げたまま、懇願するように俺に頼んだ。

「うーん、って言ってもなあ……」

『それならフィルウルフの牙を取るの、手伝ってもらえばいいんじゃないか？ あの数だと時間かかるだろ』

「ああ、じゃあそれで」

女の子には重労働かもしれないがフ란は快く引き受けた。

「は、はい！ 一生懸命お手伝いします」

ようやく顔を上げ、笑顔を俺に向けるフ란。

うん。女の子の笑顔はきれいだなあ。頭の上の耳も元気よく動いて

るし。

……頭の上の耳？

そう、フレンの頭の上には耳がついていた。もちろん人間のそれとは違い、毛に覆われた、いわゆる猫耳と言っやつだ。

金髪猫耳少女

これは……あれだ、

「猫耳萌えっ!!」

第十一話 牛!!

「ビストロイド
獣人族？」

「はい。ユーイチ様の村にはいなかったのですか？」

俺は今、フランとともに帰路についている。

フィルウルフの牙を二人で取りきると世間話をしながら森を歩いた。ほとんどがテネブラエに関する質問だったが……

その中でフランが、ビストロイド獣人族という種族であるという説明があった。

「うん。俺のいたところには普通の人間しかいなかったよ」

もともと秋葉原あたりに猫耳少女ぐらいいは生息していたが。

「珍しい場所なんですね。ビストロイド獣人族は数が多いのでどこにでもいるはずなのですが」

不思議そうな顔をするフラン。

「それはそうと、フランはなんであんな所にいたんだ？ さすがに女の子一人じゃ危ないだろう」

「そ、それはですね。ご主人様に命じられてポーター草の採取任務に来ていたんです」

確かにフランは大きな籠を背負っている。
中にはポーター草？が敷き詰められている。

正直、フランのような細かい少女が持てる重量のようには見えない。

「すげえ採ったなあ、重いだろそれ。持とつか？」

「い、いえいえ！ 助けていただいた上にそんな……それに獣人族^{ビストロイド}は人間に比べて力が強いのでこのくらいなんともないんです」

なるほど、アズラさんの店に運んできた重そうな荷物を持つことができるのはそういうことか。

「ふ〜ん……けどいくら力があるからって、一人でこんな所に遣すなんてお前のご主人つてもひどいことするよなあ」

一応フランは短剣のようなものを装備している。

人間程度ならそれでも何とかなるだろうが、狼が一度に複数襲ってきたりしたらとてもじゃないが身を守れない。

「そ、そんな事は………ない………です。私は奴隷ですから………命じられたこと絶対です」

口調から察するに、フラン自身も納得できていないようだった。当たり前だ。

俺だったら殴るレベルに理不尽な話だし。

「だからって………ん？」

いつの間にか森の入り口にまできていた俺たち。

だが、目に入ったのは森に入ったときとは違う異様な光景。

入り口付近の木々は焼け焦げ、目の前に広がっていた草原はすべて焼け野原になっていたのだ。

「なんだ……これ……」

呆然とした。

俺とフランは同じ表情をしていた。
それほど光景が変わっていたのだ。

『ユーイチ!! 避ける!!』

テネブラエの言葉に我に返ったと同時に、俺はフランを抱えて飛んでいた。

我ながらすさまじい跳躍力。

「うわわわわわ!!」

フランが怯えているのか、痛いくらいに俺にしがみついてくる。役得か……

十メートル近い高さにまで上がったところでようやく状況が理解できた。

先ほどまで俺がいた地点が炎に飲まれており、その中に巨大な牛がたたずんでいたのだ。

「あ、あれイグニスバイソンですよ! なんでこんな所に……」

イグニ……なに? とりあえずまた面倒ごとに巻き込まれたってことか。

とりあえず着地をし、しがみついているフランを地面に下ろす。すると目が合った。

何に？

……牛に。

ばつちりとアイコンタクトをかわした俺と牛。

やはりと言うか、牛は俺たちに突っ込んできた。

正面から見据えると、牛のでかさが正確にわかった。

体長四、五メートル。高さ三メートルと言ったところだ。

象並みの牛。でかい角。しかもその体にはなぜか炎が纏ってあった。

「下がってる!!」

フランを横に突き飛ばし剣を構える。

でもさ、実際に対面すれば分かると思うけどさ。怖いぜ？ これ。

「うおおおおおっ!!!!」

俺、再び跳躍。

巨大な牛を飛び越え牛の後方に着地する。

目標を見失った牛は五十メートルほど突き進んだ後動きを止めた。

「おい！ なんだあの馬鹿でかい牛は！！ なんか火いついちゃってんだけど!!」

精神的にも肉体的にもな……

「あれはイグニスバイソンって言う魔獣です！！ 普通ならこんな所にいないはずなんですが！」

木陰に隠れながらフランが答えてくれる。っていつかいつの間に隠れたんだ？

「魔獣！？ また物騒な！ 何だそれ！？」

『魔獣ってえのは魔力を扱える獣のことだ。イグニスバイソンは魔力を炎に変換することができる！』

ああ！？ 俺も使えない魔法を獣ごときが使ってやがるだ！？
うらやましいじゃねえか！！

つと、牛がまた突っ込んできた。

かなりのスピードだがさっきのでもう慣れた。
突っ込んできた瞬間に横に飛び、牛に切りかかる……が、

「だあー！ 熱っちゃっちゃ！ ！」

牛が纏う炎に阻まれた。

しかも胸当てが熱せられたため、胸がやけどしそうだ。
胸当てを慌ててはずす俺。やけどこそしていないようだが、下に着ていたYシャツが焦げてしまっていた。

「おい！！ 防げてねえぞ！ この防具！！」

テネブラエに怒鳴りつける。この防具を選んだのはこいつだ。

『物は良かったんだが、耐熱処理がしてなかったんだな』

『冷静に言っな！！ 危うく大やけどだ！！』

もつと文句を言いたかったのだが、牛がそうはさせてくれない。
再び突っ込んできた。

『お詫びと言ってはなんだが、そろそろ俺の力を見せてやるよ』

そうテネブラエが自信満々に（いや、表情は読めないが）言い放った。

「ああ？ 何だそれ？」

『ユーイチ、さっきと同じように避ける。ただし、避けたと同時に切りかかれ』

「おいおい！ それじゃあ剣が届かないだ『来たぞ！！』」

ええい！ ままよ！

考える暇もなくテネブラエの言うとおりにする。

……………すると、剣は届かなかったはずにも関わらず、身にまとっていた炎がテネブラエに吸い込まれていった。

！？

まさにそんな表情をするイグニスバイソン。

俺も同じ気持ちだよ。

「なんだこれ!？」

炎を吸い込んだ、だけではなくテネブラエの変化にも驚いた。

黒くくすんでいた刀身が鮮やかな赤色になっていたのである。しかも炎を模したような紋様まで浮かび上がっている。

『これが俺の能力!「吸収」だ!! しかもこれだけじゃねえぞ?俺をイグニスバイソンに向かって振ってみろ!』

俺はテネブラエの言うとおり、炎を失ってキョトンとしているイグニスバイソンに向かって剣を振った。

三十メートルほど離れていたのだが関係なく、テネブラエから放たれた炎がイグニスバイソンへと襲い掛かった。しかも最初に牛が纏っていた炎よりも強力になっていた。

ぶおおおおおおー!!

牛が雄たけびを上げる。

「す、すげえ! お前本当に魔剣だったんだな!」

見直しちゃったよ。

『はっっはっは。これが二つ目の能力「放出」だ。しかも増幅機能付き』

俺は再び黒くくすんでしまったテネブラエをまじまじと見る。

だがそれは地響きによって打ち消された。

炎をともに喰らったはずのイグニスバイソンが突っ込んできたのだ。

「どわあああー!!」

辛くもかわす俺。

「おまつ！ 全然効いてねえじゃねえか!!」
『そりやお前、もともと炎を纏ってたんだから効かねえだろ。むしろ増幅されて強くなった?』

「.....」
『.....』

み、見損なっただぜ.....

「ぬおおおー!!」

また突っ込んできた牛をまた避ける俺。
何回目だよ!!

「ゆ、ユーイチさん!!」

フランが心配そうに呼びかける。

「だ、大丈夫！ 一応攻略法を見つけた!!」

そう。攻略法を見つけた。

テネブラエは当てにならないが剣の能力は役に立ちそうだ。

俺は牛の正面に立ち、テネブラエを鞘にしまった。

牛が突っ込んでくる。

剣を鞘に収めたまま構える。

ジジイに教わったのは拳術だけではなく剣術も習った。
その中の一つ。

居合い抜き

牛をギリギリまでひきつけ、右足を牛の左側に踏み込み剣を抜く。
剣は届かず、炎を払っただけだ。

そこに左足を戻し、剣を切り返し……牛の首に振り下ろした。

居合い・燕返し

うん。中二病くさい……

ともあれイグニスバイソンは体と首が切り離され、絶命した。

第十一話 牛!!（後書き）

最後にユーイチの居合い抜きが炸裂します。

両刃の剣で居合いができるかは分かりませんが……そこはフィクションと言つことで。

第十二話 フラゲ？（前書き）

どうもお久しぶりです。

実は先日パソコンがぶっ壊れまして、一週間ほど修理に出していました。

できる限り更新をしていきますので、またよろしくお願いします。

第十二話 フラゲ？

「あらよつと」

ギルド。

その受付に俺は頭を置いた。
だが俺の頭というわけではなく、先ほど狩ったイグニスバイソンの頭だ。

「きゃああああー！！！」

アルテナが悲鳴を上げる。

「アルテナ、これって換金できるか？」

巨大な牛の頭ごしに俺が声をかける。

「え！？ あつ！ ゆ、ユーイチさん！？ 驚かせないでください
！！心臓が飛び出るかと思いましたよ！！！」

アルテナが驚くのも無理はない。いきなり目の前に牛の頭が置かれ
たら誰だってビビるだろう。

ここまで持ってくるにあたっても、周りの奇異の目にさらされてい
たし。

「悪い悪い。任務に行ったら襲われてさ、ついでに倒しておいた」

半泣き状態のアルテナに説明をする。

「もう、ユーイチさんたら……ってあれっ？ これイグニスバイソンじゃないですか！ 頭ごと持ってきたんですか！？」

「ああ。角が固くて折れなくてな」

フランがイグニスバイソンの確認部位は角であると教えてくれたのだが、あまりの硬さにテネブラエでは刃が立たず、やむなく首ごと切り取って持ってきたのだ。

頭だけでも百？はありそうだったが、思いがけずパワーアップした俺の力ではまだ軽いほどだった。

「しかし、よく倒せましたね……イグニスバイソンはBランクの魔獣ですし、同じBランクの冒険者でもパーティーを組んで討伐するんですよ？」

「ん？ そうか？ 割と簡単に倒せたぞ？」

『嘘つけ。結構苦戦してたくせに』

確かに苦戦はした。主にテネブラエ（こいつ）のせいだな。

「あー……とにかく換金できるか？ あと、受けてた任務のほうも済ませてきたし」

「あっ、はい。えーっとまずフィルウルフの討伐任務の清算ですね……ってうわっ！ こんなにとってきたんですか！？」

あけてびっくり玉手箱……ではないが、アルテナが袋に詰まったフィルウルフの牙の数を見て驚いた。

「いち、にい、さん……ろくじゅうなな、ろくじゅうはち。合計で六十八本ですね。三十四頭の討伐になるので依頼は達成です」

手際良く牙を数え終わリアルテナが言った。

「では次はイグニスバイソンの換金ですね……んー、あれ？この傷って……」

イグニスバイソンの頭を鑑定するアルテナだが、牛の額を見ると何やら脇にあった書類を眺め始めた。

特に気にとめていなかったが、牛の額には大きな傷がありそれが気になったようだ。

「どうかしたのか？」

俺が尋ねる。

まさか、傷が付いてしまつて値が付けれないのか？

「ああ、いえ……あつ、やつぱり。」

確認していた書類の中の一枚を引き抜き、俺に見せてくれた。

書類には、賞金首イグニスバイソンと書かれた文字の下に、特徴は額の傷。とあった。

「このイグニスバイソン、賞金がかかっていました。どうやら人が何人が襲われていたようですね」

「ぶ、物騒だな……それで、賞金っていくらかかってたんだ？」

「通常の任務ですと金貨2枚になりますが、このイグニスバイソンは金貨5枚の賞金がかかっています」

金貨5枚！？

アズラさんの店の宿代五十カ月分だ。

正直金欠気味の俺にとってはうれしい知らせだ。

「すげえな！　それで、全部でいくらになるんだ？」

「そうですね、フィルウルフの討伐任務達成で銀板1枚。確認部位の牙が二つで銅貨1枚ですので、合計銀板3枚と銅貨4枚。さらに、イグニスバイソンの討伐で金貨5枚。確認部位の角が二本で銀貨5枚。全部で金貨5枚銀貨5枚銀板1枚銅貨7枚になります」

渡された硬貨を日本円に換算してみると、553400円。

イグニスバイソンの賞金と角の値段を外すと3400円だ。

やっぱりランクが低いだけあってめちゃくちゃはした金だな……結構苦労したのに。

「なお、Bランクの討伐になりますので、ユーイチさんの冒険者ランクが一気にCランクまで格上げです。おめでとうございます」

笑顔で俺を称えてくれるアルテナ。

笑顔が可愛いぜ畜生。

「あ、あのー……」

ランクアップに喜んでいた俺だったが、よく考えてみたら一人忘れ去られていた人間がいた。

フランである。

「わ、私も任務の清算をお願いします……」

俺の陰からフランが顔をのぞかせた。

気のせいかもしれないが、俺と話していた時よりもオドオドしている

るように見える。

「ああ、フランさん。確か……ポータル草の採取任務でしたね」

「は、はい。これで………ああっ！」

フランが担いでいたかごを下ろすと、小さいが悲鳴のような声をあげた。

「ん？ どうした？」

俺がフランの頭の上からかごをのぞき見ると、中にはぎっしりと……しなびたポータル草が詰まっていた。

おそらくイグニスバイソンと戦ったときの炎の熱にやられたのだろう。

「ああ……これでは任務の達成は残念ですが無理ですね。しかも納品期日が今日までなので任務は破棄となってしまいます」

残念そうに説明するアルテナ。

まあ、この有様じゃさすがに無理だろうなあ、本当によれよれになつてたし。

「まあ、こんな時もあるって。あんまり気に……」

苦笑いを浮かべつつ、うつむいているフランに声をかけるがその顔が真っ青になっていることに気づき、声を詰まらせた。

「お、おい……大丈夫か？」

冷や汗をかき、震えているフラン。

「……ダメ…これじゃ………様に……」

何かに脅えているといった様子だ。

アルテナと目を合わせると、困ったような顔で目をそらした。
仕事上、同情心で助けるといったこともできないのだろう。

「んー……………はぁ」

俺は頭を掻き、ため息をついた。

正直このような空気はあまり好きではない。まあ、好きな人間もないだろうが……

「ほら」

「えっ…………？」

フランの手に1枚の金貨を握らせた。

わけがわからないといった表情で俺を見上げるフラン。

この光景を見た人間のうち、くだらない偽善だという者は当然いるだろう。

だが、目の前で本気で泣き出しそう……いや、自殺をしそうなくらい怯えている少女を放っておくというのは人間としてどうかと俺は思う。

やらない偽善よりやる偽善なのだ。

「あ、あの………こんな、その………」

混乱し、自分が言いたいことがまとめられない様子のフラン。
だが、表情から読み取ると多分以下の通りだろう。

お金はもらいたいが、もらう理由が無い。
先ほどであったばかりの人間にここまでしてもらう理由もない。
だが、お金がないと本当に困る。

といった葛藤。

「これはー、あれだ……ポータル草？がしなびたのって、俺があの牛と戦ったのが原因だろうしさ」

ちなみにこれはこじつけである。

「で、でもあれは事故で……」

「それにほら、狼の牙取るのも手伝ってもらったことだし」

これもまあ、こじつけだな。

「あれは……私を助けていただいたお礼で……」

そろそろ言い訳のネタが尽きるな……仕方がない。

「……………はあ、じゃあ本音を言うと、女の子にそんな表情をされると男として気分が悪くなる。可愛い娘には笑顔でいてほしいんだよ。」

俺の言葉にフランの顔が赤くなった。

可愛いと言われたことが無いのだろうか。

それとついでだが俺の顔も赤くなった。

何をこっ恥ずかしいことを言っているんだ俺は……！！

「あ、いやっ！ 今のは……」
「ありがとうございます」

あまりの恥ずかしさに言い訳を言いかけた俺にフランが頭を下げた。そして顔をあげたフランを見て再び俺は顔を赤くした。涙を目にためてはいたが、その顔はまぶしいくらいの笑顔で輝いていた。

今まで意識していなかったけど……フランってめちゃくちゃ可愛いんだぜ！

もう少しこの可愛い顔を見ていたかったのだが、その希望は一つの怒声によって打ち碎かれた。

「フラアアン！！！！！！！！」

第十三話 昔語りとクソったれ（前書き）

ちよつと嫌な話です。
お気を付けを。

第十三話 昔語りとクソったれ

冒険者ギルドに入ってきた男は、見た目としては普通の中年男性。眼鏡をかけ、無精ひげを生やしたどこにでもいそうな男だ。だが酔っ払っている。

手には酒瓶を持ち、顔は真っ赤だ。そんな男がフランの名前を叫んだ。

「何だ？ あいつ」

日も暮れ、ほとんど人がいなくなっていたギルド内。そこに降って湧いた怒号。

せつかく人がフランでなごんでいた所を……

「フラアアン！？ てめえいつまでチンタラやってやがる！！」

男が近づいてくる。

ふと気がつくと、フランが俺の袖を強く握っていた。

「ご、ご主人様……」

これは俺に向けてはなった言葉ではない。フランの視線は、向かってくる男に注がれていたからだ。その顔は先ほどにも増して青ざめていた。

「ご主人様って……」

なるほど、この男がフランの主人ってわけか。

フランに向けていた視線を酔っ払いに向け直すと、男はすでに目の前にまで迫ってきていた。

「フラン！！ 金はどうした……俺の金をさっさと出せ！！！」

男はフランの髪の毛をわしづかみにして床へと叩きつけた。

「あぐっ……！」

フランが小さな悲鳴を上げる。

「お、おい！ お前何やって……！」

男の肩をつかみ制止しようとする。

「ああ！？ 何だてめえ！ 関係ねえだろ！ すっ込んでろ！！！」

男は俺の手を振りほどくと、床に突っ伏したフランに再び向かって行き、今度はこぶしを振り上げた。

しかし、そのこぶしが振り下ろされることはなかった。

俺が男の手首をつかみ止めたからだ。

「おい………やめろ！」

手首を握りしめながら、男を脅すように言った。

「な、なんだよ……俺の所有物に何しようが俺の勝手だろうが！」

男は俺の視線にビビりながらもまだ強気な態度を崩していない。

こいつ……見たことあるな……

この男自身ではないが、元の世界で同じような人間を見たことがある。

俺は施設で育った。

俺自身にはドラマに出てくるようなひどい思い出はない。

物心ついたときにはすでに孤児院にいて、親がいないことも別段さびしいと思ったことはない。

だが、俺の周りは違った。

小さい子は幼稚園児、大きければ中学生といったやつも入ってくる。なぜか？

ほとんどは家庭に問題を抱えるがゆえ入ってくるのだ。

そう……そうだ。その中の一人、護の……俺の親友の親がこんな奴だった。

護は小学生になる頃に施設にやってきた。

顔は今のフランのように青あざが目立ち、はれ上がっていた。

子供ながらに一目で家庭内暴力だと分かった。

同じような人間を何度も見てきたからだ。

半年ほど施設ですごしたのち、護は施設を出て行った。

護の父親が迎えに来たのだ。

印象としては子煩悩な優しそうな父親だった。

父親はニコニコしながら護を連れていった。

引き取られた家が近くだということもあって、俺は護の家に何度か遊びに行った。

父親は常に留守だったが、護を見ていると家族生活がうまくいったとは思えなかった。

訪れるたびに護の傷が増えていったからだ。

その後、詳しくは覚えていないが、護は再び施設に入ることになった。

父親は幼児虐待で逮捕され、後にこう語った。

「俺の子供を俺がどうしよう俺の勝手だ」……と

ああ、思い出したら腹が立ってきた。

ギルドで手首をつかんでいる男は、護の父親そっくりだ。

「は、はは……何だその目は。殴りたかったら殴れよ……殴って捕まるのはお前だけだけだなあ!!」

「お前だってフランに手をあげただろ。自分のことは棚に上げる気か!」

「あつはつはつは!! お前馬鹿かあ? フランは俺の奴隷だぞ。つまり物なんだよ物!」

この言葉に俺はキレた。

ふざけんな!! 何が物だ!! てめえの目はどこについていやがる!!

激高した俺はテネブラエに手をかける。

だが、その剣は抜けなかった。

フランが俺の腕を止めたのだ。

「やめて下さい！！ ご主人様を殺さないで！！」

なんで！？

フランがこのクズ野郎をかばう理由はないだろ！

「ははははっ。知らねえのか？ 奴隷には主人を守らないと全身に激痛が走るっつつ魔法がかけられてるんだよ」

魔法？アズラさんが言っていたあれか……胸糞悪いことしやる。

「てめえ……………！」

先ほどよりも憎しみをこめて男を睨みつける。

だが、手が出せないと確信している男はへらへらとむかつく笑みを浮かべている。

「お願いです…………やめて下さい……………！」

涙声のフラン。

俺の手を弱弱しく握って制止した。

「くそっ…！」

俺は男の手を離すしかなかった。

第十三話 昔語りとクソったれ（後書き）

さて、しんみりしちゃいました。

嫌いではありませんが、こういった話は難しいですねえ。

ちなみに護って誰？っていう人もいるでしょう。

そんな人は初めから読み直してください。

第十四話 理由

「あー！ くそっ！ 胸糞悪い！！」

結局あの場では何もできず、俺はアズラさんの食堂に帰ってきていた。

「なんだい、帰ってきて早々。あらっ、服もボロボロじゃないか、ちよっと待ってな」

忘れていたが、俺が着ている制服はイグニスバイソンとの戦いで焼け焦げていた。

それに気づいたアズラさんが食堂の倉庫のほうに向かった。

アズラさんが戻ってくると手には服を持っていた。

「ほら、こんなのしかないけど着替えな」

そう言って上下が真っ黒の丈夫そうな服を差し出した。

「誰の服です？ これ……」

見たところ服は男ものだ。

ちなみに食堂はアズラさん一人で切り盛りしているため、現在俺以外の男は住んでいない。

「私の……息子のさね。冒険者をやっていたんだけど、今はもう着

れないからね……」

アズラさんがうつむく。

「亡くなっただんですか？」

「いや？　ぶくぶく太っちまってサイズが合わなくなっただだよ」

ズコー！

吉本新喜劇並みのこけ方をした俺。

あれっ？

今ってシリアスな雰囲気じゃなかったの？

「と、とりあえずありがとうございます。後で着てみます」

服を受け取ると再びテーブルに着く。

「それで、何が原因でそんなにしょぼくてんだい？　服のことってわけでもないんだろっ？」

なかなか鋭い人だな。

俺は、ギルドで起こったことを説明する。

「なるほどねえ、エリックがフランにね……」

「エリック？」

「ああ、フランのご主人の名前だよ。時々この店にも来るしね。ほとんがツケでだけど……」

「ツケってことは借金があるんですか？　フランはかなり働いてい

たようですけど」

「あの男はフランが稼いだ金をほとんど酒や賭け事に使い果たしちゃまっているからね、エリック自身はほとんど働いていないし、結構借金も背負っていたと思うよ」

フランが働いて稼いだ金をエリックが食いつぶすわけか。典型的なダメ人間だな。

しかも働いているフランに対しての扱いがひどすぎる。

虐待は言わずもがな、フランの健康状態を見てみるとまともに食わせてもらっているのかどうかも怪しい。

「借金……借金か……」

正直、ここが日本だったなら解決することは簡単だ。

警察に通報するだけで一件落着だからだ。

しかし、ここは異世界。しかもフランは奴隷で、いくら過酷に扱われても法律上は問題ないらしい。

「借金ってどこから借りているかわかりますか？」

「たしか、冒険者ギルドの前借みたいな形だったと思うけど……坊や、何を考えているんだい？」

アズラさんの言葉でようやく気付いたのだが、いつの間にか俺はフランを救う手を考えていた。

「フランを救おうとしてるんじゃないだろうね」

アズラさんが顔をしかめる。

あまり俺の行動を良く思っていないようだ。

「いけませんか？」

「いけないことはないよ。人として正しいことを坊やはしてる。だけれどそんな事をしてどうなる？」

アズラさんが冷たく言い放った。

「フランを助けることができたとして、坊やは同じような境遇の奴隷がいればまた助けるのかい？ はつきり言つて、フラン見たいな子は王都だけでも相当な数はいるよ？ そのたびに手を差しのべるのかい？」

元の世界でもたびたび議論される。

アフリカの子供たちに食料を支援したところで、飢餓人口が改善されることはない。救えたとしても全体のほんの一部だ。

つまりそのほかの子供たちは救われないということだ。救われない子供たちからしたら大層怨むことだろう。

なぜ我々は救ってくれないのか？ 救われた人間と我々は何が違うのだ。

それならば誰も救わなければいい。そういう声も聞こえる。

全員を救うことができれば一部を救うことはただの偽善である。と

「正直、その時になるまではわかりません。ただ……」

「ただ？」

やはり、やらない偽善よりやる偽善なのだ。

「そのことは、フランを助けない理由にはなりません」

そうだ。助けられない人は残念ながらいるだろう。

だが、助けられない人たちのために、目の前にいる助けることができる人間を助けられないなんてことはあり得ない。

「…………ふっ。そうかい。いい答えだ、坊や。ご褒美にいいことを教えてやろう」

「いいこと？」

「フランを解放するための秘訣さ」

第十四話 理由（後書き）

少し短めです。

なんだか倫理の話になってしまいました。

あんまりおもしろくねえなあ……

第十五話　そして俺はイケメンになった

俺はエリックと対峙していた。

場所はアズラさんの食堂。

もちろんフランもこの場にいる。昨日よりも顔の傷が増えており、見られたくないのか顔をうつむいている。

エリックは、初めこそ俺が報復に来たと思ったのかビクついていたが、俺の言葉を聞いてからは勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。

「フランを解放してもらおう！」

俺はそう言い放ったのだ。

「はっ！　なんで俺がフランを手放さなくちゃならねえんだ？」

酒をあおりながら俺を見下すエリック。

俺が物理的にも法律的にもエリックに手出しできないと確信しているようだ。

この世界の奴隷制度において、奴隷は、所有者の許可が無ければ絶対に解放されない。

所有者が奴隷の所有を放棄しなければ奴隷はあくまで所有者のものだ。

奴隷が誘拐され、他人が強制労働に就かせようとしても、強制力は発生しない。どころか、奴隷が所有者から一定以上離れ、一定期間経つと魔法によって死んでしまうのだ。

おまけに奴隷の権利書も所有者自身にしか破棄できない仕様になっている。

だとするなら、奴隷を解放するためには所有者による明確な所有放棄が必要となる。

となれば話は簡単だ。

自分の意思でフランを手放したくなるように仕向ければいい。

「いいや。あんたはフランを手放す。いや、手放したくなるはずだ」

そう言っただけ俺は二枚の書類をエリックに渡した。

エリックの表情がひきつっていく。

俺が渡したのは、エリックのフランを所有する権利書と、エリックに対する取り立ての強制執行書。

ちなみに、取り立ての執行者には俺の名前、ユーイチ・サヤマと明記されている。

「フランを解放するための秘訣さ」

アズラさんが言った。

解放の秘訣？

「何か方法があるんですか!？」

俺は身を乗り出してアズラさんに迫った。

「一応ね。ただ、色々と条件があるけど」

「教えて下さいー!!」

「はっはっは、がつつくねえ。坊や、あの子に惚れでもしたかい？」

アズラさんの言葉に一瞬顔が熱くなる。

はつきり言って否定はしない。

下心が無いというわけでもないからだ。

「そ、それについてはノーコメントにします」

「のー……なんだい？ まあいいや、とにかく、フランをエリックから引き離すことはできる。しかも合法的にね」

「どうすればいいんですか？」

「さつき坊やも目を付けてただろう？ それを利用すればいい」

さつき？

えーっと……何だっけ？

「……………借金……ですか？」

「そう。エリックはギルドに借金を背負っている。ギルドに借金をするとね、利子は安くなるんだけど罰則規定が厳しくなるんだよ。

一定期間内に借りたお金の一割を払わないと、借り手自身の身売って返さなきゃいけない。エリックもそろそろその期間が迫ってきてたはずだよ」

「えっと……つまり借金の一割を返さないと奴隷にされるってことですか？」

めちゃくちゃ厳しい罰則だな。

「そうさ。その弱みを攻めて、フランを買い取ればいい。といって

も金が無いとこの作戦は使えないけどね。」

金か……一応いくらかは持っているが、エリックがどれだけ借金を背負っているかによるな……

「もし、金が無いならもうひとつ方法があるよ。冒険者として、取り立て任務に就けばいい。とりあえずはエリックからフランを引き離すことはできるからね。ただ、これも冒険者ランクがある程度必要だけど」

この方法だと、根本的解決はできない。

確かにエリックからは解放されるだろうが、ほかの所有者になる人間がエリックよりもましだという保証はどこにもないのだ。

「………ちなみにエリックの借金っていくくらくらいですか？」

「たしか………白金貨3枚とちょっとだったと思うけど………」

ということは一割で………あれっ？

「じゃ、じゃあ取り立て任務ってどのランクからできるんですか？」

「よくは知らないけど………多分Cランクからじゃなかったかな？」

これって………条件がすべてそろっている？

俺の所持金は、イグニスバイソンを倒したことによって金貨4枚（一枚はフランに渡したため）を持っている。しかもその時にCランクに昇格している。

出来過ぎだ

ちょっと怖いくらい順調に進んでいる。

まあ、いい方向に進むことができるのなら良いか。

次の日、アズラさんにもらった服を着て、ギルドに取り立て任務の申請に向かい、再び食堂に戻ってきていた。

「そ、そんな馬鹿なっ！ お前みたいなガキが取り立て任務に就けるわけが……！」

だが、執行書の署名は俺を指している。

「信じなくてもかまわないが、執行書は本物だ。あんたもあきらめて奴隷になる準備でもしておくんだな」

エリックの顔がみるみるうちに青ざめていく。
清々するわ、馬鹿野郎。

「……あー、だけど条件によっては取り立てをしないでやってもいい」

「あ？ 執行者に取り立てを無効化出来る権限はないはずだろ！
でたらめを言っな……！」

もちろん俺にそんな権限はない。

これからしようとしていることは法にこそ触れないが、かといって胸を張って自慢できる行為とは言えないもの、つまり……買収だ。

「さっきも言ったが、フランを解放しろ。そうすれば俺が借金の一

割を払ってやる」

俺の言葉に、フランが顔をあげる。
その目にはかすかだが期待がこめられている。

ちなみにエリックの借金はい金貨3枚金貨5枚だ。つまり、その一割。金貨3枚と銀貨5枚。

今の俺の所持金は金貨4枚と少しなので払うことができる。

「で、どうする？ フランの所有権を俺に譲るところで宣言すればこの金をやろう」

机の上に金貨を4枚叩きつける。

少し多めなのは、賄賂的な意味を込めているためだ。

「は、はははっ、ありがたい話だが、お前、フランを手に入れて何をがしたいんだ？ ああ、下の世話でもさせるのか。フランは顔は良いk「黙れ」……っ」

俺はエリックの胸倉をつかんで睨みつけた。
どこまでもくそったれな野郎だ。

「金を受け取るのか、受け取らないのか！！」

「……っ、わ、分かった！ だから手え離せ！」

俺が本気で怒っていることが伝わったのか、エリックは怯えきっている。

そして、フランの権利書に手を置いて、

「Et ad delegatum sibi（我は権利を彼ものに委譲する）」

と呪文を唱えた。

すると、権利書に書かれてあったエリックの名前が消え、代わりに俺の名前がそこに刻まれた。

「よし。確かに権利はいただいた」

フランが俺の所有物になったことを確認した。

俺はフランを正面に見据え。

「フラン！！」

「は、はい！」

急に俺に呼ばれ、驚きつつフランが返事をする。

「来い！！」

フランに手を差し伸べた。

正直、俺の気まぐれというか、地球にいた人間にとっての最低限の倫理を持っていたただけだ。

それがこの世界においては、ばかばかしいほどのお人よしにしか見えなかっただろう。

だけど今回はそれが功を奏した。

なぜかって？

フランが俺の胸に飛び込んでくるっていうおいしい思いが出来たか
らね。

第十五話　そして俺はイケメンになった（後書き）

さて、ようやく解決。

ユーイチがイケメンです。

ちなみに呪文であるラテン語ですが、`google` 翻訳で調べただけなので、文脈が合っているかどうかは謎です。

第十六話 嫁？（前書き）

ユーザー名を変更いたしました。

あと、章設定もしておきましたのでよろしく願います。

第十六話 嫁？

エリックからフランを買い取った日の夜、アズラさんの食堂でフランと俺は向かい合っていた。

「ゆ、ユーイチ様……本当によろしいのですか？」

フランが恐る恐る俺に尋ねた。

「奴隷なんて俺が住んでた所にはいなかったからなあ……正直対応に困る。あと、そのユーイチ様って言うのもやめてもらいたいし」

日本には奴隷はいない。

地球規模で考えれば、現代でも人身売買は存在するらしいが、少なくとも俺の近くでは見たことがない。

しかも、現代日本は事あるごとに人権がどうのこうのとつるさいのだ。

そんな生活に慣れ親しんできた日本人としては、急に奴隷を与えられても困るだけだ。

「えーっと……… U t i u s L I N Q U O (我は権利を放棄する)」

これはあらかじめアルテナに聞いておいた奴隷解放の呪文だ。

俺が呪文を唱え終わると、権利書が炎に包まれ、灰になった。

「はい、お勤めご苦労様でした」

あれっ？ これって釈放された囚人にかける言葉だっけ？

「ゆ、ユーチ様……ありがとうございます……」

感極まったのか、俺の胸ですすり泣くフラン。
かわいいなあ、オイ。

「よしよし………あと、様付けもやめような」

頭をなでながら軽く注意した。

傍から見れば「空気読め！」と言われそうな状況だな。

ん？

頭をなでているときに気づいたのだが、猫耳がある。

いや、そのことは前に聞いていたから知っていたのだが、思い返すと街中でフランの猫耳を見た覚えがない。

「フラン、耳隠してるのか？　なんで？」

可愛いのに。

「……………ハイ。街中では差別を受けるので髪の中に隠してるんです」

「なんてもつたいたくないことを！！　絶対需要あるだろ！　そんな萌え要素！！」

俺は知らずのうちに声を荒げていた。

差別だと？　くそっ！　猫耳は愛であるものだろうが！！

『何を興奮してるんだよ。それにもえって何だ？』

「萌えっつーのは、その……あれだ……えっと、萌えだ！！」

はつきり言って俺にも萌えがなんなのかは分からない。
だが、萌えは萌えなのだ。それ以上でも以下でもない。

「はあ、これは萌えというのですか」

俺の言葉は理解できていないだろうが、フランは耳をピコピコ動かしながら言った。

ああ、かわいいなあ。

っていうか、いま気付いたのだが俺はケモナーだったらしい。

「んで、その差別ってのは何が原因なんだ？」

「えっと……ですね、ん、なんででしょう？」

「いや、聞き返されても」

まあ、差別なんて本当は大した理由なんていない。

人種が違ったり、民族が違っただけで迫害されることもあるのだ。
嫌われるべくして嫌われる人間もいるが、大抵はそんなくだらない
動機で差別心が生まれるのだろう。

「まあいいや。んで、フランはこれからどうすんの？」

「「えっ？」」

フランと食事の準備をしていたアズラさんが同時に驚いた。

「あれっ？」

なんかまずかったのか？

「傍に置いてくれないのですか!？」

「あんた……フランをほったらかしにするつもりかい!？」

なんか責められてる？

「い、いや……だってもう奴隷じゃないわけだし……好きにすればいいと思うけど」

「はあ……あんたねえ、元奴隷って身分持ちの人間はなかなか雇ってくれるところが無いんだよ。そもそも、奴隷が解放されるときはほとんどが自分の愛人にするためだったりするから、元奴隷が働くこと自体少ない」

「つ、つまり……俺にフランと結婚しろってことですか？」

「そこまでは言わないけどさ、せめて傍に置いて置いてやるくらいの甲斐性は見せな!」

正直、こんな可愛い女の子を侍らすなんて男としては願ったり叶ったりだが、フランの気持ちもあるだろう。俺が勝手に決めていい話ではない。

「わ、私……ユーイチ様の身の回りのお世話もします! よ、夜のお供もお望みならば……い、いたします!」

フランが顔を真っ赤にさせながらとんでもないことを口走った。

「い、いや! そこまでしなくていいから!」

「そ、それならギルドでたくさんお金を稼いできます! 体力には自信があるんです!」

「だ〜から〜、そんなことしなくてもいいって！ あ〜、あれだ。俺の傍にいてくれるだけでいいから！」

思わず口に出したのだが、これってプロポーズじゃね？
言ってから俺の顔が熱くなった。

だが、この言葉にフランの表情がパツと明るくなった。

「は、はい！ ありがとうございます！ ユーイチ様！」

「あ〜、あとそのユーイチ様って言うのもやめてくれって。もう奴隷じゃないんだから」

「あう、申し訳ありません。ユーイチ……さま……」

ダメか……

まあ、ゆっくりならしていけばいいか。

「ま、ただの穀潰しつてのも居心地が悪いだろっからね、私の店で働けばいいさ。そのかわり、キリキリ働いてもらっからね」

「あ、ありがとうございます！ アズラさん！」

おお！ なんだかんだで就職先も決まったようだ。
めでたしめでたし……かな？

「そうと決まればほら！ 奴隷解放記念だ。どんどん食べな！ 今夜はおごりだよ……………坊やのね」

「俺が払うんですか!？」

ここは普通アズラさんのおごりだろ。

ま、何はともあれ、一見落着だ。

もう夜で出来ることもないし、ゆっくりするとしよう。

第十六話 嫁？（後書き）

なんかグダグダと一話消化しました。
申し訳ない。

第十七話 アストラム

「やっと、お会い出来マしたネ」

少女が俺を見下ろしている。

吸い込まれそうな青色の瞳に足もとまで伸びる青色の髪の毛。

つか、俺はその少女に膝枕をしてもらっていた。

「なんだ夢か」

ならそろそろ起きないとな。確か夢の世界で眠れば現実で起きられるんだっけ？

「あ、あの！ 寝ないデ下さい！！」

次の瞬間俺の全身に電気が駆け巡った。

「あばばばばばばばばばばばっ！！！！！！」

電気の感触に失神しそうな体を何とか起こす。

「何すんだてめえ！！」

俺の体から煙が上がる。良く死ななかつたな……
ってか、痛みがあるってことはここは夢じゃないのか？

「あわわわ、スミマセン！ つい」

つい、で殺されかけたのか……

「つーかあんた誰だよ！ ここは……」

目の前の少女は知らないがこの場所には見覚えがあった。

周囲には何もなく、真っ白な空間が広がっている。神様とやらにであつた場所である。

「えつとデスネ……とりあえず自己紹介ですが、私は神様です」

はい？

「え？ いや、神様つて確か薄汚い格好したおっさんだろ？ あんたじゃないだろ」

「いえ、それは地球の方の神様デ、私はこの世界で『アストラム』と呼ばれてイル神様です」

つまり、あのおっさんとは別の神様つてことか……

「で、その神様が何の用だ？ まさか電撃浴びせるためだけに呼んだわけではないよな？」

「で、電気のことはスミマセンでした……ここにお呼びしたの八あなただの使命について説明するためデス」

使命？ でも俺つて手違いでこっちに来たんじゃなかったっけ？ だからおっさんに放り出されただけだ。

「手違いでこっちの世界に飛ばされて、今更使命かよ！」

「す、スミマセン！ あれには少し訳がありまして、護サンとは別口でこちらに呼ぶつもりだったのですガ」

「護？ そっぴい護もこっちの世界に来るんだよな？ なんか勇者がどうとか言ってたし」

っていつか今まで話題にすら挙がらなかったが、護もこっちの世界に飛ばされているかもしれない。

…………… 今思えば俺もなかなか薄情な奴だな。

「ハイ、護サンも先日こちらへ召喚されました」

「俺とはちよつとタイムラグがあつたんだな」

「えエ、それと雄一サンの使命に関してですが…………… あっ！」

俺の使命とやらを言いかけたアストラムだったが、何かに気づいたらしく言葉を詰まらせた。

「どうかしたのか？」

「スミマセン…………… そろそろ起きちゃいます」

「誰が？」

「雄一サンが……………」

アストラムが俺を指差すと、なぜか俺の体が宙に浮いた。

というより地面が無くなり落下したというのが正しいだろう。

「またかああああ！…！」

これは、俺のこの世界での最後の…………… なんかもついいや…！

第十七話 アストラム（後書き）

文章力が無さ過ぎて無理がうまくつてます。
護がそろそろ出てくるかもしれないです。

第十八話 勘違いと探し人

「あでっ！」

俺は目を覚ますと同時に床に落ちた。
まだ日も昇っておらず、真っ暗だ。

「いつてえな……」

打ちつけた頭をさすりながらベットに座る。

夢？ いや、多分現実だったのだろう。

怪我こそしていないが電撃を受けた感覚がまだ残っている。

「何だったんだ？ 使命が何とか言ってたけど……」

あゝ、起きたばかりで頭が回らん。まだ外も暗いことだし二度寝でも決め込むか……

「そついや護のことも何か考えねえとなあ……」

ぶつぶつ呟きながらベットに入ろうとするが、手を置いた先に何か柔らかいものがあつた。

「ん？」

シーツをはがす俺。

「……………んっ」

………ん？

まあ、典型的というかお約束というか……フランがベットの中で丸くなっていた。

脂汗が洪水のように湧き出る。

「おいテネブラエ、これは一体どういう状況だ？」

『ああん？ そりやお前、一晚を供にしたんだろ？ 組んづ解れつ、昨日の夜はすごかったぜえ』

ああ！ マジか！！

そんなことしたのか！？

全然覚えてねえ！ 全然………あれっ？

「おい、そんな覚えはねえぞ。酒も飲んでなかったのに」

『そりやお前……嘘だからな』

「馬鹿かお前は！ くだらんわ！！」

ちよつと本気にしちゃったじゃねえか！！

この野郎、売り飛ばしたるか……

「………んっ、あゝ、ユーイチ様。おはようございます」

俺とテネブラエが口喧嘩をしているとフランが目を覚ました。

「あつ！ フラン！ お前なんで俺のベットで寝てるんだよ！？」

「………？？」

………？ じゃねーよ！
まだ寝ぼけてるみたいだな。

「と、とにかくアズラさんに部屋もらったろ。そっちに戻れ！」
「あ、はい。わかりました」………スー（寝息）」
「寝るな！」

ああ！ もうしょうがない！ とりあえず俺の部屋から出て行ってもらおう。

フランを抱え、力づくで追い出そうとする。それでも起きないフランは俺の腕の中でだんとしてている。

こんな所誰かに見られたら………ああ、でもこの展開って……

「坊や、フラン見なかったかい？ 部屋の方にいなくて……」
やっぱり。

俺の部屋に入ってきたアズラさんが見た光景は以下の通り。

？ 起きたばかりで服がはだけた俺とフラン。

？ そのフランを抱える俺。

？ つまりは事後。

「あら、お邪魔だったみたいだね」

ドアを閉めるアズラさん。

「違っ………！ 勘違いです！！」

朝っぱらから何ラブコメ的なことをしてるんだ俺は！！

「……………はぁー」

『深いため息だなぁ、ユーイチ』

「何割かはお前のせいだけどな」

結局、アズラさんにはフランが寝ぼけて入ってきただけだと説明したのだが「あらあら、分かってるよ」。野暮なことは言わないよ」と言っていたので信じたかどうかは怪しい。

フランもその時のことは覚えていないらしく、今は食堂でせつせと働いている。

ちなみに、アズラさんは仕事の準備をするためにフランを起こしに来たらしく、あまりに早い時間帯だったので俺は誤解を解く前に睡魔に負けてしまった。

と言うわけで、すっかり太陽が昇りきるまで二度寝をしてしまった。

まあでも、今のため息は今朝の出来事だけが原因ではない。

昨夜のアストラムと出会ったことについてだ。

「使命……………ねえ、っとそれよりも護の方が先か……………」

『ん？ 誰だ？ 護って』

「あゝ、俺の地元の友人だ。多分城の中にいると思うんだけど……………」

そう、勇者として選ばれた護は城で召喚される可能性が高い。なぜなら、俺が召喚されたときに勇者がどうのこうのと言われていたからだ。

『城かゝ、そりゃあ難しいな。あそこは重要な用件がない限り基本的に門前払いだからな』

そうか……まあすんなり入れるとは思っていなかったけど、門番にも良い印象は無かったし。

「じゃあ、何か方法を考えないとな……」

そう言つて俺は腰を上げた。

食堂を後にすると、フランが元気よく見送ってくれた。

「さてと、どこから手をつけるか………」

あまり当てもなく通りを歩いていると、誰かが声をかけてきた。

「ユーイチさん、おはようございます」

雑貨屋にいたイスカだ。

「おう、おはようイスカ」

『よう、眼鏡の兄ちゃん』

雑貨屋に近づく。

「今日は何かお求めですか？」

イスカが営業スマイルを向けてくる。

「いや、今は手持ちが無くてな、今日は買い物じゃない」

昨日フランを買い取ったことと、食事をおごらされたことで手持ちはほとんどなくなっていた。

「あれっ？ でもイグニスバイソンの賞金で結構稼いだと姉に聞いたのですが……」

「姉？」

「はい。冒険者ギルドに姉がいるんです。ユーイチさんのことは何度か話題に挙がりましたよ」

ギルドで知り合いって言ったら……

「ああ、アルテナのことか。姉弟なのか」

「はい。今も一緒に暮らしています。それで、お金はもう使い切ったんですか？」

お金の話に食いついてくる当たり、やはりイスカは商売人なんだな。

「まあ、色々あってな。それよりも、ちょっと人を探してるんだが」
「探し人ですか？」

「ああ、場所は分かってるんだけど……城の中らしくてな」

ま、追い出されて無ければの話だが。

「お城ですか、確かに入るのは難しそうですね……兵士の方ですか？」

「いや、えーっと……一般人……だと思う」

職業に男子高校生が含まれていなかったら、だが。

「兵士の方なら割と簡単に会えると思いますが……………そうですね、ギルドに人探しの依頼をされてはどうですか？ それなら、城の人間の目に留まればそちらからユーイチさんに接触してくるでしょうし」

俺から依頼を申し込めば良いわけか……………だがひとつ問題がある。

「それっていくらぐらいかかるんだ？」

さっきも言ったが今は手持ちが無い。
金額としては銀貨3枚とちよつとだ。

「場所が限定されてますから、多分銀板が5枚くらいで済むと思いますよ？」

何とか払えるくらいか……………なんかめんどくさくなってきたな。

イスカに言われた通り、俺はギルドに任務の依頼に来ていた。

「人探し依頼ですね。少々お待ち下さい」

アルテナが書類をめくっている。

今アルテナを見てみると、やはりイスカに似ていると感じる。

髪の色や瞳の形など割と似ているな。

「……………あれっ？ ユーイチさん、ユーイチさんに人探し依頼が出ていますよ？」

ん？ こっちの世界で俺を探すような人間がいるとは思えないが……

「えっと、ですね……………依頼主は、マモルⅡオトタケという方ですね」

その言葉に俺は依頼書をひったくった。

アルテナが目を見開いて驚く。

依頼書には確かに俺を探す内容だった。

人探し依頼。

依頼主・マモルⅡオトタケ

対象・ユーイチⅡサヤマ

特徴・黒髪に黒い瞳。変わった服装。

言伝・僕を探さないでください

……………あれっ？

なんか最後の文章が気になるのだが……………

……………探さないでください？

なんじゃそりゃ？ お前は思春期の家出少年か！！

第十九話 決してめんどくさくなった訳ではない

探さないでください？

普通こういうのって、「確認したら」に来てくださいとか「連絡してください」とかじゃないのか？
ま、ともかくこういう時の対応は……

「じゃ、探さなくてもいいか」

探さないでおく。

「え？」

テネブラエが疑問の声を上げる。

「探さなくてもいいのか？ 故郷の友人なんだろ？」

「いや、探すなって言う奴を探してもなあ……それに護は意味もなく冗談を言うタイプじゃないし、何か訳でもあるんだろ」

護は良いやつではあるが、気まじめ過ぎて冗談が通じにくいやつだ。
このような冗談を言うとは思えない。

「うーん、まあお前が良いならいいが……」

「というわけでアルテナ、人探しの依頼も必要なくなったから」

「あ、はい」

状況についてこれていないアルテナが返事をする。

さてと、急に暇になったな……あ、いや…そう言えば金が底をつき始めたんだっけ。

「とりあえず、任務でも受けていくか」

「あつ、それですと、ユーイチさんは先日Cランクに昇格されましたので、Bランクまでの任務を受けることができます。Aランク以上のランクになりますと、そのランクと同じ冒険者ランクが必要になりますのでご了承ください」

「ああ、分かった。じゃあ、掲示板見てくるよ」

ふむ実は掲示板から任務を選ぶのって初めてだったりする。

えーっと……採取任務に取り立て任務、護衛任務に……あれっ？

「アルテナ！　なんか討伐任務が一つも無いんだけど！」

そう、ほかの任務は多々あるのだがなぜか討伐任務が一つたりとも存在しない。

「ああ、それなんですけど……なぜか最近、王都周辺に害獣や魔物の数が激減しているそうなんです。先日、ユーイチさんがイグニスバイソンを討伐する前から確認されていたことなんですが……依頼達成が困難になっていることから、当分討伐任務は受けられないと思います」

ふむ、牛を倒したときに狼も相当数倒したはずだけど……あれは運が良かっただけなのか？

「そうか……じゃあ、他のは？」

『おう、ユーイチ。その任務なんてどうだ？ 他よりも報酬は良いぞ』

テネブラエが言った任務は、捕縛任務と呼ばれる任務だった。

捕縛任務

最近街に横行する宝石泥棒を捕縛せよ。

対象・盗賊

特徴・女、緑色の髪、ローブを着用

報酬・金貨1枚

確かに、Bランクまでで金貨越えはこれだけだ。

「うん。これにするか。アルテナ、手続き頼む」

「はい。捕縛任務ですね」

アルテナは手慣れた様子で受注書にサインをしていく。

「こちらが受注書になります。がんばってください」

俺に受注書を渡すと笑顔で送り出してくれた。

「ともかく、まずは情報収集からだなあ」

食堂に戻った俺は、フランに料理の注文をするとカウンターに腰を下ろした。

だが、その時、隣に座っていたお客さんの荷物をカウンターから落としてしまった。

「あつ、すみません」

「あらあゝ、気にしないでえ」

荷物を拾い上げるとお客さんに手渡した。

その時気付いたのだが、そのお客さんがめっちゃ美人でした！

目を奪われるほどの豊満な胸！ プルンとした唇にきれいな緑色の髪の毛！……………あれ？

何かに違和感を感じた俺は、先ほどもらった受注書にもう一度目を通す。

特徴・女、緑色の髪、ローブを着用

……………ちなみに目の前の女の特徴・女、緑色の髪、ローブ（マントかもしれないが差が分からない）着用

……………いや、たまたま特徴が似ていただけかもしれないし、決めつけは良くないよな……………うん。

「うゝん、この街にもあの宝石無かったなあゝ」
女が呟く。

「発見!!!」

第二十話 泥棒現る

「お縄につけー！ この泥棒！！」

女を前にして俺が叫んだ。

「あらあゝ？」

だが、女は何のことかわからないといった様子だ。

「何の話ですかあ？」

「お前がこのあたりで宝石を盗んでる盗賊だろ！ これを見ろ！」

女の鼻先に受注賞を突き付ける。

受注書をマジマジと見る女。

「あらあ、本当ね」

あっさりと認める女。

か、肩すかしだな。

「と、とにかく一緒に来て『あれ？ お前……』」

連行しようと思った矢先、テネブラエが女に話しかけた。

「あゝ、テネブちゃんだあ。久しぶり」

『おお！ やっぱり！ アエルじゃないか、久しぶりだなあ』

親しそうに二人が会話する。

「……………あれっ？ お知り合い？」

『ああ、昔馴染みだ』

「アエレシスです。よろしくねえ」

「あつ、雄一です。よろしく……………っじゃなくて！」

昔馴染みだろうがなんだろうが泥棒は泥棒だ。

「昔馴染みでも泥棒はダメだ。一応任務だし、捕まってもらっぞ」
「あらあゝ？ でも私泥棒なんてやって無いわよお？」

あれ？

「でもさっき受注書見せた時、本当ねゝって言ってたじゃねえか」
「特徴が私と一緒にだなあゝって思っただけえ」

なんじゃそりや！

『ユーイチ、アエルは盗みを働くようなやつじゃないぞ？ 時々金を渡すのを忘れて商品を持っていくことはあるが…………』

それはそれでどうかと思うが…………

「じゃあ、宝石がどうのって言ってたことは？」

「私ねえ、ある宝石をさがしてるのお。色んなところを旅してるんだけどお、見つからなくてえ」

勘違いだったか…………紛らわしいな。

「はあ、別人か……まあさすがに、すぐに見つかるわけではないよな」

肩すかしだなあ。やるき失せるわ。

今思えば、この広い街を探すのはかなり骨が折れそうだ。

「宝石泥棒です！！ 捕まえて下さい！！」

いたよ。

店の前に出てみると、女が目の前を走り去って行った。

女、緑色のおさげ髪、ローブ姿「ビンゴ

「はあっ、はあ……………はあ、もうダメだ……………」

女を追いかけていたのはイスカだった。

息も絶え絶えに俺の前で立ち止まった。

「ハッハッハ。後は任せるイスカ！ 今度またサービスしろよな！」

ふっ、また貸しが出来たな。今度は何をおまけしてもらおう。

「オイ待てっ！」

女泥棒を追いかける。身体能力が強化されているため、すぐに二人の距離が縮まっていった。

「……………っ！ ちっ！！」

俺が追いかけていることに気付いた泥棒は、大通りから横の裏路地へと方向を変えた。

入り組んだ道で俺を撒こうとしたのだろうが、しばらく走ると道が袋小路になっており、泥棒を追い詰める形になっていた。

「もう逃げ場はねえぞ？ おとなしくとっ捕まりな」

『なんかお前が悪役みたいだな』

「うるせえよ」

割と自覚済みだ。

俺がテネブラエと話していると泥棒が話しかけてきた。

「あんた、それ魔剣か？」

やっぱり魔剣というのは珍しいらしいな。

『はっはっは、惚れたか？』

馬鹿か。

「ああ、惚れちまったよ。あんた、アタイのものになれ」

あれ？ マジか？

「おいおい、テネブラエは俺の剣なんだからまず俺を通し」「あんたに許可は求めている」「」

泥棒がにやりと笑うと背筋に悪寒が走った。

反射的を体を横に移動させる。

その時、先ほど俺の体があった位置にこん棒が振り下ろされていた。

「……………っ！ 仲間か！」

身を翻して周囲を見てみると、女の他に3人の男が俺を取り囲んでいた。

いつの間に近づいてたんだ？

『ユーイチ、気をつける。こいつらギルドでからんできたやつとは格が違うぞ』

「そうっばいな」

男たちの装備はこん棒や短剣といったお粗末なものばかりだが、その動きに隙が無い。

一対一では負ける気はしないが、この人数だと厳しいかもしれない。

「魔剣を渡すなら、少なくとも生かして帰してやるよ？」

この口調だと、渡したとしてもボコられるのは確実だな。

「それよりもお前ら全員が俺に投降するってのはどうだ？」

「ふっ、冗談だろ」

女泥棒が笑うと俺の後ろにいた男がこん棒を振り下ろしてきた。

何とかそれをかわすと、次は左のやつが短剣を振る。

テネブラエを抜き防ぐが、もう一人の男のこぶしが俺の顔面に吸い込まれる。

「痛つてえなあ！」

見事に入ったこぶしを掴み、ひねり上げようとするがこん棒を持ったやつに邪魔され離してしまう。

ああもう！ めんどくせえ！！

俺はテネブラエを鞘に収め、放り投げた。

『お、おい！？ 何やってんだユーイチ！！』

「黙ってる！俺は剣術よりも拳術の方が得意なんだよ！」

相手が馬鹿でかい牛や、ちゃんとした武器を持っている人間ならテ
ネブラエは有効だ。だが、相手がショートレンジの武器を持っている
場合、懐に入られると邪魔になるだけなのだ。しかも狭い路地の
中。

三人の男を前に拳を構える。

頭の中で三人と組み合う状況を想像する。
いけるか？ いや、いくしかないだろう。

覚悟を決め向かおうとした時、俺の後ろから声が聞こえた。

Concspirituali
「神の御霊は光を宿す！」

呪文らしき言葉が発せられた後、強烈な光があたりを包んだ。

俺の背後で放たれたため、俺自身には何の被害もなかったのだが、光をまともに見てしまった盗賊たちは目を押さえ、悶絶していた。

チャンス！

「おおっ！」

掛け声を上げ、盗賊たちを倒していく。

十秒と経たず全員を倒した。女を殴る趣味は無いので、悶絶している女泥棒は放っておいたが……

そして、暴れないように盗賊たちを拘束していく。

その過程で気がついたのだが女泥棒がえらく若かった。見た目だけだと12、3歳。下手をすれば10歳程度だ。まだ顔にそばかすが付いているほどあどけない。

「まだ子供じゃねえか」

子供を拘束することに若干の罪悪感を感じていると。

誰かが声をかけてきた。

「ユーイチくん、大丈夫だったあ？」

声の主はアエルだった。

先ほど魔法を使ったのはアエルだったのだろう。

「ああ、助かったよ」

「あらあゝ、良いのよお。それよりもそっちの宝石を見せてくれるう？」

アエルが指を指しているのは、泥棒が持っていたバックだ。そこからは奪ったらしき宝石がこぼれ出ている。

「いいぞ。盗らないでくれよ?」

冗談交じりで言うつと、アエルが笑顔を俺に向けた後宝石を調べ始めた。本当に分かっているのか?

「うゝん……やっぱりないかあ……この街には無いのかなあ」

ぶつぶつと呟くと、調べ終わったのか立ち上がるアエル。

「じゃあそろそろこの街とはお別れかなあゝ」

『なんだ、もう立つのか。昔話でמושように思ってたのにな』

「うん。ここに来てだいぶ経つからもうそろそろ出発しようと思つてたのお」

「そうか……助けてくれてありがとな」

俺が礼を言つと、美人だけが持つことを許される素晴らしい笑顔を俺に向けた。

「ふふつ、縁があつたらまた会いましょう。ユーイチくん」

そう言つてアエルは去つて行つた。

「きれいな人だつたなゝ」

思わず見惚れてしまつたよ。

『はっはっは、すげえ美人だろ? 八百年前から全然変わらねえんだよなあゝ』

「……………は? 八百年前? 八年前とかじゃなくて?」

『おう。あいつはハイエルフだからな。寿命も千五百年くらいあるんだぞ?』

へえー、ファンタジー小説とかに出てくるエルフか……この世界にもいるんだなあ。

あれっ? でもハイエルフって確か金髪碧眼じゃなかったっけ?
この世界では違うのか……

「……って、その口ぶりってことはお前もそんな昔から生きてんのか?」

精密に言つとテネブラエは剣なので生きているとは違うのだろうが。

『ああ。アエルが子供の時のことも知ってるぜ?』

でたらめな世界だなあこども。

第二十一話 ご都合能力

アエルと別れた後、ギルドまで盗賊たちを連行し、アルテナから報酬をもらった。

まだ日があつたので、他に仕事でもしようと思ったのだが、めんどくさくなつたのでやめた。それに知りたいこともあつたしな。

「なあテネブラエ。アエルが使つてたみたいな魔法つて、俺にも使えるのか？」

『無理だ』

「即答!？」

ちよつとは夢を見させてくれよ。

「それつてやつば魔力がないからとか？」

『そうだな。どんな人間にも魔力つてのは大なり小なり備わつているはずなんだが、ユーイチからはほんのひとかけらも魔力が感じられない』

そういえば、この世界に召喚されたときにも言われた気がするな……

「あれっ？ でもフランを解放するときに、俺つて魔法使つたよな？」

フランの契約を破棄するときに呪文を唱えた覚えがある。

『そりゃあれだ、契約魔法つてのは触媒になる物……譲ちゃんの場合には契約書自体に魔力が込められていて、それを使っただけだから関

係無いんだよ』

「えー、じゃあ魔法使えねえの？ 密かに憧れてたんだが……」

元の世界において、魔法なんてものは存在しない。

たまに魔法を使ったインチキ宗教なども出てくるが、常識としてはフィクションとしての存在だった。

だが、フィクションだとしても使ってみたいという気持ちは誰しも持つことだろう。

俺も、魔法とは違うが、かめ。め波を打ちたいと思いよく練習したものだ。

「うーん、魔法とは違うが、似たようなものなら出来るかもしれないぞ？」

「魔法とは違うって……どんなやつだ？」

なんだろう？ あの某兄弟が活躍する世界の錬金術みたいなものか？

『ま、それは食堂についてから説明してやろう』

そういう話をしているうちに食堂に着いた。

客はほとんどおらず、フランが暇そうにしている。

「あつ！ ユーイチ様！ おかえりなさい！」

俺に気づいたようで、笑顔で迎えてくれた。

「ああ、ただいま」

「泥棒の方はどうでした？」

「うん。ちゃんと捕まえてきたぞ？ 当分食費にも困らないだろう」
俺とフランの食費だけ払えば良いだけだから、金貨1枚だけで数カ月はもつはずだ。

「そんじゃ、テネブラエ。さっきのやつを詳しく教えてくれ」

『ふむ。それじゃあまず嬢ちゃん。コップを持ってきてくれるか？』

「あつ、お水ですか？ ただいま」

パタパタと水を取りに行くフラン。

「？ 別にのど乾いてねえぞ？」

『別に水を飲むことが目的じゃない。あと、これから教える術は本当に才能が無いと使えないものだ。かつて、ある偉大なる魔術師が編み出した秘儀だが、使えたのはその魔術師一人しかない。しかもいくつか欠点もあるしな』

テネブラエが俺に説明していると、水の入ったコップをフランが持つてくる。

「どうぞ」

『ああ嬢ちゃん。コップ、そこでとどめてくれるか？』

「え？ はい……」

テネブラエの指示によくわからないまま従う。

テーブルにはコップとフランの手の影が出来ている。

『よし。ここからが重要だ。ユーイチ、この影の向こう側に空間があると想像しろ』

「影の向こう側に空間？　なんだそれ？」

『ええい！　いいからやれ！！　想像ができれば呪文だ。開けた。』^{I t t e r}

？　よく分んねえけど、とりあえずやってみるか……えーと、空間
だろ？　なんだろ……部屋、かな？

俺は今住んでいる部屋を想像する。

次に呪文か……

^{I t t e r}
「開け」

呪文を唱えると、テーブルにあったコップの影がドーム状に浮かび
上がった。

「うわっ！　なんだこれ？」

顔を近づけてみると、かすかだが煙のように揺らめいている。

『おつ、うまくいったな。さて、次だ。嬢ちゃん、そのコップをこ
の影に落としてくれ』

「えっ？　置くんじゃなくて落とすんですか？」

俺の行為を興味津津に見ていたフランは疑問の声を出す。

『ああ、かまわねえから落としちゃってくれ』

恐る恐るコップから手を離すフラン。

落下するコップはドーム状の煙を突き抜け、本来ぶつかるべきテ
ブルに当たる音もなく消えていった。

「あれ？ コップどこ行っただ？」
「消えちゃいました！？」

俺とフランが驚く。

『よし、じゃあ次だ。ユーイチ、閉じろと^{C l o s e}言え』
「えーっと、閉じろ」

言われた通り呪文を唱えると、ドーム状の煙が何事も無かったかのようにパツと消えてしまった。しかもその位置のテーブルが削り取られ、穴があいてしまっていた。

『ありや、座標認識がずれてたか……まあいい、嬢ちゃん、テーブルの上に持つてるお盆をかざしてくれるか？』
「あつ、はい！」

フランがお盆をかざすと再びテーブルに影が出来た。

「ユーイチ、今度はテーブルじゃなくてお盆にある影の向こうに空間を創造してから、もう一度^{I t t e r}開けだ。」
「^{I t t e r}開け」

先ほどの感覚を覚えたため、今度はさっきよりもスムーズに想像できた。

するとお盆の影が再びドーム状の煙となって浮かび上がり、底からコップが落下してきた。

ガシャンッ！

テーブルに叩きつけられ割れるコップ。

「うおっ!？」

「わわっ!」

『はっはっは、成功だ。なかなか才能があるぞ?』

茫然としている俺とフランをよそにテネブラエは機嫌がよさそうだ。

テーブルが水で濡れていく。

その後、もう一度閉じろと唱えると、今度はお盆に大きな穴が開き、フランがひっくり返った。

余談ではあるが、店の備品を壊しまくったことでこの後、アズラさんにこつてりと叱られることになる。

「なんだこれ? 魔法……じゃあ、無いんだよな」

『ああ。これは『空間術』という技だ。ま、説明してやると、魔力つてのはそもそもこの世界に満ちている物質のことだ。魔法を使う場合、人間が持っている魔力を使うんだが、空間術の場合は空中にある魔力を使う。だから魔力が無い人間でも使えるわけだ。才能は必要だがな』

「じゃあ、私が使おうと思っても出来ないかしれないんですか?」

『そうだな。才能がないとうんともすんともいわねえからな、それ以外にも条件はあるし……さっきも言った通り欠点も………』

テネブラエが欠点とやらを言い終わる前に俺の視界が反転した。

いきなり立ちくらみがしたのだ。しかも……

「は………腹減った……」

腹が減ったのだ。

『体力を使うから馬鹿みたいに腹が減る』

初めに言えよ!!

第二十一話 ご都合能力（後書き）

ユイチ、新能力覚醒！
ありきたりでスミマセン。
しかも設定に無理ありすぎ……

第二十二話 追加説明（前書き）

いくつか単語のご指摘をいただきましたので修正いたしました。
讓ちゃん〓嬢ちゃん

孤児院〓児童養護施設または施設

これ以外にもおかしな点がありましたらどんどんご指導お願いします。
す。

第二十二話 追加説明

「し、死ぬかと思った……」

空間術とやらを試した後、空腹でぶっ倒れてしまいアズラさんに頼み、料理を食べさせてもらった。

「しかし……よく食うねえ。坊やこんなに大食いだったかい？」

アズラさんが言うように本当によく食べた。

横に積まれた皿の量を見る限り二十人前ぐらいは食べたかもしれない。つか、そんな量の物質がどうやって俺の体に収まったのか見当がつかない。

「いえ……これはさっきの術のせいにして……」

テネブラエを睨みつける。

『はっはっは。ま、急にぶっ倒れるつつうでかい反動は初めだけだ。試しにもう一度呪文を唱えてみる』

疑いの目を向けつつ、テーブルに手をかざし呪文を唱える。

先ほどと同じようにドーム状の煙が浮かび上がるが、さっきのような立ちくらみが起きることはなかった。

「ほお、たいしたもんだねえ」

「すごいですユーイチ様!!」

フランとアズラさんが感心している。

ほめてもらうのはなかなか気持ちのよいものだ。

『慣れてくれば念じるだけで出せるようになるぞ？ 体力の消耗も

少なくなるし、効果範囲も広がる』

「へえ〜……で、これって何に使えるんだ？」

『収納とか色々便利になる』

「……………」

『……………』

は？

「それだけ？ 戦いとかに使えねえの？」

『あ？ 空間をどうやって戦いに使うんだよ』

……………だ、ダメだこいつ。早く何とかしないと……

「戦いに使えなくてどうすりゃいいんだよ！ 冒険者だぞ俺は!!」

収納便利って……確かに便利かもしれないが、冒険者である俺にとつてはそれほど必要ないんじゃないか？

『ま、待て！ 落ち着け！ 他にも使い道はある！ 空間内でちよつとした居住もできるし、ある程度の距離なら空間を通って転移も可能だ!』

俺の剣幕に圧されたのか、テネブラエがあわてて言い訳をする。
転移？ それならある程度は使えそうか……

「はあ……まあ、せつかく使えるんだ。何か使い方を考えないとなあ……」

まったく……無い頭を使わせるなよ。

ひとつため息をつく、呪文を呟き漂っていた煙を消す。
だが、今回も座標指定とやらを間違えたらしくテーブルに大きな穴が開いてしまい、再びアズラさんに怒られることになった。

第二十三話 緊急事態

俺は今朝食を食べている。この世界に来てから基本的に同じような朝を迎えている。

ああ、気持ちのいい朝だな。空気はおいしいし、空は晴れてるし、ベットに潜り込んできたフランの温かさがまだ残っているし。本当にいい朝だ。

……………でも俺の顔は暗い。

なぜか？ かいつまんで説明すると現在、俺は金欠であるからだ。

昨日、空間術を習得した時二十人分もの料理を平らげた挙句、食堂の備品を壊しまくったせいで食事代やら弁償代やらで盗賊を捕まえた時の報酬、金貨1枚は瞬く間に消えていった。

しかも今、俺の隣にはいつも食べている朝食の皿が十枚ほど積まれている。

どうやら昨日の一件で胃が巨大化してしまったらしく、いくら食べても満腹にならない。

結果、俺の財布の中の硬貨たちはほぼ全滅状態となっていた。

「やばい……食費だけで破産しそうだ……」

何とか食費を稼がないとなあ。

一緒に生活していると言っているいいフランも働いてはいるが、食堂に

下宿しており食事も食堂で食べているため、給料は雀の涙程度らしい。しかも日常に必要な生活用品（服や靴など）は俺が金を出している（アズラさんいわくこれが男の甲斐性らしい）ため、フランからお金を借りるという選択肢は実質存在しない。

「……………ってあれっ？ アズラさん。今日フランはいないんですか？」

確か俺のベットから出て行ったあと、食堂へ降りて行ったのだが、そのあとフランを見かけていない。

「ああ、フランならアガルの森に山菜を採りに行ってるよ。なんでも商店に並んでいるよりもおいしい山菜が採れる場所を知ってるんだってさ」

そういえばアガルの森でフランと出会った時も大量のポーター草を担いでいたし、植物の自生場所を知り尽くしているのかもしれないな。

「そうですか、ではフランが帰ってきたらこう伝えて下さい。「雄一は自分の食費すら払えないようなダメ人間になり下がりました」と……」

「はははっ、なんだいそりゃ？」

あれっ？ 冗談と思われたのか？ 割とガチだったのだが。

「じゃあそんなダメ人間にならないためにもとつと働いて金を稼いできる！」

俺は食堂を追い出された……

冒険者ギルドに入ると、こちらに気づいたのか、アルテナが俺を呼んでいる。

「どうしたんだ？ アルテナ」

「ユーイチさん。実は昨日の件なのですが……」

「ああ、盗賊のやつか……なにか問題でもあったのか？」

「あついえ、ユーイチさんに不備があつたわけではないのですが……昨夜、盗賊たちが牢屋から脱獄したみたいなんです」

脱獄？ まあ確かに、あの4人の実力から言えば可能かもしれないな。

武器や場所、人数のアドバンテージがあつたとはいえ、この俺を追いつめるまでの実力者だ（自信過剰）。

「そこで、新しい手配書が作成されました。一応ユーイチさんは捕縛した当事者なので、ご覧になっておいてください」

アルテナから手渡された手配書を見る。

捕縛任務

脱走した盗賊団を捕縛せよ

対象・盗賊四人

特徴・女一人男三人、全員が囚人服を着用

報酬・白金貨1枚

条件・必ず生け捕りにすること

「白金貨1枚!!? 昨日の任務って金貨1枚だったよな!？」

なんで昨日の今日で報酬の桁が変わってるんだ？

「昨日捕らえた盗賊ですが、取り調べの結果この大陸でもっとも影響力のある盗賊団『凍てつく大剣』の構成員だったことが分かりました」

『凍てつく大剣』？ また中二病臭いネーミングセンスだなあ。

そっぴや捕まえた女泥棒も反抗期を抜けきっていないような子供だったな……

「……それで、その『凍てつく大剣』？ の人間だと、なんで報酬が跳ね上がるんだ？」

「『凍てつく大剣』の構成員はたとえ捕まったとしても、その仲間の手によって口封じをされる可能性が高いんです。それが出来なくても、何らかの方法で自決をすることが多く、情報が手に入りづらいんです」

「盗賊団の情報が欲しいから大金をかけるってわけか……」

情報というのは、ある意味黄金より価値がある。元の世界でも重要人物や巨大組織の情報は知ってしまっただけで殺されると聞いたことがある……ドラマの中でだが。

「かなり重要度の高い任務なので、現在、潜伏していると思われるアガルの森をAランカーを含めた複数の冒険者が搜索中です」

「アガルの森!？」

声を荒げる。

アガルの森と言えば今フランが行っている場所だ。

俺はギルドを飛び出した。

第二十四話 断末魔（前書き）

少し残酷な描写が含まれます。
ご注意を

第二十四話 断末魔

アガルの森

俺がここに来るのは二度目だ。

王都の北門から、目算でだが約三十分の距離。だが今回、全力で走ってきたため五分足らずで森に入ることができた。

だが、森に入ってからフランを闇雲に探しまわってみたものの、さっぱり見つからない。どころか冒険者や盗賊の人間さえ見つからない。

アガルの森はそれほど広い場所ではない。人が行動出来る範囲となると大体東京ドーム二個分といったところだ。しかも俺は強化された体で飛び回っているのだ、フランが見つからないにしても誰にも会わないっていうのはあり得るのか？

三十分ほどだろうか、森のほとんどを探し終わった俺は一つ可能性を考えた。

フランはすでに街に帰ったのではないだろうか。そうでなければそもそも森に来なかった可能性もある。

そう考えた俺は一度森を抜けることにした。

だが、森の中心部まで差し掛かったところでその可能性は崩れた。

「この女がどうなってもいいのか!！」

フランが盗賊たちに人質にされていた。しかし盗賊が武器にしているのは先のとがった枝だ。さすがに脱走するときには武器は持っていけなかったようだ。

盗賊たちと対峙しているのは恐らくは冒険者と思われる男が二人。二人とも剣の構えからして、アルテナが言っていたAランカーだろう。

そして俺は盗賊と冒険者の間に飛び込む形となっていた。

「あつ！ あんた昨日の！？」

盗賊が俺を見て叫ぶ。昨日の手配対象となっていた女の子だ。

「ゆ、ユーイチ様！！」

フランが俺を見て叫ぶ。

「ちつ！ 次から次へと！！」

「エリス！ てめえがもたもたしてるからだぞ！！」

「なっ！ あ、あんたたちこそ人質なんかとるから足が遅くなるんだ！ 離してやりなよ！」

盗賊たちが内輪もめをしている。どうやらエリスと呼ばれた女の子と他の三人は折り合いが悪いようだ。

いつもなら一生やってるとでもいうところだが、今はフランが人質になっているため、話をしている暇もない。つまり

「お前ら、フランを離すか俺に殺されるか選べ」

俺は怒っているのだ。

フランは俺が一度救った。正直、それを恩着せがましく言うつもりはない。だが、一度救ったのならその後の面倒も見るべきだ。これは児童養護施設のジジイから教え込まれた俺の行動原理だと自覚している。

奴隷から解放した直後は、フランのその後はフラン自身が決めるべきだと思っていた。もちろん、ジジイの教えに基づきサポートはするつもりだったが、結局、俺がフランに何をしようとも、その後を決めるのはフラン自身なのだ。

まあ、その時はこの世界の無知がたたって、男の甲斐性がなんだとアズラさんに突っ込まれたのだが……

結局何が言いたいのかというと……俺が救ったやつを傷つけることは許さない。

実に利己的ではあるが、俺の性分なので仕方がない。

「ば、馬鹿かお前……人質を離すわけねえだろうが！」

盗賊の言葉は勇ましいが、すさまじい形相でにらみ、テネブラエを向けてくる俺に対してビビっている様子だ。

「き、君！　あまり盗賊を刺激しないほgs……！？」

なぜか盗賊とおなじく俺に気押されていた冒険者。その一人が、落ちて着けと俺に話しかけたのだが、その言葉が途中で途切れた。

その場にいた全員の視線が冒険者に集まったが、そこに冒険者の姿は無い。二人いたはずの冒険者は一人になっていた。

「……………えっ？」「……………」

いまこの場にいる全員は同じ表情をしているだろう。そしてその表情はすぐにもう一つの異変に向けられた。

冒険者がいた空間のさらに向こう側、ただ単に森が続くはずだったその場所はなぜか他の場所と比べて暗くなっていた……いや、黒い壁に覆われていたのだ。

全員が呆然とする中、そのうちの一人、冒険者の表情だけが歪んだ。原因はすぐに分かった。冒険者の腹から黒い棒状のものが突き出ている。そして、その棒状のものは黒い壁から生えていたのだ。

「な、なに……………ごばぁー！」

疑問の声を口にしようとした冒険者は代わりに大量の血を吐きだした。

「何が……………起きて……………」

目の前の光景に俺は啞然とする。
人……………人が死んだ。

元の世界では人の葬式ぐらいは体験している。だが、その時の死体は死に化粧が施され、きれいなものだった。
もちろん目の前のような血まみれの状態ではなかった。

「うつ………、た、助けで………！」

生きている！

一目見て助かりそうな状態ではなかったのだが、冒険者はまだ生きていた。

冒険者からの精一杯の言葉に手を伸ばしかける………が、冒険者を助けることはできなかった。

黒い壁が口のようにぱっくりと開き、冒険者を引きずりこんだのだ。

「ひg l k hがk l h g…あk hが………っ！」

冒険者の断末魔が響き渡り、血しぶきが吹き上げる。肉片が飛び散り、冒険者の姿は消えた。

「きゃあああああーっ！………！」

フランの叫び声はこの場にいる全員の気持ちを代弁していた。

第二十四話 断末魔（後書き）

いきなりなんだ！！　と思われるような残酷な展開。
あれ？　こんなに残酷にするつもりはなかったのですが……

第二十五話　グーラ（前書き）

残酷描写あります。お気をつけください。

第二十五話　グーラ

「きゃあああああーっ！！！！！」

フランの叫び声により俺は我に返った。

目の前にいるこれはなんだ……っ！

動物？　魔物？　少なくとも俺がいた世界にはこんなものはいなかった。少し大きい狼や牛くらいならまだ俺の想像の範疇だ。だがこれは違う。

動物とか、こっちで対峙した魔物や魔獣とは違う。そんなものなど一笑に付すほどの馬鹿馬鹿しい存在。そんなものが目の前にある。

「トリプルエス
SSSクラスだ！！！」

盗賊の一人が叫ぶ。
トリプルエス
SSSクラス？

なんだそれは……たしか、アルテナが言っていた冒険者のクラスは
ダブルエス
SSクラスまでだったはずだ。

俺がこの場では必要のないような思考を巡らせているとき、盗賊たちが発狂したかのように行動を起こした。
腕に抱えていたフランを脇に投げ捨てたのだ。

「きゃあ！！！」

投げ捨てられたフランは、傍にいたエリスにぶつかる。盗賊は仲間

に配慮する暇もなかったようで、倒れたエリスに目もくれず、逃げ去った。

「フラン!!」

フランをぞんざいに扱った盗賊に憤りつつフランに駆け寄る。幸い、エリスがクッションになったようでフランにけがは無い。代わりにエリスが目回していたが……

「……………っ！ ユーイチ様！ あれ!!」

フランが俺の後ろを指差す。つまり、黒い壁に対してだ。

振り返ると、黒い壁がうごめいていた。すでに壁、と呼んでいいのか分からないほどに流動し、脈打ち、そしてその中から巨大な目玉が現れた。

あまりにグロテスクな光景に吐き気を覚える。

現れた巨大な目玉は、ギョロリとあたりを見回し、俺、フラン、そしてエリスをなめまわすように見つめた。

「おい！ 早く行け!!」

森の奥から大声が響いた。先ほど逃げ去った盗賊たちだろう。

広い森にも関わらず、文字通り足を引っ張りあっているようだ。

ギョロ！

目玉が盗賊たちが声を上げた方向を凝視する。こいつ……でかい目玉のくせに音の方に敏感に反応しているのか？

盗賊の居場所を確認した黒い壁……いや、でかい目玉は、体と思しき黒い部分をくねらせ盗賊たちのもとへと向かっていった。

「な、何だったんだ今は……」

目の前からアレが消えたことにより、安心したのか体から冷や汗が流れ出る。

「ゆ、ユーイチ様、あれをご存じ無いんですか!？」

『常識のねえやつとは知っていたが、限度があるだろ……』

フランとテネブラエが呆れたように言う。こちらの世界ではあれも常識の範囲のものなのか？ あんなものが日常的に現れたら発狂しそうなものだが……

「と、とにかくここを離れよう。いつアレが戻ってくるかもわからないし」

傍に転がっていたエリスを肩に担ぎ、同時にフランも腕に抱える。

「あああ、あの！ 私は自分で歩けますから……」

あわてて、遠慮するフラン。確かに男に抱えられるというのは恥ずかしいだろう。抱える方の俺も少し気恥ずかしい気がする。が……

「悪いけど、この森は安全じゃない。早く抜けないと危ないんだよ」

普段ならば、フランのペースに合わせても全く問題は無いだろう。だが、先ほと言ったように、アレがいつ戻ってくるかわからない。そんなときにゆっくりと森を抜けるなんてことは自殺行為に等しい。

「それで、さっきのアレは何なんだ？ 盗賊はSSSクラスって言うだけ……」

何とか納得してくれたフランといまだ気絶しているエリスを抱え、猛スピードで森を走る。

重さ的にはなんともないのだが、人間を二人抱えていることで、なかなかバランスがとりづらい。よって、猛スピードといっても森に入ってきたときの半分くらいの速さになっている。

「さっきのアレはSSSクラス。別名『災害級』と呼ばれる魔物です」

『しかもアレは「暴食」を司る『グーラ』ってやつだ。理性のかけらも持ち合わせていない、目の前にあるすべてを食いつくす厄介な奴だ』

災害……生物にその名をつけるのだから間違いなく人間の手に負えるものではないのだろう。

こちらの世界に来てから、大概の人間や魔物には負ける気がしなかった俺だが、アレとは絶対にやりあいたくない。絶対に死ぬ自信がある。

しばらく走ると森から無事抜け出ることができた。森の入口からは王都がかすかに見えている。

「そんな危ないやつがこんな所にいるって……街のやつらも危ないんじゃない………」

ここは街からそう離れていない。ここから見える程度の距離しかない。

もしグーラが街に向かったなら……想像しただけで背筋が凍る。しかもこの心配は、グーラが大木をなぎ倒しながら森から出てきたことにより濃厚なものとなった。

………っ！………う………っ！

鳴き声なのか、うめき声なのか分からない音を発するグーラ。

あわててテネブラエを抜き身構えるが、すぐにグーラの目玉の上部分に視線が移った。

人間の手や足、そして頭が三体。グーラの体から突き出ていた。それぞれがあり得ない方向に曲がりへし折れ、つぶれて血まみれになっていた。

逃げられなかった！

盗賊たちはあの後追い付かれたのだろう。そして、俺の目の前で食われた冒険者たちの後を追ったのだ。

「………っ！ フラン！ エリスを連れて逃げる！！」

グーラに剣を向けつつフランに怒鳴った。フランは俺の意図を汲んだのか、生物としての本能だったのか、エリスを抱え走って行った。しかし、これは俺の大間違いだった。荷物になるエリスを連れていかせたこと。いや、そもそも逃げると言ったこと自体が間違いだった。

グーラは剣を向ける俺には目もくれず、フランの方へと突き進んでいったのだ。

第二十六話 やっぱりご都合能力（前書き）

グーラのイメージとしては、千と千尋の。隠しのカオナシ暴走バー
ジョンを大きくした感じです。

第二十六話 やっぱりご都合能力

グーラがフランたちに向かって突き進む。

「ま、待て!!」

グーラの後を追う。

何なんだこいつは……何を基準に獲物を追いかけているか分からない。視覚なのか聴覚なのか、あるいはその両方が……

巨体に似合わず、グーラは速かった。普通の人間では追い付けないような速度だ。しかし、意外なことにフランの足の方がグーラの速度を上回っていた。たしかフランは、エリスを抱えていたはずなのだが……薬草を運んでいた時の馬鹿力と同じように獣人族^{ビストロイド}の特徴なのかもしれない。

ともかく、ある程度の距離を保ちながら、グーラとフランの距離が縮まらない。

速度的には俺の方が断然早かったため、難なくグーラに追い付き、剣をその巨体に振り下ろす。

ガギンッ!!

予想外に剣がはじかれた。しかもグネグネと動いているその体にもかかわらず、その感触は金属のようなものを切った時のものだった。しかもグーラは、効かなかったとはいえ剣をふるわれたにも関わらず気にもとめていないようにフランたちを追いかける。

「なっ……………！」

巨体ゆえ効果は少ないにしろ、ひるむなり俺に気をそらすなりする
と思っていた俺は、グーラの無反応を見て一瞬だが体から力が抜け
てしまった。しかし、その一瞬に衝撃が俺の体を襲った。

意図的かどうかは分からないが、グーラの足？らしきものに引っ掛
かり、転倒させられていた。

「くそっ……！」

あわてて体を起こすと、グーラの体から巨大な腕が生え、フランた
ちがいた地面をえぐる光景が目に入った。何とか腕には当たらなか
ったものの、地面をえぐった衝撃でフランたちは吹き飛ばされ、地
面に叩きつけられていた。

さらに、それに追い打ちをかけるようにグーラの腕がフランたちに
向かう。

待て、ダメだっ！ 届かないと分かっているても手が伸びる。フラン
が引き裂かれ、潰される光景が見に浮かぶ。

畜生……元の世界で武術を習っても、異世界に来て力がついても女
の子一人救えないのか俺は……

「あああああああ……っ……！」

思わず目をつむり、叫んだ。フランを失う悲しみか、自分の不甲斐
なさへか……しかし、それは思わぬ効果を生み出した。

……………？ 何も聞こえない。

地面をえぐる轟音も、フランたちの断末魔も、何も聞こえない。

恐る恐る目を開くと、グーラの腕がフランたちに伸びていたのだが、なぜかその腕が届いていなかった。

よく見ると、フランたちの前に黒い煙が壁のように立っており、グーラの腕はその中へと突っ込まれていた。

空間術？

これは俺が先日習得した術だ。だとすれば出したのは俺なのか？
少し冷静になり分析すると、黒い煙はパッと消え去った。そう、グーラの腕と一緒に。

『こ、これは……っ』

テネブラエが何かに気づいたように声を上げる。

……………？

グーラが自分の無くなった腕を凝視する。一瞬何が起こったのか分からない様子だったが、腕から血のように流れ出た真っ黒の液体を見て暴れだした。

……っ！！……！！……k j f w！！！！

のたうち回り、体の形をグネグネと変形させる。傍にいたフランが呆然とグーラを見ている。

危ない！

「フラン！ 離れる！！」

大声で叫ぶ。ハツと我に返ったフランは、エリスを抱き直すと、その場から逃げた。

グーラの巨体がフランを襲うことは無かったが、俺が叫んだことにより、ターゲットが俺に変わったようで、目玉が俺を正面に捕らえる。

「あつ、やべっ！」

あわてて剣を構え直す。剣は効かなかったが、防御用としては使えるだろうとの判断だ。

『ユーイチ！ さっきのアレ、もう一度出来るか？』

「ああ？ さっきのは無意識で出しただけだ。何が起こったのかも

……」

『なら俺が指示してやる。まずあいつの影に集中しろ！』

影に集中？

とりあえず突進してきたグーラをぎりぎりのところでかわすと、グーラの後ろ姿を凝視する。イグニスバイソンと戦った時のように、突進後は隙ができるはずだ。

だが、その予想は裏切られた。俺に突進した直後、背中であった場所に目玉が現れ、間髪いれずに再び突っ込んできた。グーラに前後ろの概念は存在しないのか！？

「なんだそりゃ！？」

辛くもそれをかわすと、また同じように、方向転換せずにグーラが突進してきた。

「集中つつたつてどうすりゃいい!？」

『空間術を作るだけでいいから、一瞬でいい!』

一瞬でもきついんだが……でも、あーくそっ！ 最悪な方法をおいっちまった。

「死んじまったら怨むぞテネブラエ!」

グーラをかわした後、まず影には集中せず、距離を取るために全力で横っ跳び。
やはり間髪入れずに突っ込んでくるグーラだが、多少距離が生まれた。

『影に集中したら、アレの一部分を空間に入れるように想像して呪文を唱えろ!!』

「……^{Inter}開けっ!」

グーラの前半分を煙で覆うように想像し、手をかざす。すると、想像した通りグーラの足元の影から煙が上がり、グーラを包み込んだ。昨日はコップほどの大きさしか出せなかったのに、急激な成長だ。

『閉じろ!-!』

間髪いれずにテネブラエが叫ぶ。

「^{Close}閉じろ!-!」

俺が呪文を唱えると、やはり煙は何事もなかったのように消え、後に残ったのは後ろ半分だけ残ったグーラの姿だけだった。

その体の中央には、蒼く光る球体が埋まっており、その球体に集まるようにいまだ体がうごめいている。

だが、すぐに球体の光が消えうせ、グーラの体も動きを止めた。

「は、ははは……やった？ 倒したのか？」

『まさか座標認識のズレを攻撃に使うなんて……俺でもそんな使い方しなかったぞ』

よくわからないがテネブラエが感心しているらしい。っと、それよりも……

「フラン！！ ふ……らんは……」

フランの無事を確認しようとしたのだが、急にひどいめまいが起きた。

ああ……これって術の反動か……

目の前に駆け寄ってくるフランを目にしながら、俺は意識を手放した。

番外編 門番は見た

「今日も平和だなあー」

青空を見上げながら『俺』が言う。『俺』というのは、北門の警備部隊の隊長であるカール・グスタフ。つまりは俺のことだ。隊長、といっても十人しかいない門番のまとめ役程度の認識しかしていない。こんな所にいるのだから昇進話も入ってこないし。

「平和と言っても今日は緊急手配が回ってますよ」

こいつは俺の部下、ゴードンだ。優秀な部下だが、人がまったりしているところに水を差さないでほしい。

「緊急手配ってアレだろ？ 『凍てつく大剣』の下っ端を捕まえるみたいな……確かギルドから冒険者が二、三十人派遣されてたはずだし大丈夫だろ」

「しかし、重要度を考えると軍隊も盗賊確保に動いた方がよいのでは？」

確かに『凍てつく大剣』の情報確保はギルドだけでなく、国としても重要度は高い。

だが、心配は無いだろう。

二、三十人もの冒険者の中にはAランカーもいると聞いた。Aランカーと言えば城の兵士にもそうそうはいない実力者だ。そんなところに門番程度の兵士が行ったところで足手まといにしかなるまい。

「いや、俺達が行ってもしょうがないだろう。城の方も戦争で人材不足だからな。冒険者で十分と上も判断したんだろう……」

「人材不足というのは分かりますが……そうだっ！ 数日前に勇者様が召喚されましたよね？ その方に頼めば……」

「いや、勇者様とやらは昨日の朝方、王都を発ったそうだ」

王都の市民たちにはいまだ知らせていないが、伝説の存在であった勇者が先日実際に召喚されたそうだ。されたそうだ、というのは、我々末端の人間には情報が噂としてしか伝わってこないからだ。

勇者が召喚されたという重大なこと、本来ならば国を上げての祭りにでもなりそうなのだが……お上の考えはよくわからん。

ちなみに勇者が王都を発ったというのは、南門の隊長である俺の友人から聞いた話だ。

「血気盛んなのは結構だが、俺たちの仕事はあくまで門の管理だ。我慢しろ」

ゴードンは恐らく前線の兵士のような実戦を体験してみたいのだろう。戦場に行ったことのない若い兵士にはありがちなことだ。

考えを読まれたことを気づいたのか、少し顔を赤くしながらゴードンは仕事に戻った。

正直、門番の仕事が退屈であることは俺も同感だ。毎日毎日、門を出入りする商人や冒険者の荷物の確認作業。それ以外は、夜の巡回任務。危険こそ少ないが、やりがいがないさすぎる。

「若いやつらの気晴らしになるようなことがあれば良いんだがなあ」

このセリフを聞かれれば、「何を物騒なことを言ってるんだ!」とどやされそうだが、俺自身も何か事件でも起きないかなあ〜と考えていたりする。

……………それが原因なんてことは誰も思わないだろうが、次に起こったことは俺を少しばかり動揺させることになる。

ドゴオオオオン!!!

門の外側から大きな音とともに地響きが起こった。

「な、何だ!」

慌てて門の外に向かうと、アガルの森付近で何か巨大な黒い物体が暴れている。しかもだんだんこちら側に向かってきているのだ。

「あ、アレは……まさか……」

「隊長!!! 災害級です!!!!」

やはりか!

城壁の上にいたゴードンの叫びを受け、確信した。

今こちらに向かつて来ているのは災害級だ。巨大であるというのは普通の魔物にも当てはまることであるため、判断材料にはならないのだが、アレだけは見間違わない。

俺達兵隊が訓練の際初めに教えられることがある。それは竜神族ドラゴロイドと災害級とは戦うな、だ。

「民間人を街に入れて門を閉じる! 急げ!!!」

俺の指示に部下たちが従う。

何とか全員を収容し終え、再び災害級の方をみるとあることに気付いた。

人……が襲われている？

街と森との半分くらいの距離まで近づいてようやく気がついた。

少女が、子供を抱えこちらに走ってきている。しかも災害級には、無謀にも男性が戦いを挑んでいた。

「まずい！ ゴードン……！」

「は、ハイ……！」

「すぐに全員を招集……いや、一人は城に応援を呼びに行かせる！ そのほかのものは完全武装して集合！ 出撃するぞ！」

ゴードンは「正気か……？」という表情を一瞬した後、自分が兵士であることに気付いたのかテキパキと装備を整え、部隊を整列させてゆく。

俺自身もよろいを纏い、槍を手にとると再び災害級の動きが目に入った。

先ほどまで少女を追いかけていた災害級だったが、今は男性を標的としている。その攻撃を辛くもよけ続けていた男性だったが、しばらくすると抵抗をやめ、災害級の前で立ち止まってしまった。

やばい……！！

「逃げろ……！！！」

俺は大声で叫んだ。だが、とてもじゃないが声の届く距離ではない。

ダメか！

一瞬そう思ったのだが、予想はうれしい方向に裏切られた。

男性が手をかざすと、災害級の体が半分ほど煙に覆われた。そして次の瞬間、煙が消えると同時に災害級の体の半分も消え去っていた。災害級はしばらくのたうち回った後、その動きを止めた。

「な、何だっただんだ今のは……」

俺を含め、この場にいた全員が目の中の光景を呆然と眺めていた。

番外編 門番は見た（後書き）

初めての番外編です。

グーラと対峙したユーイチとは別の視点で描いています。
今後の展開にも影響があります。

第二十七話 おはようございます

目が覚めるとそこはベットの上だった。

と言っても、施設の布団や食堂のクソ硬いベットではなく、触ったことのないようなすさまじく柔らかいベットだった。

結論としてここは俺の知っている空間ではない。あたりを見回すと、そこは豪華絢爛、そこかしこに金やクリスタルやなんだか分からない置物やらが置いてあり、どう考えても俺がいるべき場所ではなかった。

「あれ？ なんだここ……」

『お！ やつと起きやがったか……』

ベットの脇に立てかけてあったテネブラエが俺に気づいたようだ。

「テネブラエ……これってどういう状況？」

『まあ覚えてないのも無理はねえな。お前が倒れてからここまで運んだのは門の兵士だったからな』

倒れた………そうだ！ 俺は確かグーラとかいう化け物を倒した後……

ガシャン！

不意にガラスが割れる音がした。

音がした方向を見ると、大きな扉の前でフランがこちらを見ていた。音の正体は、フランが持っていたコップを落としたときに出了た音らしい。

「ゆ、ユーイチ様……………」

フランは俺が起きたことが信じられないと言った表情で俺を見つめている。

「お、おうフラン……………おは…よう?」

俺がフランに声をかけると、みるみる目に涙をため、俺にタツクルをかましてきた。

「おおう!?!」

割と不意を突かれた形で抱きつかれたため、かなり心臓がドキドキしている。何しろ起きたばかりで頭が回っていないのだ。

「うつ……………!　グス……………ユーイチ様……………っ!　も、もう……………目が覚めないかと……………」

俺の懷で涙をこぼし、すすり泣くフラン。

「い、いや……………寝たんなら起きるのは当然だろ……………」

『いやお前、かれこれ三日ほど寝っぱなしだったんだぞ?』

は?

「三日!?　三日つていち、にい、さん、の三日か!?!」

『まあ、その三日だな……………空間術を覚えてからいきなりあんな規模を出せば、そりゃあ強い反動も来るだろうさ』

三日寝込むって……医療制度が確立した元の世界だったらいざ知らず、この世界で三日も寝てれば下手すりゃ死んじゃうんじゃないか？

『嬢ちゃんに礼を言つときな。城の召使もいるのに、徹夜でお前の看病をしていたんだからな』

「い、いえ……私は別に……でも、ユーイチ様が目覚めて……本当に……」

フランが再び泣き出した。

……そうか、三日も寝てたいたらフランが心配するのも無理は無いが……しかも看病までしてくれて……

「ありがとう。フラン」

優しく、出来るだけ優しく頭をなでる。猫耳が手に当たって、ほどよく気持ちがいい。

「っと、そうだ。それで結局、なんで俺はこんな所にいるんだ？
って言うかここどこよ？」

「……グス、ここはですね……」

「おお！！ 目え覚ましたか！！」

フランが俺の質問に答えようとしたが、扉から入ってきた声によって遮られてしまった。

「はい？」

見ると、そこに立っていたのは、恐らく四十代前後の長身の男性とまだ二十歳を超えて間もない程度の青年。二人とも兵士の格好をしている。

「お前さんがグーラを倒しちゃったのをこの目で見たときは俺の頭がどうかしたのかと思ったよ。一体どんな魔法を使ったんだ？ あっ、いやいや、王都を救った英雄だ。まず名のらねえとな！」

「は、はあ……」

「俺は北門で警備隊長をしているカールつてもんだ。横にいる奴は俺の部下のゴードン。まああんたほどの人物の相手をするには階級が低すぎるが、そこは我慢してくれ！」

えーっと……俺はまだ話していないのだが…… っていうかこの感じ、ギルドの受付でも同じような人がいたような……

「あ、あの…… すみませんが、俺はまだ事態がよく呑み込めていないんですけどね、とりあえずここはどこなんですか？」

「おお！ そうか、お前さんはずっと眠っていたんだっとな…… ゴードン！ 説明してやってくれ！」

「そこは自分でしないんですね…… えー、まずユーイチ君が倒れた後、一度北門の宿直室に運んだのですが、城の方からそれほど人物を硬いベットに寝かせておくのは忍びない、ということでご、城の客室にて看病をすることになりました」

「つまり、お前さんがいるのはこの大陸でもっともでかい国のもっともでかい城のもっともでかい客室のベットで寝っ転がっているってわけだ」

うわっ！ マジか！ いや、正直途中からうすうす気がついてたのだが…… 豪華な部屋に兵士とくればやっぱりお城だろう。

「でも、それでなんでこんな好待遇なんですか？ そもそも城に連れてこられる理由がよく……」

「そりゃお前、災害級を……」「隊長、すみませんが」……ん？

「もうそろそろ行かないとまずいですよ、命令でここに来たんですから」

「おお！ そうだったな！ ユーイチ、病み上がりで悪いがちょっと一緒に来てくれるか？」

「……え、ええ」

カールさんが催促したため、フランの手を借りて何とか立ち上がる。さすがに三日も寝ていたためかなりフラフラする。

「それで……どこに行くんですか？」

「ああ、これからモントウ王国の国王陛下にあってもらいに行く」

……はい！？

第二十八話 玉座にて

大変なことになった。

こちらの世界に来て8日目（寝てた分合わせて）、俺は国王の前に立たされている。

正確には王座の前で正座をしている状態なのだが……なにせ西洋の儀礼なんて知らないからなあ……映画とかで見たことはあるが、ひざまずくのつて右足を立てるのか左足を立てるのか覚えていない。よつて日本人にはポピュラーな正座をしているわけだ。しかも隣には今にも泣きそうな顔でフランが身を縮めて震えている。そりゃ王様を前にしたら緊張するわなあ……

はつきり言つて俺も緊張している。

神様や王女様には既に会っているのだから、緊張もさほどないと思つていたのだが、目の前の王様はこれまでと違い、なんかこう……王様らしい？

今まで会つたやつらは、神様はくわえ煙草のおっさんだったり、雰囲気こそそれらしいが子供の外見の王女様だったり、いまいち俺のイメージに合致しない面々だった。

それらと違い、この王様は王座に座り、真っ赤なマントをはおり、口元には金色のひげ、頭には王冠。など、どこからどう見ても王様の風貌をしている。しかも、これまで会ったこともないような重苦しい空気を醸し出しているのだ。

極めつけは周りにいる取り巻き達だ。ギルドで出会ったチンピラとは違い、一人ひとりが役職の高そうな人間ばかりである。ただ、その中にはどこかで見たことのあるような神官服姿の男たちも混ざつていた。目を向けるとサッと目をそらすのだが……どこで会ったんだっけ？

「ふむ、そなたが災害級を打倒したというものが……名は確か……」
「『ユーイチ』サヤマ』でございます陛下」

王様の隣に立っていた男が王様に注釈を入れる。この男、見た目は三十〜四十代で、男には不釣り合いな腰まである髪の毛が目についた。しかも、言葉遣いが上から目線の王様よりも、ずっと俺を見下すような眼をしている。良い印象とは言い難い。

「おお、そうだ。ユーイチだったな。こたびの偉業御苦労であった。ほめてつかわす。まずは自己紹介だ。我の名は、ワング・ジ・アラム・モントウと申す」

「は、はあ……ユーイチと言います」

上からの物言いにもつと腹が立つと思っていた俺は、割とすんなり王様の言葉を受け入れることができたため、逆に気の抜けた返事をしてしまった。

「貴様、何だその気の抜けた態度は」

俺の態度が気に入らなかったのか、王様の隣にいた男が俺を睨みつける。

「サテレス、よい」

王様が男を制す。男はサテレスと呼ばれているらしい。

「ユーイチよ、そなたに褒美を与える。災害級を打倒したのだ。本来であればもっと多くの物を授ける所なのだが、たび重なる戦争で国庫もなかなか厳しい状況にあるのでな」

「は、はい。しかし、災害級というのはそれほどにすごいものなん

ですか？」

「ふむ、確かそなた達は魔物のいない世界から来たのであったな……災害級とは、その名の通り人間ではどうしようもない魔物のことを指す。小国程度ならば一匹に滅ぼされるようなものだ。撃退程度なら何とか出来るであろうが、討伐となると前代未聞だ」

国を滅ぼすって、そんな化け物と戦っていたのか俺は。今思い返すと背筋が寒くなるな……

「では、褒美だ。先ほども言った通り今は財政難でな、白金貨500枚ほどしか出せないが」

………ん？ なんだって？

「き、聞き間違いでしょうか、今、白金貨を500枚とおっしゃいました？」

「うむ。本来ならこの十倍、いや五十倍は出すところなのだが……」

「いやいやいやいや！！ そんな大金もらえませんよ！！！」

首が吹っ飛ぶくらいに首を横に振る。

白金貨500枚と言えば日本円で大体五億円だぞ！ 数日前まで一介の高校生だった俺にとっては、目が飛び出るほどの大金だ。

「はっはっはっは！！ そなた達は全く同じ反応をするのだな。そなた達の国では遠慮が美德とされているそうだが、この国では好意を受け取らぬのは大層無礼なものとされておる。黙って受け取っておけ」

「えっと……はい、それではいただいております………あれっ？ 今、そなた達とおっしゃいましたか？ それに俺の国のことは話していないはず……」

「ふつ、そなたのことは勇者……いや、そなたの友人であるマモル
「オトタケから聞いておる。異世界から来たことなども含めてな」

異世界。という言葉にフランとテネブラエが反応した。そりゃ、この世界とは別の世界があるとすれば興味も持つだろう。だが、俺は別の言葉に反応した。

……護？

「ま、護がここに居るんですか!？」

やはり護もこの世界に召喚されていた！ しかも予想通り勇者として……

「ふむ、残念だが、お主が担ぎこまれる前日に王都を発ったよ。魔軍との戦争の指揮を取りに前線へな」

「せ、戦争ですか……」

勇者として召喚されたのだから、多少は危険な任務に就くのだろうと思っではいたが、それはRPGのように少数で魔王などと戦うような形だと思っていた。しかし、今聞いた限り大規模な戦争に巻き込まれているようだった。

そんな中に飛び込めば、いくら護が剣の腕が強くても関係がなくなる。いくら腕の立つ人間でも何十人、何百人に囲まれると、なすすべもなく潰されるだけだからだ。

「ふつ、心配そうだな。そこで、少し相談なのだが、ユーイチ。そなた、勇者とともに戦ってはくれまいか？」

俯いていた顔を上げる。するとそこには、にやりと笑った王様と顔

をしかめたサテレスが並んでいた。

「戦う……というのは、俺に護と一緒に戦争をしるということですか？」

「うむ。災害級を打倒すほどの腕だ。心配ならば勇者の背中をその腕で守ってやるとよい」

確かに、護は強い。俺には劣るとはいえ、それでもほぼ同等の強さだ。二人揃って何かに負ける想像がつかないほどだ。と言っても、施設のジジイには強化された二人がかりでも勝ち目がないと想像がついてしまうのだが……

だが、それほど強い護でも、さすがに戦場なんて所にいたら心配する。つい先日まで護のことを心配すらしなかった男の言うセリフではないが、さすがに死と隣り合わせな状況に親友がいたとなればいくらかは気になって当然だろう。

そして、そういった思考を巡らせながら、俺は一つの決断を下した。

「面倒くさいのでお断りします」

第二十九話　まためんどくさくなってきた（前書き）

お気に入り登録が千件を超えました。

私のつたない文章を応援してくださってありがとうございます。
これからも文章能力向上に努め、投稿させていただきます。

第二十九話 まためんどくさくなってきた

「面倒くさいのでお断りします」

この言葉に、当然と言えば当然だがこの場の空気が凍りついた。

特に顕著なのが王様の隣に立っているサテレスだ。顔を真っ赤にさせ、拳を震わせている。

「き、貴様っ！！ 陛下のお言葉をなんと心得……」

「ぶわはっはっはっはっは！！ なんとここまで勇者の言うとおりだとはなあ！！」

凍りついた側近たちや激怒しているサテレスと違い、意外にも王様が大爆笑していた。

「え、えーつと……どういうことでしょう？」

恐る恐る王様に聞いてみる。少なからず怒鳴られるやらなんやらされると思っていたのだが……

「いやなに、勇者にそなたのことを聞いたとき、そなたを誘ってみ
てはと尋ねたのだが、『彼はめんどくさいと言って断るでしょう』
と言っていたのだ。まさにその通りであつたなあ、くっくくく」

護が？ まあ、護とは長い付き合いだから俺の行動パターンを予測してもおかしくないか……しかし、そんな俺のマイナス思考を読まれるのは複雑だ。

「ふつ、一応なぜめんどくさいか聞いてもよいか？ 我はかまわんのだが、私の側近たち……というよりサテレスが納得できないようなのでな」

王様の言葉通りサテレスは俺のことをこれでもかと睨みつけている。いや、本当に恐ろしい形相でにらんでいる。きれいな顔立ちでよくそんな顔が出来るなあ……

「い、いえ…… 本当に大した理由はありませんよ？ 正直戦争なんて全然現実味がないし、そんな所で役に立てるとは思いません。それに……」
「それに？」

護が「探すな」と言っていた……と言っても良いのだろうか。護が接触もせず、間接的に俺に伝えてきたことだ、何か重要な意味でも…… まあ俺の頭じゃ思いつかないが、とにかく何かあるのだろう。言わない方がいいのかもしれない。

「いえ、まあ…… 護のやつは結構強いですから、あいつだけでもなんとかなるでしょうし」

もちろん心配ではあるが……

「貴様っ！ そんな理由で陛下のお言葉を……」

「よいよ、サテレス。ユーイチ、楽しいひと時であった。もう下がってよいぞ」

「しかし陛下っ！ 勇者といい、この者といい無礼にもほどがあります……」

「この者たちは別の世界から来たのだ、多少常識が異なっているも

仕方あるまい」

王様とサテレスの間で少しばかり意見の食い違いが起こっている。だが、立场上王様の方が優勢だ。

「えっと……結局、俺は帰って良いのでしょうか…」

「おお、すまなんだな。カール、街まで送ってやれ」

「はっ！」

その場に同席していたカールさんと一緒に、王室を出る。出る時も王様とサテレスが言い争っている姿が目についていた。

「しかし、ユーイチ様が異世界からいらしていたのは驚きでした！」

城からの帰り道、フランが目を輝かせながら俺を見つめている。

『異世界……ね、俺も長いこと生きてきたが、そんな所から来たやつを見たのは初めてだ』

「そ、それでそれで、異世界ってどんなところなんですか！？ 見たこともない生き物とか、魔法とかがあるんですか？」

フランのさらに増した目の輝きがまぶしい。どんだけ食いつくんだ……

「いや、俺の世界に魔法なんて物は無かったよ。生き物も、こつちの世界のが小さくなった感じだし……ああ、魔物とか災害級みたいな化け物はさすがにいないか、それとフランみたいな猫耳もいなかった」

「魔法がないんですか？ でもそれだと色々と不便じゃないですか？」

「ん、魔法の代わりに科学ってのが発達しててな、はつきり言つてこの世界よりもはるかに便利な世界なんだよ。空を飛ぶ乗り物とか、遠くにあつという間に届くメール……いや、手紙なんかもある」

言っちゃなんだが、元の世界に比べ、今の世界は圧倒的に文明が劣っている。そんなところになんだかんだで順応出来ている俺はなかなかにすごいのもかもしれないなあ。

「は、よくわからないけどすごい所なんですねぇ……それに獣人^{ビストロ}族^{イド}がいないならやっぱり差別もないんでしょうか」

「いや、人種差別ってのはある所にはあるらしいぜ？ 俺は見たこと無いけど……それにすごいつつても、ここよりもつと面倒くさい所だ……学校に行かなきゃなんねえし、ジジイの訓練につき合わされるし……」

ジジイの訓練なんてこちらの世界ならいざ知らず、向こうの世界じゃ何の意味もなかったしな。

そうこう話しているうちに食堂に着いた。

「ここでもよかったんだよね？ それじゃあ俺はこれで……」

「あつ、カールさん。その前に聞きたいことがあるんですけど……」

食堂に着き、役目を終え帰ろうとするカールさん呼び止める。

「ん？ なんだ？」

「あの、サテレス……さん？ がやけに俺のことを睨んでいたんですけど……俺、なんかしました？ 確かに王様の誘いは断りましたけど、王様も笑って許してくれましたし」

サテレスの態度ははつきり言って気持ちのよいものではなかった。怒っているというより侮蔑しているといった表情だったからな。

「んー、ああ……そうだな。サテレス様は^{Royalist}王党派の筆頭だからあんな反応したんだろうなあ」

「^{Royalist}王党派？」

「今現在、城には王族を絶対的な権力者として据え、王国の者だけで戦うことを良しとする^{Royalist}王党派。陛下の下に着きながら、あらゆる^{Odonterrism}手を使って国を護ろうとする騎士派が存在するんだがな、その中でもサテレス様は狂信的な^{Royalist}王党派だから勇者やユーイチが疎ましいんだよ」

派閥争いってやつか、どこにでもあるんだなあ……日本の政治でも同じような感じだったし。

「でも^{Royalist}王党派ってやつは王様絶対主義みたいなもんなんでしょう？」

だったら王様がいつて言ってるんだったら、それに従うんじゃないですか？」

王様は大爆笑で俺の行為を許してくれたし。

「いや、王党派はあくまで王族に対して忠誠を誓っているものであって、現国王自体にはそれほど忠誠心は無いんだよ。なにせ、陛下は根っからの騎士派だからな………」と、長話がすぎたな、とにかく王党派ってのは過激な奴らもいるから、あまり関わり合いにならないことだな」

そう言つてカールさんは去つて行つた。
Royalist
王党派ねえ、まためんどくさそうなのが出てきやがったなあ……

時は過ぎて深夜。

色々あったことを思い返ししながら、俺の部屋の隅にある小椅子に座っている。

「面倒くさいなあ……」

異世界に来てから十日足らず、色々なことが起き過ぎた。牛に追いかけられるわ、災害に殺されかけるわ、あげく王国の政治がどうのこうの。これ以上俺の頭を使わせないでほしいものだ。ただでさえ容量が少ないんだから。

結局、無い頭で考えてもしょうがないし、何か思いついても現状が解決するわけでもないのだから考えることはやめることにした。そもそも今のところ、俺の華麗なスルースキルで被害自体は受けていないいくらなんでもこれ以上面倒事には巻き込まれないだろう。

ドゴオオオン!!

……………うん。俺が浅はかだったのかもしれないな。

何が起こったのか説明すると、部屋のドアが蹴破られ、黒マントを被った男？たちが部屋に突入した来たのだ。それも、有無を言わず俺が寝ているはずのベットに剣が突き立てられていく。

結果、ベットは突き立てられた剣によって針山のような状態になった。

「おいおいおいおい!!」

目の前の状態を見て俺は驚愕した。俺が眠っている状態だったら確実に死んでるぞこの状況!!

「何っ!? 気づかれていたのか!?!」

「くっ! さすがに災害級を殺っただけのことは……っ!」

男? たちも驚愕の声をあげる。どうやら俺が、襲撃に気づいていたと思っっているようだ。

そんな男たちに俺はこう答えた。

「買いかぶりです!……!」

第三十話 襲撃者

ガツシャアアン!!

俺は勢いよく飛び出した。

どこから？

……窓から。

襲ってきた黒づくめの襲撃者たち。ベツトに突き立てた剣を引き抜き、直接俺を切りつけてきた。

とっさに机に立てかけていたテネブラエを持ち防御したのち、囲まれないために窓を突き破って道路に飛び出したのだ。

「そんで？ あんたら俺に何の用だ。泥棒とか強盗とか……じゃ、ないよな」

襲撃者からある程度の距離を保ち、剣を構える。それと同時に、二階の俺の部屋から次々と襲撃者が飛び降りてきた。その数、6人。

「貴様に答える必要は無い。陛下を愚弄し、我が国に仇なす者、死すべし！」

「ああなるほど、あんたら王党派^{Royalist}ってやつだな？ ひょっとしてサテレスの差し金か？」

「ぎくつ」

ぎくつ、って……あからさますぎるだろう。どんだけ分かりやすい

んだ……

「凶星かよ」

「い、今から死ぬ貴様には関係のないことだ！　死ぬ！」

思わずとんでもないことを口走ってしまった襲撃者は、ごまかすようにナイフを俺に投げつけた。

だが、正直投げ方がお粗末なものだったため、

「ほっ」

指で受け止めるという、マンガでしかないような行為が出来てしまった。

「なっ」

自分の放った短剣が難なく受け止められたことに、襲撃者は口をあんぐりとあけて驚いていた。

「で、まだやるの？」

ナイフを指でもてあそびながら襲撃者に尋ねる。が、

「あいたっ！」

調子に乗って指を切ってしまった。慣れないことはするべきではないな……

『なにやってるんだよお前は』

「ちよっとカッコつけてみたいお年頃ってやつだ」

『なんだそりゃ……』

呆れるテネブラエ。だって余裕がある男ってカッコいいじゃないか！

「……っ！ 馬鹿な奴め、雄々しく茂る毒針は万丈を仇なすものとなる！」
Punctum est siccum offacivetus vigor
Bush

俺が怪我をしたのを見て、襲撃者が何か呪文を唱える。すると、切れた指がやけどをしたかのように熱くなった。

「熱っ！？」

見て見ると、傷口が緑色にくすんでいる。しかも徐々に腕に広がっていった。

『これはっ！？ ユーイチ！ すぐに俺を傷口に当てろ！！』

テネブラエの声が緊迫していたため、言われるがまま傷口に剣を当てる。すると、広がっていた緑色の部分が消えていった。それと同時にテネブラエが緑色に変化し、何やら毒々しい紋章が浮かび上がった。

「おおっ！？ なんだこれ？」

『やっぱり、毒魔法だったらしいな』

なるほど、短剣に魔法でも施してあったのだろっ。だからこそテネブラエで吸収できたのだ。

「クソッ！！ 何をしている！ こいつを殺せ！！」

目の前にいた襲撃者が他のものに指示をする。暗殺に来たことを忘れて言うように大声を上げている。なんか……馬鹿だなあこいつら。しかも、馬鹿なだけではなくこいつらは実力的に俺に劣っている。先ほど受け止めたナイフから分かるように、こいつらはそれほど強くない。正直、先日襲ってきた盗賊の方がよっぽど強かった。なんでこんな奴らをよこしたんだ？

襲撃者たちは実力の差も分らないのか、人数の利を生かさず、一人ずつ俺に向かってきた。

テネブラエを鞘に戻し、鞘で相手の剣を受け流す。そしてそのまま、襲撃者の一人を剣で殴りつける。一人目。

剣を腰ために突進してくる襲撃者、体を少し横にずらし顔面に掌底を打ちこむ。二人目。

短めの斧を俺に振り下ろしてきた。正面からテネブラエで受け止める。押し潰そうと襲撃者が踏ん張った瞬間に剣を横にずらし、バランスを崩させ、脇腹に回し蹴り。三人目。

次々と倒されていく者たちを前に、ナイフを投げてきたやつが苛立っている。

「ええいクソ！！
e MEACORUSCAMEN
宝の業火！！」

どけ役立たずども！！

I n n v a l i d i e s t u m p t u o o a
ゆらゆらと揺らめく至

一人の呪文に、俺の周りにたむろっていた襲撃者たちが慌てて距離を取る。それと同時に、巨大な火炎が俺を包み込んだ。

襲撃者たちが喜びの声をあげる。

「はっはあっ！！ イグニスバイソンとほぼ同質の火炎だ！ 跡形も残ら……」

襲撃者の自慢は途中で途切れた。この魔法はこいつの最大級の魔法だったのだろう。だが、襲撃者には運の悪いことにこちらにはテネブラエがあった。

つまり、消し炭になっているはずの俺が炎を切り裂き、立っているのを見たのだ。

先ほどまで緑色だった刀身は、依然と同じように赤く、炎の紋章のようなものが浮かびあがっていた。

「それで、まだやるのか？」

正直、これで実力の差が分からないなら俺以上の馬鹿だと認定することしよう。

「くっ！」

迷いながらも、俺に向かってくるのを選んだのか、じりじりと距離を詰め始めた。これはいいよだな……

「そんじゃま、返すぜっ！」

これが最後通牒。襲撃者に向けテネブラエを振ると、刀身から先ほどの火炎とは比べ物にならないほどの炎が飛び出した。

もちろん威嚇のつもりなので当ててこそいないが……やばいな、予想以上に炎がでかい。火事になんきゃいいが。

「うるさー！いつ！！！何時だと思ってるんだい！？」

言い訳もつかないほど大きな音を出してしまったためか、食堂から寝巻姿のアズラさんが怒鳴り散らしてきた。気づけば周りの家にも照明が灯り始めている。

「こんな時間に何を……うわっ！なんだいこの有様は！？」

その場の惨状を見て驚きの声をあげるアズラさん。家には火はついていなかったが、道路が一面黒こげになってしまっていた。しかもいつの間にか襲撃者たちの姿は無くなっており、広い道路に俺一人という図だ。

「あ、いや……これはですね……」

別に俺の責任ではないのだろうが、なぜか及び腰になってしまう。

「坊や………外を片づけてから部屋に戻りな」

そう言っただけで食堂の中へ戻っていくアズラさん。

俺の周りには黒こげになった道路と、バラバラに砕け散った窓枠やガラスが飛び散っていた。

……………朝までに終わるかなあ、これ（泣）

第三十一話 デットオアライブ

一夜明け、翌日。俺は目の下にクマをこしらえ、フラフラになりながらギルドに向かっていた。

結局、片付けが明け方近くまでかかってしまったうえ、いざ眠ろうと自分の部屋に帰ると穴だらけのベットでフランが丸まって眠っていた。

俺が片付けをしている最中にいつも通り潜り込んできたのだろう。当然そんなベットで眠れるはずもなく、今に至る。

俺は襲撃者に襲われたことを警察に届けようと思っていたのだが、アズラさんに聞いた限り、この国には公式な警察機関というものは無く、基本的に城の兵士に起こったことを伝えるらしい。だが、今回の場合襲ってきたのが城の人間だったため、どうしようもなく、泣き寝入りをするしかないと言われた。そして、なぜかギルドに行くように勧められたのだ。

「でも、実際どうすりゃいいんだ？ 昨日は運よく起きてたから良かったけど……俺は気配を察知して襲撃に気づくなんて芸当はできねえしなあ……」

『だからこそそのギルドだろう？ 護衛依頼を出して、ユーイチが眠っている間だけでも護ってもらえばいい……まあ、冒険者が護衛依頼を出すなんて普通はしないがな』

そうか、護衛をつけりゃ解決する問題だったのか……金にもかなり

余裕があるし、なかなかいい案かもしれないな。

「……………しかし、やけに街の人たちから見られている気がするんだが……………気のせいかな？」

そう、道を歩いていて、なぜか行きかう人々が俺を凝視してくるのだ。特に屈強な冒険者らしき人たちに見つめられている気がする。

……………俺にそっちの気は無いぞ！

『あゝ、あれじゃねえか？ ユーイチが災害級をぶっ倒したつてのが広がったとかだろ。本気ですごいことだからな、噂が広まってもおかしくない』

「えっ？ つまり今の俺って有名人？ やばいな、緊張してきた……」

見られていると分かれると、人間色々なことを意識しだすものだ。服を整えたり、髪形を逐一チェックしたりと……………もちろん俺も例外じゃない。歩きながら、朝食の残りがすが顔についていないかチェックをし始める。

『自意識過剰ってやつだな。敬われるつてのよりも、恐ろしがられるつて方が正しいと思うぞ？ 災害級をぶっ倒すなんて人間業じゃねえからな』

テネブラエの言うように、恐らく俺は街の人間に恐れられている。なぜなら、俺が目を合わせると、なぜか視線をそらし、逃げていく人間が大半だったからだ。……………夢くらい見させてほしいものだ。

と、そんなこんなでギルドに到着。

ギルド内は、いつもよりも冒険者であふれかえっていた。この時間帯は人が少ないはずなのだが……

「やけに人が多いなあ」

『何かいい任務の依頼でも来たんじゃないかねえか？ 掲示板の近くがごった返してるし』

確かに、掲示板付近がむさい男たちでひしめき合っている。遠目に掲示板を見て見るのだが、男たちが集まっている場所の依頼書は見えてとれなかった。しかし、端っこにあった依頼書が目に入る。

「あれっ？ 討伐任務が復活してる。あれってこないだは受けられなかったよな？」

宝石泥棒の依頼を受けた時は、当分無理そうだとアルテナが言っていたような……

「んー、恐らくだが……魔物が減っていたのはグーラのせいじゃないのか？ 食われて数が減ったり、隠れて見つけられなかったりで任務がダメだったんだろう。それで、グーラが消えて、数が元に戻ったとか……」

なるほど。説得力がある。なにせ、冒険者をバリバリと食い散らかすやつだ。生態系を乱すことぐらい訳は無いだろう。

「つと、今日は任務を受けに来たんじゃなかったな」

今日は依頼をしにギルドまで来たのだった。依頼だと、アルテナに頼めばいいんだっけ？

「おつす。久しぶり、アルテナ」

元気よく挨拶をする。そういえばアルテナと会ったのは四日ぶりだったな。

「え、……………あつ!! ユーイ……………チさん……………」

ん? なんか歯切れの悪い返しだなあ……………風邪か?

俺のあいさつに、なぜか縮こまり、落ち着かない様子であたりをキョロキョロと見渡すアルテナ。

そのしぐさを首をかしげて見ていると、後ろの方から冒険者の話声が聞こえてきた。

「おい……………あいつって……………」

「もしかして例の……………」

「こないだの森の件か……………っ!」

端々しか聞き取れなかったが、多分俺が災害級を倒したことが冒険者の内でも広まっているのだろう。はいはい、化け物じみててサ―セン。

「んで、アルテナ。今日は依頼を……………」

ガシッ!

アルテナに護衛任務の依頼を頼もうと思った矢先、誰かが俺の方を力よく掴んだ。

「ん？」

見て見ると、俺よりも一回りでかい男……あゝ、こいつってこないだからんできたチンピラじゃねえか。性懲りもなく……

「なんだ？ またブツ飛ばされ……っ！」

「これ、お前だろう？」

俺の言葉を遮るように、チンピラが一枚の紙を向けてきた。
いや、近すぎてよく見え……ん？

「ちよつと貸せ！」

チンピラから紙をひったくり、よく見てみると、その紙は依頼書だった。それも書いてあったのは、

手配書

対象・ユーイチ＝サヤマ

特徴・黒い髪に黒の瞳、全身黒の装備

報酬・白金貨3枚

容疑・アガルの森での冒険者二十六名の殺害疑惑
生死を問わず

「はあっ!？」

冒険者の殺害疑惑？ 災害級が出たんだぞ？ どう考えてもそれに襲われたに決まっているだろう！ なんて俺が……

「まさかお前がこんな極悪人だったとはなあ……野郎ども！　ぶっ殺せ！！」

チンピラの怒号に、ギルド内にいたすべての冒険者が一斉に襲いかかってきた。

「えええええっ！！？」

身に覚えがございません！！！！

第三十二話 計画

「だーーーー！！　ちよつと無理無理無理！！」

俺に向かつてくる群衆の上を飛び越えながら叫ぶ。

「絶対なんかの間違いだつて！　話せば分か……ぬおっ！！」

俺の言葉に耳も貸さず、冒険者たちは俺に剣を振るい、槍を突き立て、さらには魔法で攻撃してくる。なんとかかわし続けたものの、終いにはギルドの端に追い詰められてしまう。

「ぜえっ……ぜえっ……と、とつとと捕まりやがれ……」

「この人数相手に逃げられると思つてんのか！？」

冒険者たちが、各々の言葉で降伏を進めてくる。確かに今、俺は窮地に立たされている。ギルドの出口ははるか彼方だし、周りには殺気立つた冒険者が敷き詰められている。正直逃げ場が無い。

「そもそも、なんで俺が冒険者を殺さないといけないんだよ！　あんたらも聞いているだろ！　災害級が出たってこと！　そいつにみんな喰われちまつたんだよ！！」

「はあ！？　災害級がこのあたりに出たなんて話、聞いてねえぞ！　？　命乞いならもう少しましな嘘つきやがれ！」

その言葉に俺は耳を疑った。

「ああ！？　嘘じゃねえよ！　あんなのが出てなんで……………」

……………いや、今思い返してみると、グーラを実際に見た者は実はそれほどいない。俺と、フランとエリスだけだ。

確か、カールさんたちもグーラの死体は見ていたはずだが、冒険者がグーラに喰われたシーンを見たわけではないのだ。

「これって、もしかして……………」

『多分、王党派の情報操作だな…………グーラが出てきたこと自体が無かったことにされてる』

昨日、俺の暗殺に失敗したから違う手で攻めてきたのだろう。まったく、面倒くさいことをしやがる。

「つべこべ言ってんじゃねえぞ！！」

冒険者たちが怒鳴る。冒険者側が圧倒的有利であるが、ことごとく攻撃をかわされたため、俺の実力が分かったのか、慎重に少しずつ俺との間合いを詰めてくる。

「王党派がどうのって言う前にこのままじゃ捕まっちゃうぞ」
Royalist

見たところ、冒険者の中に飛びぬけて強いやつは見受けられない。だが、それでも数が半端じゃない。六、七十人といった男たちが俺を取り囲んでいるのだ。グーラを倒す時に使った空間術を使えば、なんとか脱出は出来るかもしれない。だが、それでは確実に死人が出てしまう。正直、騙されて俺を襲ってきているやつを殺すなんて後味が悪い。そもそも人殺しなんて御免だ。

『……………ユーイチ、空間術を覚えた時、俺がなんて言っただか覚えて
いるか?』

「ああ? こんな時に何言って……………」

……………いや、覚えている。

確か……………『ある程度の距離なら空間を通過って転移も可能だ』……………

転移か!!

「^{I t e r}
開け!!」

テネブラエの言葉を思い出した俺は、自分の足元にある影を使って
空間術を発動させた。

影がドーム状の煙に変わり、俺は吸い込まれるようにその中に落ちて
行った。

「あだつ!」

煙に吸い込まれたと思った矢先、すぐに地面が現れ、華麗に尻から
着地することになった。

尻をさすりながらあたりを見てみると、あたりは真っ黒な空間が広がっているだけだった。ただ、暗いというわけではなく、自分の体ははっきりと視認できたし、あたりにはちらほらと白い光が漂っていた。

「なんだ？　ここ……」

『空間術の内部だな。ユーイチ、ちょっと辺りを歩いてみる』

テネブラエの指示通りに数歩歩くと、すぐに見えない壁のようなものにぶつかった。さらにそれを何回か繰り返させられた結果、空間の大体の広さが分かってきた。

『ふむ、大体食堂の部屋と同じ大きさって所だな。ユーイチ、空間術を教えた時に部屋を思い浮かべただろ』

「え？　ああ、確かにそうだったような……」

『その思い浮かべた空間が、今のこの場所になったって訳だ』

なるほどねえ、そうと分かっていたらもっと大きな部屋を想像したのになあ……ってあれ？

「でもグーラの半分をここに送ったんだよな？　だったら死体がここにあるはずじゃないのか？」

その光景を思い浮かべ、思わず吐き気を催した。そんなものがここにあれば、確実にスプラッタな状況になっていただろう。

『いや、空間認識のズレによって削り取られた部分はことは別の場所に送られるらしい』

「それはまた……何とも都合のいいことで……」

『そ、そういうふうに出来てるんだからしょうがないだろ……さあ、

そろそろギルドを脱出するぞ」

話を途中で打ち切り、また空間術の説明をし始めるテネブラエ。さてはこいつ、よくわかってねえな？

『え〜と、入ってきたのが上の光だったから……あつ、目の前のやつだな。ユーイチ、飛び込め』

「……って、この光にか？」

『そうだ。それでこの空間から出られる。』

出られるって……ここから出れば結局捕まるんじゃないかと、少し疑いながら光に顔を突っ込んでみる。

顔が出た先はギルドの内部ではなく、日の光が当たらないギルド横の小道だった。

空間から脱出し、大通りに出ようとしたのだが、大通りの騒ぎに思わず身を隠した。

「おい！ そつちはいたか！？」

「いや、いなかった！ くそっ！！ 一体どんな魔法使いやがったんだ！！」

冒険者たちが俺を搜索している。どうやら、俺が何らかの魔法を使って脱出したと思っているようだ。

「ちつ……表からは無理だな……裏通りから逃げるぞ」

『逃げるったってどこへ向かうつもりだ？ この分だと街全体にユ
ーイチの顔が知られるのにそう時間はかからないぞ？』

「とりあえずは食堂に向かおう。アズラさんとフランなら、理由も
聞かずに即通報なんてことも無いだろうし」

と言うより、この二人に見捨てられたら本気で行くところが無くな
る。それに、この後どうするにしても、この二人には会っておきた
いしな。

裏通りを迂回に迂回を重ね、ようやく食堂に辿り着いた。距離的に
はそれほど無かったはずだが、それでも何時間もかかってしまい、
すでに昼過ぎにまで日が昇っていた。

「まさか坊やがこんな極悪人だったとはねえ……がっかりしたよ」

アズラさんからの第一声がこれだった。

……全然信じてもらえてねえ！！

「いやっ！ あれは濡れ衣で……！」

「アズラさん！ 冗談はやめて下さい！ 大丈夫ですユーイチ様。アズラさんは信じてくれています。私もその場にいたんですからユーイチ様の潔白は証明できます！」

こんな時に冗談は本気でやめてもらいたい。心臓に悪いし、本気で絶望しかけたつての！！

だが、そんな俺をからかうようにケラケラとアズラさんが笑っている。……ひどい……

「ゴメンゴメン……つい、からかってみたくなっちゃった。いい反応するねえ坊や」

「いや、本つつ当にやめて下さい。笑い事じゃないですから……」

「ああ、悪かったよ。だけど坊や、これからどうする気だい？ 身の潔白を証明するとか、しばらく身を隠すとか……なにか考えはあるのかい？」

身の振り方か……正直今は何も思いついていない。とにかく食堂に逃げ込んでから考えようと思っていたからだ。

「その顔だと何も考えていないようだね……まあ、それなら話は早い。ユーイチ、ひとつ提案があるんだけど……」

「なんですか？」

「ここから出て行かないか？」

アズラさんの顔は先ほどまでとは変わり、真剣な顔つきになってい

た。

……「冗談じゃないのかよ!!」

番外編 サテレスと…

「なんだとっ！？ 暗殺に失敗した！？」

モントウ王国王城。その執務室でサテレスが、数人の男たちに怒鳴り声を上げている。

「し、しかし宰相閣下っ！ やはり私どもの戦力では災害級を打倒すような者を討つことなど……」

「馬鹿ものっ！！ それが栄誉ある王国騎士の台詞か！！」

言い訳とも取れる部下の言葉にさらに怒りを表すサテレス。その言葉に襲撃者たちは一様に口を噤んでしまった。

「そもそも！ 私が言ったように初めから毒を盛ればよかったのだ！！ それなのになぜ貴様は直接手を下せと言った！！」

サテレスの視線が部下たちから部屋の隅にいた男へと移る。

男はフードをかぶっており、その顔はよく見えない。ただ唯一特徴があるとすれば、男の身長とほぼ同じ程度の大剣を背中に背負っていることだ。

「先ほど、あなたが言った栄誉ある王国騎士とやらが、毒殺などという卑怯なやり方をしてもよいのか？」

「ムッ………」

男の言葉に、言葉を詰まらせるサテレス。

「だ、だがしかし、あやつを殺せと言ったのは貴様ではないか？」
「私は殺せとは言っていない。『襲え』と言っただけだ。そもそも殺すことが目的ではないし、この者たちにそんなことができると思っていない」

男の言葉にカチンときたのか、襲撃者たちが次々に抗議の声をあげる。先ほど自分たちの実力不足を告白した者たちだが、男の言葉にさすがにプライドが傷つけられたようだ。

「殺すことが目的ではない！？　どういうことだそれは！！　勇者の時といい、貴様は一体何がしたいのだ！？」

男の言葉に納得がいかないといった表情で男に喰いかかるサテレス。襲撃者たちも一様に険しい表情をしている。自分たちの仕事に意味が無かったと言われているようなものなのだ。当然だろう。

「すべては君たちの誉れあるモントウ王国のためだ。計画が進めば、おのずと結果は見えてくるだろう」

男の自信に満ち溢れた言葉に一同は唾を飲み込んだ。一同の不満や疑念などを吹き飛ばすほどの自信と確信が、フードからのぞかせる男の笑みから読み取れたのだ。

「ふ、ふんっ……我らが王国の永久の繁栄を実現させるためとはいえ、貴様のような平民に頼ることになるとはな」

「そのことに関しては気にすることは無い。私は私の目的のために動いているにすぎないからな。あなたたちの『王国の人間以外の力は借りない』というものには当てはまらないさ」

襲撃者たちが互いに顔を向け合い、笑顔をこぼす。自分たちの手によって王国が繁栄するのだ、という喜びからだろ。

「ふ、ふはははっ！ 当然だ。王国の繁栄は王国の人間によって成し遂げられる。貴様の力では決してない」

男の言葉に気を良くしたのか、サテレスが高らかに笑っている。先ほどの言葉とは逆のことを言っていることに気づいていないようだ。

「……話は戻るが、ユーイチ〓サヤマの今後について伝える」

脱線しかけていた話の流れを男が元に戻す。

「ユーイチ〓サヤマには手配書を出しておけ。罪状はそうだな……災害級によって殺された者たちがユーイチ〓サヤマによって殺されたことにすればいい。災害級が出たことは民にはまだ知らせていないのだから？」

「ああ。民に無用な混乱を招くだけだからな。だが、なぜそのような廻りくどいことをするのだ？ これも『計画』とやらに必要なものなのか？」

サテレスが疑問の声を投げかける。『計画』がどういうものかサテレスは知らないが、襲ったあとに手配書を出す意味が分からないのだろう。初めから手配書を出せば、襲う必要は無かったはずだ。

「まず、ユーイチ〓サヤマをこの街から出す必要がある。最初に襲わせたのは、街に居れば常に身の危険にさらされるということ。ユーイチ〓サヤマに知らせるためだ」

「だが、あの者が逆上して城を襲ったらどうする？ 先ほどの部下ではないが、今城には迎え撃つほどの戦力は無いぞ？」

「その時はまた別の作戦がある。あなたが心配することではない」
「む、そうか？……………おい！　すぐにユーイチ〓サヤマの手配書を作成し、明日までにギルドに提出しておけ」

心配していたことが男の説明によって解消されたのか、サテレスはえらそうに部下に命令する。

男がほくそ笑んでいることも知らず……………

「さて、ここでの目的は達せられた。ここらで私は街を去ることにしよう」

襲撃者やサテレスが手配書作成に忙しそうにしている中、男は突如口を開いた。

「何？　もう出ていくのか？　次はどこに向かうのだ？」

「……………東だ」

第三十三話 王都脱出

「それじゃあ作戦の説明をするよ」

俺、アズラさん、そしてフランは今、食堂の厨房に集まっている。表だとバレる可能性があるからというアズラさんの配慮だ。

「作戦って俺を追い出すやつでしょ？ それなら俺がいらない所でやった方が……」

「ち、違います。確かにユーイチ様を街の外まで出す作戦ですが、アズラさんもやりたくてやるわけではありません！」

慌ててアズラさんを擁護するフラン。もちろん俺の方も冗談のつもりで言ったため、本気でアズラさんが俺を追い出そうと思っていないことは分かっている。まあ、俺が言った通り、出ていくことには変わりないのだからあながち間違いということはないのだが……

「痴話げんかはそれくらいにしときな。……ぼうや、作戦についてだが、さっきも言った通り坊やにはこの街、出来ればこの国から出て行ってもらう」

「出ていくことは別に良いですけど、他にも方法はあるんじゃないですか？ 例えば、首謀者をブツ飛ばすとか。そろそろ俺もキレてもいい頃合いですし……」

異世界に飛ばされ、城から追い出され、功績をあげたら国のために戦ってくれと言われ、にもかかわらず暗殺をされかける。拳句の果てには、人を大量殺人犯呼ばわりだ。普通の人間ならば、二、三度

はキレてもいいはずだ。

もちろん、俺もすでにキレても良い段階にいるのだが、こうも立て続けに災難に会ってしまつと、頭の回転が追いついてこない。

結局誰を怨めばいいのだろうか。神様？ 王女様？ サテレス？ それとも自分自身の運の無さ？

……正直ついでに行けません！！

「そんなことをしたら坊やはこの国自体に追われることになるよ？
まあ、今でも似たようなものだけど……同情もしてもらえなくなるかもしれない」

確かに、万引きの冤罪にあつた奴が腹いせに店のものを盗んだりしたら、それこそ本末転倒だからな。

「とにかく朝方に色々と手をまわしておいたから、夜になったらイスカの坊やの店に向かいな。そこでまた指示を出してもらいな」

「はいっ！！」

………はい？

今返事をしたのは俺じゃない。もちろんアズラさんでもなく、隣にいたフランだった。

「いやいや、なんでフランが返事するんだよ。出て行くのは俺一人だろ？」

「何を言っているんですか？ 私もユーイチ様について行くに決まっているじゃないですか」

フランは頭の悪い人間を見る時の目で俺を見つめている。俺の頭が

悪いのは事実なので否定はしないが……なんでフランがついて来るのが決定事項のようになってるのだろう。

「無理だつて！ 俺は狙われてるからこの街を離れるんだぞ？ 危な「ダメです」……」

フランは俺の目をまっすぐにとらえて言う。その目には、無言の圧力のようなものがある。

「だから、俺と一緒にいた「ダメです」……」

「だ「ダメ」……」

だ、だめだこいつはやくなんとかしないと……

「連れてつておやりよ。ここまで尽くしてくれる女の子を置いてくなんて、男として失格だよ？」

それに、坊や一人じゃ隣町に辿り着けるかも怪しいしねえ……」

「そうですよ。ユーイチ様はこの世界のこと、何も知らないんですよ？ なら、私が道中色々と教えて差し上げます」

フランは残念の一言に尽きてしまう胸を張り上げ言った。

しかも、フランに加え、アズラさんまでも俺に圧力をかけてくる。っていうか、フランってこんな性格だったっけ！？

「……分かりました。分かりましたよ……ハア、連れて行きます。フラン、危険な目に会わせるかもしれないけどついて来てくれるか？」

「はいつ!!」

フランが満面の笑みを俺に向ける。
なんだこの子！抱きしめたいんですけど!!

まあ、正直断れる雰囲気でもなかったしなあ。というか断るという
選択肢が無いって感じ？

選択肢

フランを連れていく↑

フランを連れていく

フランを連れていく

……………オイツ！バグってんぞこのゲーム!!

時は過ぎて夜

身支度を済ませ、食堂を出る時間だ。

「アズラさん。短い間でしたが、本当にありがとうございました！」

俺はいつの間にか九十度の最敬礼をアズラさんにしていた。
元の世界でもしたことはなかったため、自分でも驚きだ。正直、こ

の世界に来てから十日も経っていない。にもかかわらず、アズラさんにはお世話になりまくった。

この世界の基本的なことを教えてもらったり、フランを救うためのアドバイスをしてくれたり、今は脱出の手助けさえやってくれている。いくら感謝をしてもしたりない。なんだか目頭が熱くなってくる。

「あ、うん。気をつけていくんだよ」

……………あれ？軽っ！？ 俺の涙の意味は！？

俺の最敬礼を華麗にスルーし、アズラさんはフランをそのふくよかな懷で抱きしめた。

「遠くに行っても体に気をつけるんだよ？ あと、坊やのこと頼んだよ。危なっかしい子だからねえ」

アズラさんが優しく語りかける。するとフランはこらえていた気持ちを晴らすかのように、声を殺しながらアズラさんの懷で泣き出した。

「あ、アズラ……………さんも……………お、お元氣……………で……………」

思えば、俺がこの人たちに出会う前から顔見知りだったんだよなあ。それなりに長い付き合いだったんだろう。二人を見ていると、挨拶も出来ないまま別れてしまったジジイの顔がよみがえるようだ。

そして、俺とフランは良い思い出しかないアズラさんと食堂に、静

これは俺ではなく、フランの叫びだった。
まあ、驚くよな。この光景は。

手を品物から引き抜くと、案の定それはイスカのものだった。
なんで埋もれるんだこいつは？

「す、すみません！　こんな大変な時に……」

ヒビの入った眼鏡をかけ直し、ペコペコと頭を下げるイスカ。

「いや、それは良いけど……なんでお前は会うたびに埋まってるんだ？」

「あ、それはですね………これを探していたんです」

イスカが差し出したのは何やらしなびれた葉っぱのようなものだった。

「なんだ？　これ……」

見分けはよくつかないが、フランが集めていたポータル草というものとは違うようだ。

「これは『竜人^{ドラムロイド}族の秘薬』に使われると言われる『ボンド草』というものです。このくらいしか役に立ちそうなものはありませんが、日持ちする食料と一緒に袋に入れておきますね」

そう言って、あらかじめ準備していたと思われる袋にボンド草を詰め込み、俺に手渡した。

「これ、俺にくれるのか？ 別にここまでしてくれなくても……」

恐らくイスカは、フランかアズラさんから俺のことを聞いたはずだ。だとすれば、ここまでしてもらう理由が見つからない。イスカは直接的には関係が無いのだ。

「ユーイチさんが手配された原因はよくわかりませんが、フランさんから聞いた限り、ユーイチさんはこの街の救世主じゃないですかだとすればユーイチさんは僕の命の恩人です。このくらいは当然でしょう」

……… まったく、お人よしだなあイスカは…

「分かった。それじゃあもらっておくわ。ありがとう、イスカ」

俺が、荷物を受け取るとイスカは満足したような笑みを浮かべた。思えばイスカには二、三度しか会っていないのだ。ここまでしてもらうのはやはり気が引ける。

「もしここに帰ってこれれば、珍しいものいっぱい持ってきてやるよ」

恐らく俺にはこれくらいしかできないだろう。もちろん、帰ってこれるかは不明であるが……

「はい。楽しみにしています………そろそろ頃合いですね。ユーイチさん、フランさん。この店の裏手からギルドまで向かってください。そこで姉が待っています」

アルテナが？ しかもギルドって……

「ギルドって手配書が回ってるんじゃないのか？ アルテナも正直……」

今朝ギルドに向かった時、アルテナは俺に対して気まずそうではあるが、疑いの目を向けていた。それに、責任のある立場の人間なのだから俺に加担するなんてことはあるのか？

「大丈夫です。姉もフランさんに訳を聞いていますから、味方になつてくれました。それに、この時間帯だとギルドには姉以外はいません」

「そ、そうか……よかった」

このまま思い違いをされたまま別れるのは俺としても嫌だったからな。誤解が解けているならうれしいことだ。

「では、そろそろ向かってください。また、機会があればお会いしましょう」

「ああ、色々世話になった……またサービスしてもらいに戻ってくるよ」

熱く握手を交わす俺たちだったが、俺の軽口に少々苦笑い気味のイヌ力だった。

ギルドまでの道のりは以外にも短かった。

夜中まで見回りをしている兵士や冒険者を避けるために裏通りを通
ると思っていたのだが、大通りを抜けるよりも早くギルド到着した。

「ユーイチさん！　こちらです！」

月と星のみの光で照らされる冒険者ギルド。

うつすらとアルテナの姿が見えた。

「アルテナ！　あんまり大きな声出したらダメだ！」

「ユーイチ様の声も大きいですが……」

アルテナに出会ったことで少し気が緩んだのか、少し声が大きくな
っていた。

アルテナも自分の声の大きさに気付いたのか、口元を押さえて顔を
赤くしている。

「す、すみません……すぐに案内しますのでついて来て下さい」

アルテナの後をついて行くと、ギルドの中ではなく横の細道に入っ
ていった。ここは、俺が冒険者たちから逃げ出す時に通った場所だ。

「アルテナ……今日のことだけど……」

恐る恐る今朝の出来事をアルテナに尋ねると、体をビクッと震わせ、
足を止めてしまった。

「あ、いや……別に気にして無いんだぜ？ アルテナは知らなかったけなんだから、気にすることなんて……」

「ち、違うんです！」

アルテナを擁護する言葉を羅列していると、急にアルテナが大声をあげた。

「わ、私は……ユーイチさんがギルドに来た時には、災害級が出現したことはもう知っていたんです」

「……ん？ それって今朝の段階でつてことだよな？」

「はい。兵士の方から話を聞いて、冒険者の方々が亡くなった原因も知っていました……けど、昨日の夜中にお城からの命令で……」

アルテナの声がだんだんと涙声になっていく。恐らく、知っていたにもかかわらず俺を擁護しなかったことを気に病んでいるのだろう。だけど……

「それはアルテナの立場からしたら当然だろ？ 別にアルテナの気にするようなことじゃないんじゃないか？」

「で、でも私は……」

これ以上話し合っても、押し問答になるだけだな。

そう判断した俺は、アルテナの頭に手を置いて会話を遮った。

「俺も全然気にしてないし。今は俺の味方なんだろ？ だったらそれで十分だよ。謝ってくれなくていい……てか、謝られても困るしな」

優しく頭をなでてやると、顔を赤くしながらもアルテナの表情が和

らいできた。

……不謹慎かもしれないが、これはフラグが立ったというやつじゃないか？

「むー……………えいつ！」

「痛い！？」

フラグが立ち、レベルアップのファンファーレが頭の中で響いていた時、急にフランが俺の足を踏みつけた。
頬を膨らませて俺を睨んでいるフラン。

……………何を怒っているんだ？……………なんてことは言わない！
俺は頭が悪いがラブコメマンガの主人公のように鈍感ではない！！
これは明確な恋愛フラグだ！ やはりフランの方にも立っていたか
！！

「はっはっは！ 嫉妬してくれてありがとうフラン！！」

「なっ……………ち、違います！！ もう……………早く行きますよ！！」

顔を真っ赤にしながらどんどん先に行ってしまう。
はっはっは、愛い奴め。

「おっ！ やつと来たか……………」

アルテナに案内された先は、俺も何度か通ったことがある北門だった。

そこにはカールさんとゴードンさんを含め、数人の兵士が松明を携えて待っていた。思わず身構えるが、周りの雰囲気気づいて警戒を解く。

「カールさんたちは味方なんですか？」

「おう！ 俺は実は騎士派Odonterrismでな、王党派Royalistの連中が仕組んだことなんざぶつ潰してやろうと思ったんだよ」

Royalist 王党派に對抗する騎士派Odonterrismか……確かに、味方になってくれそうだな。畏おそってことはなさそうだ。

「そうですか。ご迷惑をおかけしてすみませんでした」

「いやいや、お前さんが気にすることじゃねえさ。Royalist 王党派もひどいことしやがる……同じ王国の人間として恥はずかしいぜ………」
「っと、長話をしてる場合じゃねえな。アルテナさんから言われた通り、コウルク行きの馬車を手配しておいたぜ」

「コウルク？」

「この街から一番近い街です。ここから約十日ほどかかりますが、そこまで行けばまだ手配は回っていないはずです」

馬車で約十日って……交通機関が充実した日本に住んでいた俺としては気の遠くなるような距離だ。

だが、日本とこの世界を一緒にしてはいけないよな。そもそも馬車があるだけでもありがたい話だし。

「そんじゃ、そろそろ出てもらえるか？ Royalist 王党派の監視役が見回りにやつてくる頃だからな」

「はい、お世話になりました。カールさん、ゴードンさんもお元気で」

「今度ここに帰ってきたときには土産話を頼むぜ。ここの連中の酒の肴にでもさせてもらうからよ」

がつはつはと笑いながら背中を叩くカールさん。手加減をしていないのかせき込みそうになるレベルなのだが……

「ユーイチさん……………」

アルテナが顔を赤くしながら俺の手を握ってくる。
女の子に手を握られるのは、実は小学校以来なので俺も顔が熱くなってきた。

「お、お気をつけて！ あ……………もしまた帰ってくることがあれば……………」

顔を真っ赤にさせながらおずおずと言葉を口にするアルテナ。
やばい、放課後に体育館裏に告白に呼び出された気分だ……………まあ、そんなことは一度もされたことは無いのだが……………

「ユーイチ様！ 早く行きますよ！！」

アルテナの告白？が終わる前にフランによって強制的に馬車に押し込められた。

やばい、放課後に体育館裏にカツアゲされに呼び出された気分だ……………まあ、これは何度か経験があるのだが……………

ドタバタしてしまったが、ここでみんなとはお別れらしい。

もうすでに街との距離が開いてしまったが、俺はみんなに見えるように大きく手を振った。

街を出てからしばらく経つと、さっきまでいた街がどんどん小さくなっていた。

異世界に飛ばされてからまだ十日も経っていない。だが、良いことも悪いことも立て続けに起こった場所だ……まあ、ほとんどが悪いことだったのは最悪だったが……

「しかし、フランは本当に俺について来てよかったのか？ あのまアズラさんの店で働いていた方が……」

「ユーイチ様。私はユーイチ様に救われましたから、ユーイチ様の傍にいただけで……それだけでいいんです」

フランの顔は全く迷いもない、後悔もないすっきりした笑顔だった。その笑顔に俺も顔を笑顔にゆるめながらフランの頭をなでてやる。

うん。

嫌な思い出の方が多かったけど、フランたちに会えたのは本当に嬉しかった。

そうだな、街が見えているうちに言っておこうか……

「じゃあな……！グロリア……！」

「っ……！……っ……！」

ん？

なんか馬車の中から声が聞こえる。でもこの場にいるのは俺とフランだけだ。一応御者もいるが、馬車の外で、運転しているのでその人ではないだろう。あとは……………

「テネブラエ、お前か？」

『……………ん！？ ああ、起きてる起きてる……………すかー』

こいつ……………剣のくせに寝ぼけてやがる。そういえば前にも寝てるとか何とか言ってたな……………ともかく、こいつの声だったのか……………

ーっ！……………っ！……………！

あれ？

やっぱり声がするなあ……………荷物？からか……………

声はテネブラエの寝言ではなく、馬車に積んであった荷物の中から聞こえているものだった。

いやいや、そんなところに人がいるはずが……………

「ぶはあっ！！ し、死ぬかと思ったあ……………！」

荷物を開けると、緑色のおさげ髪のローブ姿の女の子が飛び出してきた。

「エリス!？」

第三十三話 王都脱出（後書き）

どうも、作者の廉志です。

第三十三話が異常に長くなってしまい、文章が単調な読みづらいものになってしまいました。反省です。

さて、実はこの話でようやく第一章が終わりました。

ここで重要なお知らせがあります。

実は、この『理不尽な神様と勇者な親友』はルートを分けて書くこう思っています。

一旦『理不尽な神様と勇者な親友』は休止して、『護ルート（仮）』を立ち上げようと思っています。

と、いうわけで、こちらの話の裏側として護視点の話を書きますので、次からはそちらがメインとなります。

『理不尽な神様と勇者な親友』と連動しておりますので是非ご覧になってください。

*シリーズに言うっていましたが、ややこしくなりそうなので、章ごとの外伝という形にしようと思います。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

プロローグ（前書き）

護ルートでしたが、書いているとあまりのつまらなさに嫌気がさしました。基本的に雄一ルートの補足なので流し読み程度でかまいません。

……と言つより流し読みでお願いします。読者が離れて行っている気が……

第二章へ急げ！！

プロローグ

扉

そう、扉が道路の真ん中に立っていた。

珍しい光景だが、それ自体は別段おかしいものではない。どこかの大工が運搬中に落としてしまったとか、何かのイベントの飾りだとか、可能性自体はいくつかあるからだ。

だが、僕が驚いていたのは周りに誰もいないにもかかわらずひとりでに扉が立っていること。そして……僕以外の人間には見えていないということだ。

なんと聞き返しても、同じ児童養護施設に住み、なおかつ親友の佐山雄一やまゆいちには目の前に立っている扉が全く見えていない様子だった。しかも、俺の頭がおかしくなったと言わんばかりに俺の体を心配してくる。……その言葉と瞳がとても優しいものであるのが救われな
い……

しばらくすると扉に動きがあった。

扉がひとりでに開いたかと思うと、俺の体が扉に吸い込まれ始めた。なんだこれは！扉があることまではまだいい！だが、吸い込まれるってどういうことだ！これではまるで……

フィクションの……

「うわああああ!!!!」

吸い込まれまいと必死に抵抗したのだが、結局僕の体は扉へと吸い込まれていった。

こうして、『俺』音竹護はこの世界からその姿を消した。………
最後には雄一の体を掴んでいた気がするのだが………どうなったのだろうか？

「……ろ。……おい……」

ぺちぺちと頬を叩く感触がする。

「ん、ん………?」

重く閉じた瞼を開くと目に飛び込んできたのは、見たことのない、三、四十代といったところのあごひげを蓄えた中年男性だった。あと顔が……

「近づい！？」

見知らぬ中年男性が寝起きに息のかかるような距離にいたとなれば、特殊な性癖を持っている人間以外は鳥肌ものだろう。もちろん、僕もそのような性癖は持ち合わせていないので、起きてすぐ、中年男性にアッパーカットを喰らわせてしまった。

「がふうっ！！！」

男性がきれいに曲線を描きながら吹っ飛んでいった。

「あ、ああ！　すみません！大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄ろうとしたが、代わりに何かが男性のもとに飛んでいった。

飛んでいった、というのはすごい速さで向かったとかではなく、文字通り空中を飛んでいたのだ。

しかも、見た目としては羽の生えた子供。

……………天使？

いやいや、あれはあれは架空の存在だったはずだ。うん。あれはきつとあれだ……………ワイヤーアクション？

いや、でもどう見てもワイヤーはついていないし……………ああ！訳が分

からない!!

「良いパンチだったぞ、音竹護。出来れば殴らないでもらいたかったが……」

僕が少しパニックになっていると、鼻にティッシュを詰めた男性がいつの間にか目の前に来ていた。恐らく、天使（仮）に手当してもらっていたのだろう。

「あ……も、申し訳ありませんでした！ 驚いたとはいえ、殴ってしまうなんて……」

天使（仮）のことは気になるが、まずは殴ってしまった男性に謝罪をしないと。

……ああ、でも！ 男性の周りをチョロチョロと飛び回っているのはなんなんだ！

「いや、こちらも不用意に近づきすぎた。気にすることは無い」

そう言つて、男性が使から何か書類のようなものを受け取り、めくり始めた。

「あ、あの。いくつか質問をしてもよろしいでしょうか」

僕は学校で先生に質問するときのように手をあげる。天使（仮）以外にも聞きたいことはある。

「ん、いいぞ」

「まず一つ目ですが……その天使（仮）はなんでしょう。ワイヤーアクション……ではないですね？ ホログラムか何かですか？」

僕が天使（仮）について聞いてみると、天使（仮）と男性が目を合わせ、

「天使（仮）？ これは俺の使い走……天使だ。（仮）はつけなくてもいい」

今、使い走りって言いそうになったな……それに予想通りだとしても、天使って…

「言いたいことは色々ありますが……ひとまず次の質問です。ここはどこで、なんで僕はここにいるのでしょうか？」

そう、天使に気を取られていて気づくのが遅れてしまったが、僕は全く見知らぬ場所にいた。しかも、周りは白一色ではるか彼方まで何もない場所……いや、空間に俺は立っていたのだ。

それに、確か僕は雄一と一緒に下校途中だったはずだ。途中でおかしな扉が現れたところまでは覚えているのだが……

「ふむ、ここは確か……『時空の狭間』……だったか？ それと、ここに呼び出したのは私だ。少しばかり手荒になってしまったが……」

『時空の狭間』？ アトラクションとかエリアとかにありそうな名前だ……ということは、ここはどこかの遊園地か何かの中か？だとすれば、このおかしな空間にも納得がいくな。天使もやはりプログラムか何かなのだらう。

「分かりました。それでは次の質問を……僕と一緒にいた高校生を知りませんか？ 名は佐山雄一と言うのですが……」

僕は雄一と一緒に下校していた。だが、今この場所に雄一はいない。一緒に連れてこれなかったのか、または別の場所にいるのか……

「佐山……雄一……ああ、あの頭の悪そうな少年か。あれなら、手違いで連れてきてしまったので、早々に退場してもらった。音竹護もすぐに同じ場所に送るから、気になるのならばその時に探せばいい」

この男性の言うことを信じるならば、ひとまず雄一は無事なのだろう。

さて、次が恐らく最も重要な質問だ。

「では、最後に……あなたは一体何者ですか？ 身代金目的の誘拐なら当てにしない方がいいですよ？僕は施設で暮らしているので身寄りもありません」

そう、今のこの状況でもっとも可能性が高いのは僕が誘拐されたということだ。

もし本当に誘拐ならば、この男もなかなか頭が悪い上に運も無い。そもそも誘拐するなら僕のような男子高校生ではなく、小学生くらいの女子を狙うべきだ。それに言ったように僕は施設で暮らしているので身寄りが無い。よってお金を払うことは出来ない。

「ん？ どうやら少し勘違いがあるようだな。佐山雄一はそれほど気にしていなかったのだが……」

「彼は頭が残念な人なんです。一緒にしないでください」

「ふっ、そうか……しかし安心しろ。私は誘拐犯ではなく…………神様だからな」

………神様？

…… ああ、なるほど。誘拐犯に加え、麻薬中毒者だったわけか。

「ふむ、その目は信じていないな？ よかつ。では証拠を見せてやる」

俺の疑いの目を察したのか、神様（仮）が持っていた書類をぺらぺらとめくり始めた。

「音竹護１７歳。現在は東京郊外の児童養護施設で暮らしている。小学校に入学するころ、母親の虐待によって施設に入る。後に父親に引き取られるが、それでも虐待に遭い再び施設入り。現在は、施設で古武術を習う傍ら、勉強にも励み、全国模試で二位になるほどの秀才ぶりを発揮する」

「なっ！！」

神様（仮）がつらつらと並べ連ねたのは、俺の過去や現在のプロフィールだ。それに俺が施設に入った原因なんて糸田園長を含め数人しか知らないことだ。

「ふむ、他にも色々あるぞ？ おねしょをした最終年齢とか好きな女性のタイプとか……」

「わーっ！ わーっ！！ もついいです！！信じますから！！」

僕の恥ずかしい過去や女性の好みまで知っていると……神様とは信じがたいが、ただ者で無いことは確かなようだ。

「ふっ、信じてもらえて何よりだ。では、そろそろ本題に入らせて

もらっぞ」

先ほどまでへらへらと笑っていた神様だったが、急に顔つきを変え、真剣なまなざしで僕を見る。

「な、なんでしょう?」

「音竹護。お前を異世界『アストラム』に勇者として召喚する」

はい?

「勇者って……昔話とかゲームとかに出てくるアレですか?」

「まあ、そんなところだ。『アストラム』を救うのがお前の使命だ。詳しい説明はめんど…ゲフンゲフンッ、あちらの世界でしてくれるだろう」

「今めんどくさいって言いかけませんで………ってうわああ!!」

僕は神様への突っ込みの途中だったが、急に強烈な浮遊感に襲われた……というより、なぜか僕の体が落下し始めた。

「うわああああああ!!」

結局、何が何だかわからないまま、僕は異世界へと送られることになった。

プロローグ（後書き）

さて、読者の皆様には面倒くさいこと極まりないでしょうが、『護ルート』の始まりです。前書きでも書きましたが流し読みでかまいません。飛ばしていただいても多分問題ありません。

とりあえず、本編である『雄一ルート』は『護ルートが』終わり次第再開します。

第一話 召喚の場にて

なんということだ……勇者を召喚しようと、この一年間さまざまな道具をそろえ有能な神官たちに招集をかけた。

だが、召喚できたのはなぜか魔力の欠片も持たないような平民の子供だ。どう見ても勇者ではない。

「し、シルフィ様……あの者を追い出してしまつてよろしかったのですか？ 万が一あの者が勇者だったとしたら……」

「伝承にもあつた通り、勇者ならば竜人^{ドラゴノイド}族をしのぐほどの魔力を備えているはずだ。それに、あの者自身が勇者ではないと説明していたではないか」

そうだ。あの者は、自分自身が手違いによりこの場へ召喚されてしまったことをはっきりと断言していた。

くそっ！ 忌々しい……追い出す前に一発殴つてやればよかった。

「……………召喚の儀式を再び行うことはできないのか？」

「申し訳ありません……神官たちの魔力が尽きかけておりますし、必要な道具も再び集めなければなりません。すぐにはとても……」

やはりか……だが、戦況は我らに芳しくない。もうそんな時間は……今も戦い続けている将兵たちの姿を思い出すと涙が出てくる。すまない……そなた達を救うことは妾には……

「し、シルフィ様っ！ 魔法陣が……っ！」

神官の一人が急に叫んだ。

振り返ると魔法陣から神々しい光が放たれている。
だんだん大きくなるその光は部屋全体を包み込んだ。そして、膨ら
みきつたその光は不意に消え去る。

これは……召喚魔法か？

先ほどの少年を召喚した時と同じ現象だ。

まさかつ、召喚できる状態では無いはずなのに……

「い、一体、どうなったのだ!？」

「私は何もしていないぞ!？」

神官たちが困惑の声をあげている。

妾も同じく混乱していたが、目に入った光景に再度驚かされた。

魔法陣の上に少年が倒れている。黒髪で、先ほど召喚された者と同じ服を着ている。

また失敗か!!

どうやって召喚の儀式が行われたのかは分からないが、結局のところ失敗だ。ため息が出るな……

「貴様は何者だ!!」

先ほどと同じく、目の前の者の胸倉をつかみ上げる。

くそっ! なぜ神はこつも無慈悲なのか……我々の願いを聞き届けないばかりか、ぬかよろこびをさせて楽しんでおられるのか!

「さあ言え! 貴様……は……」

あれ？

なんだか顔が熱いな……？

胸もドキドキして……

先ほどの者は実に頭の悪そうな顔をしていたが、この者はなんと
うか……… かつこいい

シルフィ・ド・アラム・モントウ。15歳の……初恋の瞬間で
あった。

「うつ………」

こゝここは一体どこだ。

頭で鈍器で殴られたような痛みで視界がぼやける……

目をこすりながらあたりを見回してみると、先ほどまでいた真っ白

な空間とは違い、レンガ造りの建物の中にいるようだ。
しかも、辺りには神官のような服装をした男たちが並んでいる。

だが、その中に一人だけ出で立ちの違う女の子がいた。

きらびやかなドレスに身を包み、頭には王冠？のようなものを乗せている十二、三歳ほどの女の子だ。

そして、その女の子がだんだん僕に近づいて……胸倉を掴んできた。

「えっ？　ちょっ………」

「貴様は何者だ……！」

……は？

何者かって……そもそもあなたが何者ですか……！？

というよりここは一体どこなのだろう？

「さあ言え！　貴様……は………」

「ひ、ひとまずこの手を離してくれないか？　話づらいんだけど………」

……？　どうかしたのかい？

見ると、女の子の顔がどんどん赤くなってゆく。

風邪か？　そうでなければそれほど怒っているのか……？

「大丈夫？　顔が赤いみたいだけど………」

「ひゃ、ひゃい……！　だいじょうぶ……ぶ、です！はい……！」

それつが回っていないな……やはりどこか具合が悪いのだろうか……

「し、シルフィ様！　その方は……！」

ふいに神官の一人が女の子に向かって叫ぶ。この子はシルフィと言

うのか？

「な、なんだ！ 急に大声をあげて！」

「その方の魔力が……」

「……………っ！」

神官の言葉に女の子が俺の僕を凝視したかと思うと、次の瞬間、

「お待ちしておりました。われらの勇者よ」

跪いていた。

しかも、女の子だけではなくその場にいた神官たちも一人残らず僕
に向かい膝をついていたのだ。

「……………なんですかこれは……………」

第二話 なぜか冷静

「こちらが、モントウ王国現国王であらせられるワング・ジ・アラム・モントウ国王陛下でございます」

……… た、大変なことになった…

僕は今、国王陛下とやらの前で跪いている。

王冠をかぶり、マントを羽織っているいかにも王様といった風貌の男性が玉座に座りながら僕を見下ろしている。

さらにその隣では、先ほどであったシルフィ？だったか……が、僕に向かって照れくさそうに手を振っている。

異世界？に来てからまだ三十分と経っておらず、状況がうまく飲み込めていない状態であるため、大変混乱している状態だ。

正直、この玉座の間のような場所にどうやって来たかさ覚えていない。

「そなたが此度召喚されたという勇者か……名は何という？」

王様が口を開く。

風貌にピッタリの渋い声だ。

「は、はい！ 僕……いえ、私は音竹護と申します」

名乗ったはいいものの、この場にいる人たちの容姿は西洋の物なので、名字と名前を逆に言った方がよかったかもしれない。

まあ、最近では名字≡名前でも海外でも通じるらしいけど……

「オトタケ」マモルか……変わった名だな。マモルというのはどういった家柄の家名なのだ？」

護を家名と言ったということは、やはりここでは名前＝名字が一般的なのか……

「いえ、護の方は名前で、音竹が家名になります。こちらの呼び方だと、マモル」オトタケになります」

後々考えてみれば、王様の間違いを否定……まあ訂正だけど、するのは少し無礼だったのかもしれない。

王様の隣にいる髪の長い男性がこちらを顔をしかめてにらみつけているし。

「ふむ、ではオトタケが家名か……それはどれほどの位なのだ？」

伯爵か侯爵か……いや、公爵や大公の家なのだろうか？」

伯爵って……爵位のこと？ まあ、国王が存在するということは王政をしているのだから、貴族が存在してもおかしくはない。だけど、期待してくれているところ悪いが……

「ご期待の所悪いのですが、私の家は貴族ではなくただの庶民です。それに、私がいた国では貴族という物はありませんので……」

「なんと、勇者は平民の出なのか！？ しかも貴族が存在しない？」

王様が驚き、僕の言葉を反復すると静かだった玉座の間が一斉にざわつき始めた。

「貴族では無い……？ だが伝承によると……」

「いや、すべてが伝承通りとはいくまい。それよりも貴族がいない
と言う方が…」

「そもそも平民が勇者など……許されることなのか？」

様々な意見が玉座の間を飛び交っている。

そして特に目立ったのが、王様の隣にいる先ほどにらみつけてきた
男性だ。

先ほどまではあまり僕が気に入らないといった表情だったのが、あ
からさまに侮蔑と見下すような目つきに変わっていた。

「平民出の勇者など…許容できる物ではありません。しかも、貴族
を愚弄するかのような物言い、冗談で済まされる物ではありません
ぞ？ 勇者殿」

男性の言葉には明らかな敵意を感じ取れた。

僕の言葉を愚弄とまで拡大解釈できるのは、はじめから僕を良く思
っていない証拠だ。

「そもそも、この者が勇者であると言う証拠はどこにあるのです？
そのあたりの平民をさらってきたのでは無いでしょうか？ シルフィ
様？」

男の視線が王を挟んでシルフィへと向けられた。

「そ、そんなことはありません。サテレス殿、妾は確かに……」

「万が一、この者が勇者だったとして……平民の力を借りなければ
ならないほど我らが王国は弱くはありません。十二分に魔軍に対抗
できます」

「それができていないから勇者の召喚を行ったのではないですか！
サテレス殿は現実がお見えになっていないようだ！」

王様を挟み、両者が火花を散らしている。

王様もウンザリしたような表情でこの二人を制した。

「二人ともいい加減にせよ。内輪でもめていても仕方あるまい……
それにサテレス、魔導師であるそなたならわかるだろう。勇者の魔
力が尋常ならざるものだ……」

「む、確かに魔力は伝承通り竜人族^{ドラゴロイド}を凌ぐほど感じられますが……」

僕を見ると、先ほどにも増して苦虫を噛み潰したような表情をする
サテレス。

「勇者よ、そなたほどの魔力の持ち主だ。元の世界ではさぞ名のあ
る魔法使いであつたのだろうな？」

「えっと……私がいた世界ではそもそも、魔法という物は存在しな
い架空の物だったので……私は魔法の類は使うことができません」

……

玉座の間に沈黙が流れる。

「ま、まあよいではないですか。魔力がこれほどの物なのです。勉
強をすればすぐにでも強力な魔法を身につけるでしょう」

シルフィが俺をフォローしている。

見ると、サテレスが優越感を覚えたような表情で俺を見下していた。
魔法が使えないという所から僕を切り崩せるとでも思ったのだろう。

「あの……失礼かもしれませんが、私からもいくつか質問をしても
よろしいでしょうか」

正直、質問ができるような雰囲気では無かったのだが、今機会を逃すと聞けるのはいつになるのかわからない。

今すぐに聞いておきたい情報もあるので、意を決して質問をすることにする。

当然サテレスはますます俺をにらみつけることになったが……

「うむ。わからないことがあれば何でも聞いてくれてよいぞ？」

サテレスと違い、王様は快く質問の許可をくれた。

「ではまず……私はこの世界のことを何も知りません。勇者と呼ばれる理由は……まあ、何となくは聞かされましたが、いまいち今の状態がわかっていません」

今思えば本物だったであろう神様にものすごく簡略化された説明を聞かされたため、一応は自分が勇者であると言うことはわかつている。

だが、具体的に何をすればいいのか、そしてそもそもこの世界はどうなっているかは教えてもらっていないのだ。

「ああ、確か伝承にも『勇者はこの世界に対してあまりに無知である』と書いてあったな。ではサテレス、説明を……」

「陛下！　勇者殿にはこのシルフィが後ほど一対一で説明して差し上げます！　一対一で……！」

王様の言葉を遮るようにシルフィが叫んだ。

身を乗り出してまで自己主張をしてきたシルフィに対し、僕を含め、王様やサテレスも驚きの表情を浮かべていた。

「う、うむ。そうか……シルフィがそうしたいのであれば……」

王様の言葉に満足げな表情を浮かべ席に戻るシルフィ。
なにがそんなにうれしいのだろうか……

「あ、えつと……ではもう一つだけ……こちらにもう一人、私と同じ姿の同じ年頃の少年が召喚されて来ませんでしたか？ 私の親友なのですが……」

僕が雄一のことを口にする、王様やサテレス、そして臣下の人たちは何のことかと首をかしげていた。
だが、僕が召喚されたときにいた人たち……つまり、数人の神官とシルフィだけが借りてきた猫のようにおとなしくなってしまった。
特にシルフィは、大量の汗を顔に浮かべ、先ほどまでのうれしそうな表情がみるみるうちに消えていった。

第三話 彼はたくましかった

「……………」と、通貨価値と庶民の収入などの説明はこのくらいだろう。次にアストラムの地理についてだが……………」

召喚された最初の部屋とは違う、日の光がまんべんなく部屋に差し込む大きな部屋で、僕はシルフィにこの世界での基礎知識を教えるもらっていた。

王様や大臣？たちがいた玉座の間では僕に対しても敬語を使っていたのだが、今の部屋に入り二人きりになると話し方は堅苦しいものの敬語そのものは外れていた。

結局、玉座の間での『雄一の行方』については分からず終いだった。なぜなら、シルフィが急に「そそそ、それについても妾が後で説明いたします！！」と大声で叫び、話が強制的に終了させられてしまったからである。

「あの、シルフィ……………様？」

先ほどから質問を寄せ付けないかのごとくの弾丸トークをしているシルフィ。何度か、雄一のことについて聞こうとしたのだが、聞かえていないのかそのフリなのか……………どちらにせよともに返答は帰ってこない。ちなみに今のが六回目のチャレンジだ。

「この世界はアストラムと呼ばれていて、デイオシータス大陸といくつかの島に分かれているのだが、いかんせん今の技術では世界全体は把握しきれしていない。しかも魔軍^{ビストロイド}によってそのほとんどの土地が支配されているため、我々人族や獣人族^{ビストロイド}が住む土地はさらに少数で……………」

「シルフィ様!!」

六回目のチャレンジが失敗したため、今度は少し強気で攻めてみた。具体的には顔をシルフィの顔に近づけ、無理矢理に視線を合わせたのだ。

これなら聞き逃したと言いう訳はできない。しかも功を奏したように、ようやくシルフィに反応が見られた。

「ひゃあ!! 勇者よ、近いぞ!!」

どうやら強気に出て顔を近づけさせたらしく、シルフィは顔を真っ赤にして僕を押しつけた。

「そ、そういうことはもう少し関係を深めてから……」

真っ赤になった頬を両手でおさえうつむきながらなにやらゴニョゴニョとつぶやいているシルフィ。さすがに怒らせてしまったか？

「あつそうだ! その様付けと敬語をまず止めるのだ勇者。さすがに臣下がいる前では問題だろうが……二人きりの時ならば問題あるまい。そうすればさっきの続きをしてやらんことも……ゴニョゴニョ……」

シルフィが何を言っているのかはさっぱり分からないけど、だんだん俺が聞きたいことから離れて行っている気がする。

雄一のことを聞きたいのに、なぜシルフィの呼び方の話になるんだ？

「シルフィ様、そういう話ではなく……」

「だめだぞ勇者。様付けと敬語をなくすまで口をきいてやらぬからな。そうだ、無くしてくれたら妾も勇者のことをマモルと呼ぶこと

にしよう」

だから何でそんな話に!?

「いえ、ですからシルフィ様。私が聞きたいのはゆ「駄目!」……」

駄々をこねた子供のよう……というよりシルフィは見た目子供だが……ともかく、顔をプイツと俺から背けてしまった。

「シルフィ様？」

「……………」

こ、膠着状態……?

ここは……少し折れるしか無いか……

「シルフィ？」

おそろおそろ呼び捨てでシルフィの名を呼んでみた。すると、先ほどまですねていたとは思えないようなかわいらしい満面の笑みを浮かべる。

「な、なんだ? マモル」

名前を呼ばれたことがそれほど嬉しかったのか、僕が何を言つかきらきらした期待の目で僕を見ている。

……いや、呼び捨てで呼べと言われたから呼んだだけなんですが……

「……………あゝ、分かったよ。じゃあ、二人きりの時は呼び捨てで呼ばせてもらっようシルフィ」

僕の言葉にますます喜びの色を強めるシルフィ。

まあ、そもそもがシルフィのような子供に対し様付けや敬語などといった物は、少し違和感を感じていたため、呼び捨てもそれほど抵抗なく使うことができた。

「うむ。そろそろそれではっ！ そんなマモルにはほ、褒美が必要だな！ さ、さっきの続きを、ややややつてもかまわないぞ！？」

顔を真っ赤にしながら目をぎゅっつつむり、僕に顔を近づけてくるシルフィ。

…………… 一体この子は何をしているのだろうか……………

「いや、よく分からないからそれはまた今度で良いかな？ 今は雄

一…僕の友人について聞きたいんだけど」

「うつ…そ、それは……………」

僕が雄一のことを切り出すと、赤くしていた顔がみるみるうちに蒼くなっていく。

この反応は……………

「シルフィ……………もしかして……………っていうかやつぱり何か知ってるね？」

あからさますぎるシルフィの態度を見ていれば、何かを隠しているところのように鈍い人間でも気付くだろう。

そう。たとえば頭が多少残念な作りになっている雄一であろうとも！

「……………た」

シルフィがボソツとつぶやく。あまりに小さい声だったので何を言ったのか全く聞き取れなかった。

「えっと、ごめん。今なんて？」
「お……追い出した……」

……

二人の間に沈黙が流れる。
だがこの沈黙を破ったのは意外にも僕の、

「ぷっ、あっはっはっはっはっ！」

笑い声だった。

「え？ お、怒らないのか？」

おずおずとシルフィが尋ねる。

どうやら僕が怒り狂うとも思っていたのだろう。えらく低姿勢だ。

「いやぁ……くっくくく、不謹慎だけど……思わず……くははっ」

「し、心配ではないのか？ いや、原因である妾が言つのもなんだが……」

僕の態度が変に思えたのか首をかしげるシルフィ。

自分でも以外では合ったが……親友が行方不明になって爆笑とは……

「もちろん心配だけど……雄一なら異世界でもたくましくやっていけそうだなあって……ははっ！ それに、どうせ何か失礼なことを言っただろう？ 雄一は少し常識が足りないから……」

「む……お、おお！　そうだ！　あの者は……大変無礼であった！……ぞ……」

「やっぱり……ふふつ、友人が失礼したね。ああでも、一応居場所を探しておいた方が良くもしいないな。友人として」

僕が謝るとほつとした表情を浮かべると思ったが、意外にもシルフィは気まずそうな表情を浮かべたままだった。

それほどまでに雄一のことを気に病んでいるのだろうか。

「そ、そうだな……探した方が……あつ！で、でもそのご友人はたくましいと言っていたな。勇者が言うほどなのだ、一人でもやっていけるのではないか？」

「雄一は頭が少し足りない奴だから……考えの無い行動を取りやすいし、面倒ごとに巻き込まれやすいんだよ。誰かが舵取りをしてやらないとそれこそ大事件に巻き込まれるかもね。……それに、たくましい……って言うのとはちょっと違ったかもね」

「違う……と言うのは？」

「ん、なんと云ったらいいか……こう、順応性が高い？　しかも変な方向に……」

そう、佐山雄一と言う男は極めて順応性が高い。

順応性が高い。というのは普通であれば長所である所だが、雄一の場合はその限りではない。

こんな例がある。

元いた世界での話だが、僕と雄一が十歳の頃施設で三泊四日のサマーカーンプとして山を登ったことがある。そこで、初日から雄一は行方不明になってしまいキャンプを中止にし、近くの消防団とも協力して捜索に当たった。

すると三日目の夜、雄一は見つかったのだがその姿に全員が驚かされた。

イノシシを丸焼きにして食べていたのである。

しかもその周りには即席にしてはよくできた草の家や、魚を捕るためとおぼしき釣り竿や網などが置かれていた。

つまり、雄一はそこで暮らし始めていたのである。

普通ならば「山を脱出する」とか「救助を待つ」などの選択肢があるはずだが、雄一の場合「その場所で暮らす」という選択肢が生まれてしまう。

だからこそ、変な方向に順応性が高いと言えるのだ。

「よ、よく分からないけど……すぐに探しに行かなくてもよいのか？」

「うん。こっちが落ち着いた頃でも大丈夫だろうね。まあ、できれば早いうちの方が良いとは思っけど……」

「信頼……しているのだな」

信頼……そうだな、雄一は頭が足りないだけで、他の面では俺よりも優れていることも多い。

腕は僕よりも立つし、人なつっこい性格なので信用のおける人間を作りやすい。

少なくともすぐにどうのってことはないだろう………多分……

第四話 訓練

コツコツコツコツ……

長い…本当に長い廊下に僕の靴の音が響き渡る。

なにせ端から端まで移動するのに約十五分ほどかかるのだ。どれほど広い城なのだろうかここは……

召喚されてから一夜が明け、僕は高校の制服からこちらの世界の服へと着替えていた。

城の内装が中世のヨーロッパのようなこともあり、ひらひらとした服を着させられると思ったのだが意外にも元の世界の現代ファッションに似たような服装だった。

皮のブーツをはき、白のロングコートを羽織っている。一見すると現代ファッションなのだが、まじまじと見ているとなぜかゲームのキャラクターが身につけているような格好だ。

まあ、魔法が存在しているファンタジー世界なのだからおかしくはないのか…？

昨日、シルフィと雄一の今後について話し合ったのだが、僕が城からの外出許可をもらうのには二、三日かかるらしい。

事務を取り仕切っているサテレスが忙しらしく書類申請が遅れるという理由らしいが、それは口実で僕を良く思っていないサテレスによる嫌がらせだとシルフィは言っていた。何か嫌われるようなことをしたのだろうか……

ともかく僕は今長い廊下を歩いている。

シルフィは僕の今後の予定を決めるための会議に出席しているらし

く、今は僕専属となった若い家政婦さんに連れられ城の中を見学しているというわけだ。

「こちらが兵士たちが鍛錬をしている訓練場になります」

家政婦さんが扉を開くと、中庭のような場所に出た。木製の人形に剣を振り下ろす兵士や組み手をしている人たちもいる。

「おお！　すごいですね……兵士の方はみなここで訓練をなさっているのですか？」

「はい。城の警備をしている者が大半ですが一定期間ごとに街の門を管理している方も訓練に参加されます。ちなみに今は南門の者たちが訓練をしていますね」

家政婦さんが笑顔を僕に向け愛想よく説明してくれていると、僕に気付いたのか兵士が何人か俺に近づいてきた。

「なんだ坊主。新兵か？　ならちよつと腕を見てやるから訓練に参加しろよ」

台詞だけ聞くと意地の悪い新人いびりに聞こえるが、ベテランが新人を育てるような気持ちの良いニュアンスだったので単に新兵が入ってきたことが嬉しいのだろう……ぼくは新兵ではないけど……

「いえ、こちらの方は……」

「大丈夫ですよ。ぜひお手合わせ願います」

僕のことを勇者だと知っている家政婦さんは慌てて兵士さんの言葉を訂正しようとしたが、僕自身は別段気にしないので、兵士さんの誘いを受けることにした。

施設にいた頃は…と言つてもまだ二日前のことだけど、園長先生…
糸田孝三先生の方針により施設にいた全員が先生の家に伝わるとい
う古武術を習つていてた。
もちろん僕も例外ではなく、毎日鍛錬に参加していた。
慣れというのは怖い物で、毎日を動かしていないと何か落ち着か
ない。ここで兵士さんと訓練ができるのなら昨日やらなかった鬱憤
を晴らすことができるだろう。

と言つわけで試合開始。

僕と兵士さんの間で審判が立っている。僕と兵士さんが戦うと言う
ことで、訓練所にいた兵士たちが集まり、それなら審判も、と言う
形になっている。

僕は木剣を正眼の構えで持っている。木剣自体が西洋の剣を模して
いたため、使いこなせるかは疑問だが、古武術の中に剣術も含まれ
ていたためこの構え方が一番しっくりくる。

一方の兵士さんは西洋剣術で用いられるような上段の構えをしてい
る。

「俺はクロード」マクシウエルだ。南門で部隊長をしている」

「僕はマモル」オトタケと言います」

お互いが自己紹介をすると、審判がおれとクロードさんから少し離
れ……

「試合開始!!」

開始の合図をする。

はじめは距離を取りつつ出方をうかがおうと思ったのだが、試合が開始すると、クロードさんが一足飛びに距離を詰め、つばぜり合いをしてきた。

速さ的にはそれほど速いものではなかったが、何度も繰り返してきた動きなのか、見事に僕の懐に入り込むクロードさん。

僕とクロードさんは身長的にはそれほど違いは無いが、筋肉の付き方がクロードさんの方が圧倒的に多い。普通につばぜり合いをすれば押し負ける！……と思ったのだが、意外にもクロードさんの力は弱く、逆に僕が押し勝つ形になってしまった。

それを見た周りの兵士たちが歓声を上げる。体格差を見て、僕が押し負けると思っていたのだろう。

「む！やるな！！」

「まだまだここからですよ！！」

押し負けたクロードさんは体勢を崩している。さらにそこに僕が追い打ちをかけようと剣を振るう。

右足を踏み込んだの面打ち。……といっても、お互いに防具の類はつけていないため、頭に打ち込む訳にはいかず、少しずつ肩に木剣を振り下ろした。頭に打ち込めば、大けがでは済まないだろうからだ。

「なん……のお！？」

何とか僕の剣を防いだクロードさんだったが、その衝撃で転倒してしまう。

それほど強く打った覚えは無いのだけど……

「やるなあ！ 新人」

「クロードさん！ 負けるな！！」

「新人！ もつと攻めていけ！ おまえに賭けてんだから！！」

周りの兵士たちから応援の声が聞こえる。ほとんどがクロードさんを応援する物だったが、この試合で賭け事をしているのか、ちらほらと僕を応援する声が聞こえた。

「はあっ！！」

起き上がって剣を構えようとするクロードさんに向かい、再び剣を振るう。

クロードさんの木剣に当たり、木剣をはじき落とす。さらに、その勢いのままクロードさんのもと元に木剣を突きつけた。

「そこまで！！」

審判が試合の終了を告げた。

おおおおおおおっ！！！！

兵士たちから大きな歓声が巻き起こった。

「めちやくちゃ強えな！ あのクロードさんに勝つなんて」

「良くやった！ おかげで良い思いさせてもらったぜ！」

しかも、僕を取り囲んだと思えば頭をガシガシとなでたり背中を強く叩いたりともみくちゃにされた。ほめてくれているのは分かるのだが、もう少し加減をしてほしい。

「いやゝ、とんでもない凄腕だなあ……めちやくちゃ速かったし、

細腕のくせに馬鹿力だし」

頭をかきながら、クロードさんが兵士たちの間から顔をのぞかせた。

「え？　そうですか？　そんなに力を入れていなかったはずなんですが……」

「なにっ！？　あれで手加減までしていたのか？　どれだけ強いんだおまえ……」

僕が手加減していたと解釈したクロードさんはあからさまにシヨツクを受けているようだった。

僕としては手加減をしたのではなく、牽制のつもりで打った剣が決定打になっただけなんだけど……

「まあ、いいか……それはそうと、マモルはもう配属先は決まっているのか？　決まっていらないなら南門で働く気は無いか？　おまえほどの腕だ。すぐにでも部隊長になれるぞ」

三秒前までシヨツクを受けて沈んでいたクロードさんだが、驚くべき速さで立ち直り、僕を仕事場へ勧誘してきた。

「あっ！　ずるいッスよクロードさん！　新人。門番なんかよりも近衛兵を目指してみないか？　おまえなら相当な位まで行けるぜ？」

「馬鹿！　そんな所よりも、戦地に行つて敵を倒しまくったほうが手っ取り早く出世するっての！」

ぎゃーぎゃーと兵士たちが騒ぎ出した。どうやら、僕を自分の部署に引き入れようと口論しているようだ。

「あ、あの！　お気持ちはありがたいですけど、僕は実は……」

「その方は勇者殿だから特定の部署には着かないだろう」

僕が兵士たちの誤解をとこうと口を開いた時、周りの騒ぎを抑えるような声が聞こえた。

その声が聞こえた瞬間、なぜか兵士たちが一斉に口を閉じて整列を
しだした。

あっという間に兵士たちがきれいな五列縦隊に整列し、その隙間から
声をかけた人物の姿が見えた。

金髪碧眼、さらに身長が190センチを超えるほどの長身の男性だ。
さらに、史実の中世ヨーロッパの鎧ではなく、やはりゲームなどに
出てきそうなきらびやかな鎧に身を包んでいる。

「休め！」

男性が兵士たちの間を通りながら声をかける。すると糸が切れたよ
うに兵士たちが体勢を崩してゆく。

そして口々に「勇者？ 勇者って……」「あんなの絵本の中の話だろ
？」とひそひそ話を始めた。

「部下たちが失礼した勇者殿」

僕の目の前に来た男性が俺に声をかけてきた。

「い、いえ……気にしていませんよ。そもそも勇者といってもそれ
ほど特別視してもらいたくありませんし……」

目の前に立たれると、男性の体の大きさがよくわかった。
身長が177センチの僕から見ると、見上げる形になるほど背が高

い。かといってクロードさんのような筋肉質でゴツゴツした体つきではなく、筋肉を絞ったアスリートのような体つきだ。顔つきを見る限り、二十代後半といったところだ。

「私は、勇者殿の護衛役を務めさせていただくことになったゲイル
「フォン」トトロスだ。よろしく」

そういつてゲイルさんは手を差し出してきた。僕はその大きな手を握ると、

「マモル」オトタケと言います。こちらこそよろしくお願いします」

と、名乗り返した。

先ほどの兵士たちの態度からすると、ゲイルさんはそれなりの地位の人間らしい。しかも、名前に『フォン』とついているところから見ると貴族か何かの人間だろう。

「あ、あの……ゲイル殿。この者は一体……」

おずおずとクロードさんがゲイルさんに質問する。どうやら、勇者……僕がこちらに来ていたこと自体知らないようだ。

「ああ、君たちにはまだ知らされていないのだったな。この方は先日召喚された勇者殿だ。ちなみに、このことは戒厳令が敷かれているから城の人間以外には口外しないように」

「は、はっ!!」

クロードを始め、兵士たちが一斉に敬礼をする。

その姿に軽く頷くと、再び僕の方を向くゲイルさん。

「ところで勇者殿。先ほどの試合を見せてもらったが、ずいぶんと腕に自信があるようだな？　もしよかったら私と手合わせをしてみないか？」

ゲイルさんは体を曲げ、僕に視線を合わせるようにして言った。

二連戦？

第四話 訓練（後書き）

大きな展開は起こりませんでした。
おもしろくない話で申し訳ないです。

第五話 勝負の行方

「り、両者！ 向かい合ってください！！」

審判が僕とゲイルさんを向かい合わせる。

形式的なもので簡単なことのはずなのだが、上司と勇者という組合わせに多少緊張しているのかもしれない。少し声が裏返っている。

「勇者殿、手加減は無用だ。全力で来てくれ」

ゴツゴツとした鎧を脱ぎ去り、身軽な格好になったゲイルさんが柔軟をしながら言った。

「もちろん。全力でお相手させてもらいますよ。……ただ、一つ聞きたいのが、先ほど僕の護衛役だと言いましたがそれはどういうことですか？ 城にいる以上、危険なんてものはなさそうですか……」

城の外に出て行動するならばをつけるのも頷ける。街の外には『魔物』と呼ばれる生き物も存在するらしいし……

だが、城の中にいる状態でこれと言った危険に巻き込まれることがあるとは思えない。

「ん、そのことだが、そうだな……私に勝ったら教えてあげることにしよう」

なんだそれ？

そのタメは必要なのか？

「そ、それってどういっ……」

「試合開始……!」

聞き返そうとすると、審判が緊張しすぎて何の脈絡もなく試合を始めてしまった。

「ち、ちよつと待って……」

「まあ、良いじゃないか。ただ試合をするだけではおもしろくないだろう?……だとすればあれだな、私が勝ったら……シルフィ様と結婚してもらうことにしよう」

……………え?

な、なんだそれ?　なんでそんな話になってるんだ!?

「結婚って……!　何で僕がシルフィ様と……」

「いやあ、シルフィ様が他人に興味を持たれるのは初めて何でな。

元世話役としては願いを叶えて差し上げたいと……」

「だ、だからって何で僕がシルフィ様と結婚するって話になるんですか!　興味を持ったと言っても好きってことではないでしょう?」

急におかしなことを言い出したゲイルさんに突っ込みを入れていると、

「あ、あの……一応試合が始まっていますので……」

審判がおれとゲイルさんの中間に入り、試合が始まっていることを告げてきた。

そう言えば試合が開始されてから口論しかしてなかったな。

「おっと、そうだったな。勇者殿、勝ち負けの結果は試合が終わってから考えることにしよう」

「い、いや！ それじゃあ何もかもが遅……………っ！」

ゲイルさんの言葉を訂正しようと一歩前に進んだ瞬間、ゲイルさんの木剣が僕の目の前の空気を斬った。一応は偶然外れたのではなく、瞬間的に上半身をのけぞらせて躲したのだが、先ほどのクロードさんとは段違いに速かった。

「……………突っ込んでる暇はなさそうですね」

ゲイルさんの言葉を訂正しないとひどい目に遭うかもしれない。だが、こんな口約束で結婚が決まってしまうとは到底思えないため、今は目の前の相手に集中することにした。

「やあっ！！！」

躲した直後、ゲイルに胸を放つ。だが、それを難なくいなし、次々と攻撃を繰り返してくるゲイル。

あまりのスピードに目を回しつつ、すべてを一応は防いでいくがやはり防戦一方だ。

防具をつけていないため、多少の打ち込みを覚悟しての反撃ができない。しかも、ゲイルから繰り返される斬撃は速い上に重い。掠りでもすれば即大けがにつながりかねないため、反撃ができない。

「くっ、くそっ！！！」

「すごいな勇者殿。私の攻撃をここまで防ぐとは……………っ！」

正直、話ができるほど余裕は無いが、ゲイルはまだまだ余裕と言っ

た状態で僕に話しかけてくる。
しかし、押しているにもかかわらずなぜか剣を引き、僕から距離を取った。

「だが、まだまだ本気を出していないようだな……」

ゲイルが息を乱す僕を見て言った。
かなり本気で戦っているはずだが、何を思っ
て本気を出していない
と
思
っ
て
い
る
の
か
……

「か、かなり……本気なんですけど……」

「まあ、勇者殿の本気がこの程度ならば……必要ないな」

急に背筋が冷たくなった。

先ほどまで笑っていたゲイルさんから殺気が漂ってくる。

……フッ

視界からゲイルさんが消える。

一瞬だったか何秒か経ったのかは分からないが、気付くと僕の視界の端。僕の懐近くに潜り込んでいた。ゲイルが木剣を滑らせて、僕の頭に向かってくる。

まずい。

………死ぬ

木剣であろうと、頭にぶつけられれば確実に死ぬ。

瞬間的に死を覚悟したのだが、次の瞬間、おかしいことに俺の周り

にいた兵士たちやゲイルさんがいなくなった。

「な、なんだ!？」

目の前の光景に困惑する。

どうなったんだ!？」

あたりを見回すと、僕はいつの間にか城の屋根の上に立っていた。中庭から大体5メートルほどの高さだ。下をのぞき込むとゲイルや兵士たちが僕を見上げている。

「……どうなってる?」

いつの間に俺はこんな所に来たんだ?さっきまで下で見上げている人たちと同じ場所にいたはず……

「ふっ、やはりか……」

ゲイルが殺気を消して再びほえんだ。しかも、人間では到底なしえないような跳躍で俺がいる屋根へと飛んできてしまった。

「……なっ! ど、どうやって……」

「ん? 勇者殿と同じく『身体能力強化』の魔法を使ったただけだが?」

魔法?

いやいや、そんなものを使った覚えは無いぞ……そもそも、

「俺は魔法なんてものは使えませんよ?」

「なに？ ……ということは、人間族でありながら獣人族並ビストロイドの身体能力を持っているのか……」

ビストロイド
獣人族。

たしか、この世界に存在する種族のひとつだったか……シルフィからは身体能力に優れた種族だと聞いている。

恐らく、屋根には俺が自力で飛び乗ったようだ。つまり、匹敵する身体能力が俺に備わっているらしい。 …… …… なんて？

「圧倒的な魔力と言い……勇者殿自身が元々持っている能力なのか？」

「いえ、元の世界では武芸こそしていましたが、こんな身体能力は持っていないませんでした」

元の世界でこのようなことをすれば、びっくり人間としてもてはやされていたことに違いない。

「……では、こちらに召喚されたときに付与されたものということか」

召喚された時に能力が付与される。それなら納得がいくかもしれない。

俺のような一般人を召喚しても、そのままの能力では勇者としてまるで役に立たないだろう。だからこそ、神様から能力を授けられたということだ。

「うん。まあ、そのことに関しては追々調べてゆけばいいだろう。それより、勇者殿がこの場所に来てくれたのはありがたい。ここなら誰かに話を聞かれることも無いだろう」

「話……ですか？」

「ああ。勇者殿が知りたがっていたなぜ私が護衛役を務めることになったのかを教えて差し上げよう」

あれっ？ 確かそれって……

「それは俺が勝ったときに聞ける約束だったはずでは？」

「まあそれは口実で、後できちんと説明するはずだったさ」

ゲイルさんが含んだような笑みを浮かべると、下からなにやら声が聞こえてきた。

試合が行われているにもかかわらず、屋根に上られては見る事ができない事への兵士たちの抗議の声だ。「そこじゃよく見えませんよー！」とか「降りてきて戦えー！！」などと聞こえる。

「おっと、観客がお冠だ。簡単な質疑応答にしておこうか。かいつまんで説明すると……勇者殿は命を狙われている」

……………うん？

「い、命って……僕がですか？……なんで？ だれが？」

「恐らくは勇者殿を快く思っていない王党派Royalistによるものだろう。王党派Royalistは今、過激な思想が主流になってきているからな」

これも、先日シルフィに教わった。元々は王党派Royalistと騎士派Odonterrismという各勢力の派閥争いだったが、現在は国の人間のみで魔軍に勝とうという王党派Royalistが主流になってきており、外部の人間の協力を極端に嫌うらしい。

「つまり、異世界という外部から来た人間が手柄を立てるのが気に入らないから殺そうと？」

「つまりはそう言うことだ。現在、騎士派の調べにより首謀者の目星はついているのだが……いかなせん証拠がない。捕まえることは難しいだろう」

首謀者は分かっているにしても証拠が無いのか……やっかいだな…

難しい顔をして考え込む俺を見て軽くほほえむゲイルさん。

「まあ、考えていても仕方がない。暗殺が起きることが分かっているれば対処もできるだろう……そろそろ試合に戻ろうか。いい加減に降りないと彼らに怒られそうだ」

「そうですね。今度こそ全力で行きますよゲイルさん」

「ふっ……ゲイルで良いぞ勇者殿。敬語も使わなくても良い」

「……なら、僕のこととも勇者殿ではなくマモルと呼んで下さい」

「……………良いだろう。行くぞ！！マモル！！」

ゲイルのかけ声により、ようやく試合が再開された。

僕に突進してきたゲイルは木剣を振るった。それを何とか防いだものの、魔法で強化されたゲイルの一撃に俺の体が中庭へと吹き飛ばされる。

「……………っ！」

なんとか空中で身を翻し、兵士たちの和の外に着地する。

普通なら足の一本や二本も折れて良いほどの高さだが、強化された僕の体はまるで当然のごとく簡単に着地をすることができた。

「勇者！ 上だ上！！」

兵士の言葉にとっさに身を起こし、横に飛ぶ。すると、先ほどまで

いた場所にゲイルの木剣が突き刺さっていた。
殺す気かつ!!

「ふっ！」

着地したゲイルに木剣を横に薙ぐ。それは躲されたが、そのまま攻め続けた。

袈裟切りからの突き。そこからゲイルの上部を飛び越えながら頭への攻撃。

防御されても躲されても攻撃し続ける。

結果、終始俺のペースで試合が続けられた。その上、身体能力が上がったことを自覚したからか、さっきよりも体が思った通りに動く。ゲイルも先ほどまでの余裕は見受けられず、息を切らしながら戦っていた。

「はあっ、はあ……はあ………っ」

「ぜえ……ぜえ……！」

めまぐるしく動き続け、数分。

二人とも肩で息をするほど疲れ切っていた。

周りの兵士たちが固唾をのんで見守っている。

「そ、そろそろ最後にしようか…マモル」

「そ、そうだね……決着といこうか、ゲイル」

互いに同意を得て、木剣を構える。

恐らく次が最後の一撃になるだろう。

.....

「はあっ!!」
「おおっ!!」

一気に距離を詰め、木剣を振るう両者。互いの木剣が重なり合った瞬間……

バキッ!!

鈍い音とともに僕の視線が地面と水平になった。
薄れゆく意識の中見えたのは………砕け散った木剣。

僕とゲイルさんの力に耐えきれなかったのだろうか………何とも締められない結果だなあ。

第六話 聖剣エクスカリバー

「馬鹿か貴様！！！」

豪華絢爛な城の一室。僕が今住まわせてもらっている場所だ。その部屋のベットの、シルフィの怒鳴り声で目が覚めた。

「妾は貴様にマモルの護衛を頼んだのだぞ！？ それがなぜ護衛対象であるマモルをたたきのめすことになるのだ！！」

「いえ、本当に不可抗力で……木剣があればともろくなっているとはいりませんでした……おつ、マモル。起きたようだな」

シルフィとゲイルの言い争い……ではなく、一方的にゲイルへ説教がなされていた。

どうやら立场上シルフィの方が上らしく、終始ゲイルが下手に出ていた。

途中、起き上がった僕に気付いたゲイルがこれ幸いと話しかけてくる。

「悪かったなマモル。もう少し早く気付ければ止めること、大丈夫かマモル！！」ぶっ！

謝罪の言葉を述べているゲイルを突き飛ばし、僕の手を握ってくるシルフィ。

「痛いところはないか！？ ああ……こんなに腫れてしまつて……あつ！ もし食欲があるのなら何か病人食でも……その前に医者に診せるのが先だろうか……いや、それよりも……」

「ち、ちよつと落ち着いてシルフィ！ 体はなんともないから……」

次々にまくし立てるシルフィ。

心配してくれているのだろうが、あまりの剣幕で迫るシルフィに少し身の危険を感じてしまった。

「そ、そうか？ ま、まあそれほど心配はしていなかったがな。妾はマモルのことを信じておったぞ？」

「いやいや、先ほどまで『ど、どうしよう。このまま目を覚まさないんじゃ……そうだ！ 口づけをするのはどうだろう。絵本とかでは確か……ぶっ！』」

ゲイルが発した『ぶっ！』というのはもちろんシルフィの台詞ではなく、鳩尾に肘を喰らったゲイルの発せられた声だ。

うまく決まったらしく、両膝についてうめき声を上げている。

「ち、違うのだマモル！ 確かに口づけをしようとしたのは確かだが……まだ何もやってはいない！ ま、まあ……マモルがしたいのであれば今からでもや、や、やってもよいぞ？ さあ……！」

今の会話の流れでそうなるのかは分からないが、シルフィが顔を真っ赤にしながら僕に顔を近づけてきた。

「いや、もう起きてるからする意味は無いだろう？ それに、そう言うことをするのはもう少し大人になってからにしないさ」

先ほどゲイルが言った絵本のくだりから、恐らくシルフィはお姫様と王子様の典型的な昔話の事を言っていたのだろうと分かった。

まあ、立場的には逆の立ち位置にある状況だけど、起きている時にキスをしても全く効果は無いだろうに。起こすためのキスを起きて

いる時にする、それはもうただのキスじゃないか？

それに、子供のシルフィが僕をからかっているようなので、大人として少し注意もしておいた方が良さだろう。

「ん……ん？ マメルよ。そなた……妾のことを何歳だと思っているのだ？」

急に顔をしかめ僕をにらみつけるシルフィ。先ほどまでの緊張した顔つきとはまた違う表情になっている。

「何歳って……多分十二、三歳って所かな？ ああでも、身長から言えば十歳くらいかも……」

確か、元の世界の施設にいた子供たちもシルフィくらいだったと思うし。

「あっ……………」

……ん？

ゲイル……『あっ』って何？

「……………」だ」

シルフィがボソツと何かをつぶやいた。

「ん？ ごめん。何だって？」

あまりに小さな声だったため、思わず聞き返す。後から考えればそ

れが引き金になったのだろう。
つまり……

「妾は今年で十六歳だ――！！！！！」

シルフィがキレた。

叫ぶと同時に部屋の空気が変わる。

雰囲気が変わったとかではなく、あからさまに気温が上昇し、次の瞬間

ドゴオオオオン！！！！

爆発した。

「ええええええっ！？」

今起きたことが分からずただ叫び声を上げ、さっき起きたばかりだ
というのに再び意識を失ってしまった。

「まったく、昨日はひどい目に遭いましたよシルフィ様」

「ふ、ふん！ マモルが悪いのだ妾のせいでは無い！」

「マモル。シルフィ様は見た目の幼さを気にされているのだ。あまり触れてく……ぐっ！」

シルフィのコンプレックスを説明するゲイルの足を、余計なことを言うな！と言わんばかりにヒールで踏みつけにするシルフィ。

鎧に身を包んでいるゲイルだったが、その隙間をかいくぐっての踏みつけた。無意味に達人技である。

昨日の一件。つまり、シルフィが部屋を爆発させた事であるが、あれはシルフィが怒ったときに出す魔法だとゲイルに聞いた。と言っても、シルフィのコンプレックスに触れたときのみに起きる事らしく、滅多にお目にはかかれなそうだ。……………全然嬉しくないが……

ともかく、昨日から一夜が明け、僕とシルフィ、そしてゲイルは玉座の間に続く待合室で待機していた。

昨日の僕の今後に関する事柄についての発表があるそうだ。

「しかし、勇者として召喚されましたが、実際の所僕に何をさせるきなのですか？」

ちなみに、待合室にはシルフィやゲイルの他にも要職の方々がいるため、シルフィに対しては敬語を使っている。

「ふふん。詳しいことは陛下から聞くとよい。私も会議に参加したがそれほど悪くない話だったぞ？ それに、マモルへの贈り物も用意されておる」

「贈り物…ですか？」

「それも後になったら分かることだろう。さあ、そろそろ参ろうか」

僕はシルフィとゲイルに連れられ、玉座の間へと入った。

すると、そこには先日召喚された時よりも多くの人間が並んでいた。国王。

サテレス。

神官。

各種大臣。 などなど…

「よくぞ参った勇者よ」

玉座の間に入ると王様が笑顔で出迎えてくれた。しかし、相も変わらず隣には顔をしかめたサテレスが立っている。

「失礼いたします」

一礼してから部屋の中央に行き、膝をつく。隣でゲイルも同じような姿勢になっている。シルフィはそういった姿勢にはならず、そのまま王様の隣の席に座りに行った。

「うむ。昨日一日会議をした結果、勇者には少数の人間による遊撃隊を率いてもらうこととなった。三人だけの精鋭部隊だ」

「三人……ですか？ たった？」

「うむ。トニトロス公によれば勇者の実力は申し分ないらしいではないか。実力で言えば四大騎士アークナイトに劣らないとか」

アークナイト
四大騎士。

このモントウ王国に存在する最も強い騎士たちに与えられる称号。

一人が戦場に立つただけでその戦場が終わってしまうほどの実力者で、この世界の冒険者という職業のSSクラスとほぼ同等の能力を持っている。と、シルフィから教わった。

冒険者のことも教わったのだが、口頭だけの説明だったためそのすごさがよく分からなかったけど……

「いえ、それほどでは……」

「はっはっは。おかしなところで謙遜するのだなそなたは。まあいい。ともかく遊撃隊の編成は、勇者に加え四大騎士アークナイト、『雷』いかづちの称号を持つトニトロス公。そして……彼女、エクスカリバーだ」

そう言っ僕隣の、ゲイルとは反対側を指さした。

するとそこにいたのは女性……ではなく、小太りの神官服の男性だった。

「彼女」と言われれば誰しもが女性を思い浮かべるだろうが、この世界は小太りの中年男性のことを「彼女」と呼称するのだろうか……

『私がエクスカリバーです。よろしくね勇者さん』

男から聞こえてきたのは男性特有の野太い声ではなく、透き通った女性の声だった。

だが、驚いた。小太りの男は一言もしゃべっていなかったのだ。口を動かさず、じっとしているだけの男。

「勇者よ、見るところが違うぞ？ その男ではなく持っている物だ」

物？

確かに男は手に剣を持っていた。白く澄み切ったシンプルな一本の剣。

だが、これを見るとは一体……

『勇者さん……マモル君と言ったかしら？ もう一度自己紹介すると……私が『聖剣』エクスカリバーです』

今度は分かった。

……剣がしゃべってる……！！

「えええええっ!？」

王様の前だと言うことを忘れ、大声を上げてしまった。

『あらあら、驚かせてしまったかしら？』

「お、驚きますよ！ 物がしゃべるって……ああ、いや……驚く事じゃないのか？」

エクスカリバーを見た瞬間は驚いてしまった。だが、よくよく考えたら僕は機械技術やロボット技術が発達した日本からやってきたのだ。日本では機械がしゃべるなんてことは珍しい事ではない。

今では車や電子レンジまでもが口頭であれこれ説明してくれるのだ。そう考えると急に冷静になってきた。

ここは魔法が普通に存在する世界なのだからしゃべる剣があっても

おかしくは無いのかもしれない。

『あら？　すぐに落ち着いたわね。冷静な性格なのかしら？』

「いえ、私がいた国では物がしゃべることは別段珍しい事ではありませんでしたから。車だってしゃべりますし……」

「む？　車というのは……馬車のことか？　馬車が話すというのは……うむ、想像がつかんな……」

この王様は何か大きな間違いを犯している気がする……

「ふむ、勇者の国は愉快なところだな。また後日話を聞かせてくれ」
「はい。多少ならば」

僕から日本の事を聞けると聞き、機嫌がよくなったのかにこやかな表情を浮かべる王様。

『楽しそうな所悪いのだけれど、そろそろ次に移らない？　ワング？』

「おお！　そうだったな。では勇者、エクスカリバーを手に取り鞘から抜いてくれ」

王様の言うとおりエクスカリバーを手にとると、先日持った木剣と違い金属特有のずっしりとした重さが手にのしかかる。

固唾を飲んで周りの人間が俺を見ているのが分かる。ただ剣を抜くと言う動作がそれほど珍しいのだろうか？

キンッ！

剣は簡単に抜けた。

刀身をすべてさらすと、金属なのか疑うほど白く染まっていた。シミや傷ひとつ無いそれはそれはきれいな刀身に思わず見とれてしまう。

おおおおっ！

玉座の間から感嘆の音が響く。

見ると、一様に驚きの表情を浮かべる王様を含んだ要人たち。

「あ、あの……何か問題がありましたか？」

心配になってきた僕は王様に聞いてみた。僕は何か抜いちゃ行けない物を抜いてしまったのではないだろうか。

「む……い、いや。エクスカリバーを抜いたときにあまりに何も無いので逆に驚いてしまったのだ」

……？

まだ分からない。結局の所どういう訳だ？

「聖剣を抜けるのは選ばれし人間だけなんだ、勇者殿。ここ五百年抜いた者は一人としていない」

ゲイルが説明してくれた。要人たちの前なので僕のこととは勇者殿と呼んでいる。

「選ばし者……か、あまり実感はわかりませんが……」

「そうだな……少し肩すかしだったが、ともかく彼女が三人目のエクスカリバーだ。よろしく頼む」

三人目……………実質二人じゃないか!!!

第七話　なんだか……

「しかし陛下……エクスカリバー殿を含めても三人というのはいささかな過ぎるのでは無いですか？」

『あら？　私のことは呼び捨てでかまわないのよゲイル君？』

僕の気持ちを代弁してくれているゲイル。しかし、そんなことは問題にならないかのような口ぶりで、ゲイルのエクスカリバーの呼び方をのほほんと訂正した。

「う、うむ……確かに我も軍団規模を指揮してもらうつもりだったのだが……」

と、チラツとサテレスの方向を見る王様。

「私が反対いたしました」

サテレスがシラつと言った。その目は僕をあからさまに侮蔑しているものだ。

「妾はその理由を会議の場で聞いておるが、勇者とゲイルにも説明していただけるか？」

「ふー………良いでしょう。簡単に言うと、政治的理由とでも言いましょうか。……現在我らが人族の筆頭であるモントウ王国騎士団は魔軍に対して劣勢であります。もちろん、栄光ある騎士団がこのまま負けることはございませんが、噂が民達に広がってしまうと不埒にも王国に対して疑念を抱く者達が出てきます。さらに勇者な

どと言う王国の外部の人間が戦況を好転させてしまえば、戦争に勝つことができても民達の目は勇者に向いてしまう。そうなれば戦後、王国の威光を保つことが困難になります」

……要約すると、

「私が活躍すること自体が問題だと？」

「勇者には悪いが、サテレスの言っていることは国を治める立場としては正論なのだ。ただ魔軍を倒す。だけではなく、その後どうやって国を安定させるのかと言うところまで考えねばならん」

いち高校生には分からないが、政治を行う人間からしたら複雑な事情があるのだろう。」

「それに加え、勇者が召喚されたこと自体、城の人間と、戦場の指揮官以外には伏せることとします」

「だが、勇者殿ほどの実力ならばいずれ武勲を立て、民達にも噂は広まるのではないか？」

ゲイルの言うとおり、僕は最低でも戦況を変えるほどの活躍をしなければならぬらしい。そうなれば、いくら秘密にしても広まることは止められない。」

「確かに、勇者が戦場に立てばそう遠くないうちに噂は広まるでしょう。そのことに関しては止めようがありません。私が言いたいの、は、勇者にはあくまで騎士団を補佐する。という立ち位置でいてもらいたいと言うことです」

「主役はあくまで騎士団……と言うことですな」

「そうだ。理解が早くて助かるよ勇者」

言葉の意味合いとは違い、皮肉めいた口調と表情で僕を見るサテレス。

「大丈夫だマモル。少数とは言ってもゲイルがついているし、遊撃隊として敵を攪乱させれば良いんだ。簡単……ではないが、マモルならきつとできる！」

その自信はどこから来るのか分らないが、シルフィが期待のまなざしで僕を見ている。

「シルフィ様の期待は嬉しいのですが、騎士団が手こずるほどの魔軍を私がどうこうできるのでしょうか」

日本人らしく謙遜してみる。サテレスの信条にも配慮し、どの程度かも分からない騎士団を持ち上げておくのも忘れない。

「ふん、全世界の7割を支配し、王国騎士団でさえ手こずっている魔軍相手に貴様ごときでどうにかできるとははじめから思っていない」

逆効果でした。

先ほど王様が言っていたが、この世界では日本と違い謙遜という物をあまり使わないようだ。

「サテレス、嫌味はその辺にしておくがよい。……すまぬな勇者。サテレスも度重なる実務に少々気が立っておるのだ」

気が立っているから……と言うレベルでは無いのだが、「気にしてありません」と流しておく。

サテレスとの間に争いを起こしてもなんの生産性も無い。

「おお！ そうだ。先ほど申したとおり、この後勇者の国について教えてはくれぬか？ 酒でも入れて……」

「駄目です陛下。この後は二十日後に行われる諸外国との合同会議についての話し合いがございます。さあ参りましょう」

期待に胸を躍らすといった様子で僕を誘った王様だったが、サテレスの冷淡な口調に圧され渋々玉座の間を後にした。

「だけど、それほどすごいものなのかい？ 魔軍というのは……」

玉座の間を出て部屋に戻るまでの廊下、聞きそびれていた魔軍の事についてシルフィに尋ねる。先日シルフィから簡単な説明は受けていたのだが、大ざっぱにしか聞いていなかったため、実のところよく分かっていない。

「ふむ。この前話したとおり、魔軍というのは魔王『レディトウス』が率いている軍隊のことだ。軍隊のほとんどが魔物で構成されており、指揮をとっているのは少数の魔族という物らしい」

「らしい、というのはなんだか引かかるね。何かあるのかい？」

「いや、単純に見たことが無いと言っただけだ。昔読んだ絵本にはこの世の物とは思えない異形の姿をしているとか……ゲイル、そなた

は見たことがあったのだったな？」

シルフィがゲイルへと話を振る。

移動しながらであったため、目は合わせず歩き続けている。

「そうだな……私が東部戦線で戦った時に何度か目撃した。遠目だったが、見た目は人族とさほど変わりなかったと思うな」

「変わらない……のか。想像ではおぞましく汚らしい姿をしていると思うっていたのだが……」

ふむふむ、とあごを押さえ考え込むシルフィ。

『シルフィの考えは今の王国の人間の大多数のそれと同じじゃないかしら。できる限り敵方を恐ろしく見せることで戦意高揚させようとしてるのね』

エクスカリバーが言うとおりならば、この国なりの宣伝戦プロパガンダという物だろう。この手の情報操作は単純がゆえに効果も高い。

「うーん……戦意高揚って言うのは分かるけど……じゃあ、この戦争ってどこまで行けば終わるんだい？ 世界の7割が敵方にあるのなら完全に降伏させるなんてできないんじゃないか？ それとも、どこかで停戦するとか？」

王様は戦争が終わった後のことまで考えていた。だが、どこで終わりののかはまだ聞いていない。

相手を屈服させるかさせられるか、という単純な物でもないだろう。だが、僕のこの言葉にシルフィとゲイルは意外にも驚いた表情を浮かべた。

「む……？ 戦争が終わる？ うーん…そもそも、この戦争は終わるのか？」

「確かに、二千年近く続いてきた戦だ。終わると言われても想像がつかないな。陛下やサテレス殿は国を動かしている以上、そう言ったことも考えるのだろうが……」

「に、二千年！？ そんなに続いてるのかこの戦争は！？ な、何が原因で？」

二千年と言えば、元の世界では文明が形をなしてきた頃だ。そんな昔からやっているなんてはつきり言って異常だ。

『私も八百年くらい世界を見ているけど、戦争が始まった原因については知らないわね。伝承だと、二千年前には世界の1割にも満たなかった魔族が人族や獣人族ビストロイドの土地に侵攻してきたと書かれてるけど……』

……… 八百年？

はあ（溜息）

なんだか、ファンタジー過ぎて俺がおかしくなったように思えてきたな……

「だが、妾達が考えるようなことでもないのではないか？ そう言ったことは陛下やサテレスが考えてくれているだろう」

…… あれっ？ なんだかシルフィが雄一とかぶってしまった。

ポジティブというか、すぐに考えることを止めるところが……もしかしてこの子も頭がアレな人なんだろうか……

「なんだろう？ マモルが妾のことを侮辱している気がするのだが

.....

第七話　なんだか……（後書き）

なんだか護ルートがグダグダになって参りました。

まあ、本編である雄一ルートも読みやすいと言っわけではありませ
んが……

ただ、今後の展開上護ルートは必須であるため、できる限り筋の通
った話にしたいかと………頑張っていきます!!

第八話 チート能力

シルフィがジトつとした目で俺を見ている。

心の中で雄一とシルフィを同一視したただけなのだが、僕の表情から考えを読み取ったのかシルフィはとても不機嫌そうだ。

君は雄一の事を知らないはずなんだが……

「ま、まあとにかく……この後はエクスカリバーの慣らしをするんだったよね？」

「む、そうだな。エクスカリバーのならしと、魔法の基礎について学んでもらうつもりだ……いやそれよりもさつきは……」

「はっはっは、じゃあ早速訓練場に向かおうか。エクスカリバー、よろしく頼むよ」

『あらあら、こちらこそよろしくねマモル君』

シルフィの言葉を最後まで聞かず、エクスカリバーを持って足早に部屋を出た。

まったく……言葉にも出していないのになんてカンの鋭い子なんだろうかシルフィは……

訓練場に着くと昨日とは打って変わってほとんど訓練をしている兵士がいなかった。

木人形に打ち込みをしている兵士が一人だけだ。

「やけに人が少ないなあ」

「ああ、昨日は合同訓練があつたからな。いつもはこの程度だ」

まあ、通常の勤務もあるのだから常に訓練場にいるわけではない。だが、真つ昼間に訓練をしているのが一人というのはどうなのだろうか……

「人が少ないのならちょうど良いわね。少し模擬戦闘でもしてみましようか」

「ならば私が相手をしよう。マモルはエクスカリバーを使うのだからこちららも真剣を使つても良いか？」

「もちろん。そうじゃないと死んでしまうわ」

ゲイルが携えていた剣を抜く。

エクスカリバーよりも一回り大きいバスタードソードと呼ばれる剣だ。

「ちょっと待ってくれゲイル。まさか本当に真剣でやり合うつもりか？ 危険すぎるだろ」

「当然だろ。エクスカリバーを使わないと慣らしにならないからな」

エクスカリバーのならしと聞き、やるのは素振り程度だと思っただけに真剣で模擬戦闘なんて怖すぎる。

「大丈夫よ。死人なんて出ないから……少なくともマモル君は」

「それってゲイルは死ぬかもしれないって事じゃないのか!？」

「まあまあモル。昨日も戦ったんだからお互いの動きは覚えているだろ。怪我をしないように手加減し合えばいい」

確かにゲイルの言うとおりではある。

手加減をすれば模擬戦闘といえどもただの訓練だ。……だけど不安はどうしても残る。僕は真剣を使った事がそもそも無い。施設にいた頃、糸田先生の日本刀を触らせてもらった事はあるが、危険と言うことで振らせてはもらえなかった。つまり、真剣での訓練など初めてと言うことだ。

「いざとなったら妾が止めに入ってやる。心配するな」

僕が不安がっているのを察したのかシルフィが言った。

……正直シルフィが止めに入ってもどうしようも無いと思うが……

「細かいことは気にするな。さあ、モルから打ち込んで来て良いぞ?」

そう言つて剣を構えるゲイル。

『とにかくまずは何も考えずにゲイル君に斬りかかってくれる?』

……あつ、一応本気でね』

こっちの都合はお構い無しか!!

………まあいいや、本気で斬りかかった所でゲイルの実力なら十分防衛できるだろう。昨日も結局一撃も当ててすることはできなかったのだし。

「じゃあ胴に斬りかかるから適当に捌いてくれ」

「了解した」

了承を得るとエクスカリバーを構え、ゲイルへと突進した。
こちらの世界に来て身体能力が格段に上がっているため体は驚くほど軽い。

ゲイルに向かっていく途中、何か違和感を感じた。

ゲイルがまったく動いていないのだ。具体的には剣を構えたまま防御姿勢に移ろうとしない。このまま胴に打ち込めば確実に上半身と下半身が分離してしまう。

慌てて剣のスピードを緩める。

その段階に来てようやくゲイルが反応を見せ、防御をしようとした。だが時すでに遅く、僕が持っているエクスカリバーはゲイルの胴へと達していた。

もちろん、振り抜くわけにもいかなかったため、寸止めにとどめた。

「えっと……隙……有り……？」

「……………っ!!」

ゲイルが目を見開いて驚いている。

……なんの茶番だろうかこれは…

『ふふふ、どうかしら？　これが私の能力なんだけど』

「能力？」

「そ、そうか今のが有名な『聖剣』の能力……「疾光」か。妾も初めて見たぞ」

「疾光」？

また何とも漫画に出てきそうなネーミングだな…

『光の速さで動くことができる能力……まあ、実際は光のような速さで動くことができる能力なのだけれど、どうかしら………気に入っ

た？」

気に入ったも何も状況がうまく飲み込めていないけど……そもそも常識的に考えて光のような速さで動く事なんて不可能だ。

ファンタジー世界であろうとも、物理法則には逆らえない。光並の速さで動いたりしたら、摩擦で体がばらばらに吹き飛んでしまうだろう。

つまり、光の速さはしかり。光のような速さで動いていると言うのも間違いだ。

実際は人間に知覚できないギリギリの速さで動いていると言うものだろう……けどそれでも十分すごすぎるか……

「まあ、気に入ったというか……先に言ってももらわないと……危うくゲイルを殺す所だったよ」

『あらあらごめんなさい。でも、無事だったのだから良しとしましよ』

エクスカリバー。君は口調は淑女だけど、腹の中は真っ黒なのかもしれないな……

「それほど速いのなら敵はいないも同然だな。……そう言えば、エクスカリバーにはもう一つ能力があるのではなかったか？」

『確かにもうひとつあるのだけれど、ここでは試しようがないし……

……また今度ね』

ゲイルが言うにはもうひとつ能力があるらしい。今でも十分すぎるほど無敵な感じがするけど……

『今日のところはこのぐらいにしときましょう。急激に能力を使ってしまうと反動もあることだし』

「なら次は魔法だな！ ふふんっ……マモル。ここからは妾が教えてやろう」

急にテンションが上がりだしたシルフィ。

「教えるって……シルフィが？ てつきりゲイルに教わるのだと思っ
っていたけど……」

「聞いて驚け。妾は齡16にして魔導師の称号を持っているのだ。
他人に教えることに関しては何の問題もない。さあ！ 手取り足取
り教えてやるぞ！？」

テンションが変な方向に……

「わ、分かったよ……けど、魔法を教えてもらうのにこんなに近づく
必要があるのかい？」

気がつけばシルフィは僕の顔に息がかかるほど近づいていた。
シルフィもそれに気づいたのか、あわてて僕から距離を取る。

「そ、そうね……こんなに近づく必要は……ゴホンッ！ まあとにかく、
まずは基本の呪文から教えるぞ？ 本来ならば私の指輪のような魔法具が
必要となるのだが……エクスカリバーは魔法具としても使えるのだっ
たな？」

シルフィの人差し指には宝石がついた指輪がはめられている。どう
やら、それがないと普通は魔法が使えないらしい。

『ええ。問題ないわよ』

「ならばまず小さな火を想像してくれ。そしてそれを手のひらに灯
すように思い浮かべ、灯れと呪文lighteraを唱える」

シルフィが見本として呪文を唱えると、拳大の炎が手のひらの上に灯った。

「おお！　すごいな……」

実は異世界に来てから魔法らしい魔法を見たのは初めてだった。ゲイルの身体能力強化の魔法は見た目としては何も変わらなかったし、シルフィの暴走したときに放たれた爆発魔法は見る前に気絶してしまった。

何の道具も使わずに炎を起こすというのはなかなか感動できるものだった。

「始めはろうそくの火ぐらいを灯せば十分だから、失敗は気にしなくてもいいぞ？」

「よし、分かった。えーと……灯れ！」
litttera

自分が魔法を使うのだと思うと、少し興奮した。だが、呪文を唱え終わるとその興奮は即効で消え去ってしまった。

「おおおおおっ！！！！」

ろうそく大の火を思い浮かべていたのだが、その予想は大きく裏切られ、手のひらには到底収まりきらないほど巨大な炎が出現し、隅で訓練していた兵士の木人形へと飛んでいった。炎に包まれた木人形はたちまち消し炭になってしまった。

「えーと……ごめんなさい」

とりあえず謝るしかなかったが無かったが、これって不可抗力ですよ！？

わざとじゃありませんからね！？

第九話 鈍感キャラ（前書き）

第八話の最後を修正しました。

護君は土下座ってキャラじゃありませんね、雄一君と混同していません……

第九話 鈍感キャラ

「す、すみません！！ 大丈夫ですか！？」

意図した物でなかったにせよ、木人形を消し炭にしまい、訓練をしていた兵士が呆然としている。

慌てて駆け寄り、頭を下げるのだが兵士の近くに来てみると気付いた。

兵士はまったく動じていなかったのだ。

呆然としていたのではなく、目の前で起こったことを異常なまでに冷静に観察していた。

僕が頭を下げると俺の方をギョロツとした目で一瞥すると、その兵士は足早に訓練場を後にした。

失礼かもしれないがかなり不気味な雰囲気な兵士だった。

「な、なんだったんだ… 今のは……」

「それはこっちの台詞だー！！」

シルフィが金切り声を上げる。

それはもう…… 城中に響き渡るような大きな声だった。

「マモル！ なんだ今のは！ 初歩の呪文で何で中級魔法並の爆発が起きるのだ！ マモルは魔法を使ったことが無かったのではないのか！？」

「そ、そんなこと言われても…… 僕はただ言われたとおりに……」

「だから！ それでなぜあのような事が起きる！！ これでは…… むがつ……！！」

「はいはい、シルフィ様。それじゃあ話が前に進まないぞ？」

シルフィが繰り返し同じ内容の怒鳴り声を上げたため、ゲイルがシルフィの口をふさぎ止めに入ってきた。

シルフィがゲイルの腕の中で暴れている。

「マモル。シルフィ様の言うとおり、今はあまりに強力過ぎる。わざと……と言うわけでは無いんだな？」

「むがっ！ むぐ……っ！！」

「ああ。不可抗力だ」

「むぐご！ むぎっ！！」

「うん。なら問題ないな。マモルが強ければそれだけ戦いも楽になる。魔法は追々慣れていけば良いさ」

「むぐぐぐっ……………（ブチッ）…………ふんっ」

ドスッ！！

訓練場に鈍い音が響き渡る。

見ると、ゲイルの顔色がだんだんと青色になっていった。

原因は……言わずもがな…シルフィのハイヒールがゲイルの足に突き刺さっていた。

ちなみに、普通の鎧ならばハイヒールごときは防げるのだが、今ゲイルが来ている鎧は礼装用の派手な物だ。戦闘を考えていないため、所々隙間が空いている。

と、なんの意味もない鎧の説明が走馬燈のように頭をよぎった。身の危険を感じるほどシルフィから殺気がみなぎっていたからだ。

「ぶはあっ！ ……息ができないだろうこの馬鹿者！！」

よかった。この殺気は俺に向けられた物ではなさそうだ。

だが、ほっとしたのも束の間、シルフィの目が折れに向けられた。

「マモル！　なぜそなたはこうも……………せつかく妾が……………」

怒号が飛んできると思いきや、なぜか細く、若干泣いているかのように声が震えていた。しかも顔をうつむかせているため、実際泣いているようにも見えた。

「あ、あの…シルフィ……………さん？」

おそろおそろ声をかけてみると、うつむいていた頭を上げ、キッと俺を見ると

「とにかく！！　城の中では魔法の使用は禁止だ！！……………ま、マモルの馬鹿……………！！」

最後になぜか僕に罵声を浴びせかけ、訓練場を飛び出していった。

『あらあら、青春ねえ』

「アタタタ……………そ、そうだな。私はとばかりだったが……………」

「あれっ！？　今の状況が理解できていないのって僕だけ？」

エクスカリバーとゲイルの口ぶりからすると、二人は現在の状況が理解できているようだった。

『それは……………ねえ？　うふふ』

「それは……………なあ？　ふっふっふ」

「な、なんだよ二人して気持ち悪い……………ともかく、僕はシルフィが心配だからちよっと追いかけてみるよ。悪いけどこの片付けはお願いして良いかな？」

ゲイルは快く了承し、エクスカリバーを預けると僕はシルフィの後を追った。

「シルフィ！」

しばらく走っていると、シルフィに追いつくことができ、後ろから声をかけた。

シルフィが振り向くと、気まずそうな表情で僕をみている。

「あ……マモル……」

「その……さっきはごめん!!」

とりあえず頭を下げた。

正直、なぜシルフィが怒っているのかは分からないのだが、僕が原因で怒らせてしまったのは間違いない。

「な、なぜマモルが謝るのだ？」

「えっ？ でも、僕が魔法を使ったせいで怒ってるんじゃない？」

「む……違う。さっきのは……妾のわがままだ」

「わがまま……？」

「……そうだ。妾は……ま、マモルに魔法を教える事を楽しみにしておったのだ！」

シルフィが恥ずかしそうに言い放った。
ああ、少し分かったかもしれない。

「わ、妾がマモルに教える事ができるのはこの世界の事だけなのだ。だが、マモルは頭が良くて教えたことはすぐに覚えてしまう……後は魔法だけだったのに……」

シルフィが目には涙をためている。

恐らくこの子は自分に対して怒っていたんだろう。

僕に何も教えてやれない、してやれることは無いのだと……

「このままではマモルに見てもらえなくなるのではと……」

「シルフィ」

シルフィの涙声の言葉を遮り、視線を合わせるために跪いた。

「僕は君に感謝してるよ？ この世界に来てからいろいろと気を使っ
てもらって……」

「でも……妾がしてやれることはもうほとんど無いのだぞ？」

「そんなことは無いさ。君といると楽しいし、これから一緒にいたいと思うよ」

「……………っ！ ほ、本当か！？」

シルフィに笑顔が戻った。ためていた涙もいつの間にか引いている。

「うん」

「わ、妾とずっと一緒にいてくれるのか？」

「うん」

「妾の事をずっと見ていてくれるか？」

「うん。今もこうしてシルフィの顔を見ているよ?」

「……………は?」

「……………ん?」

シルフィが首をかしげる。

それにつられて僕も首をかしげた。

……………なにかおかしかっただろうか……

「い、一応聞いておくが……………今は恋人にささやくような意味合い
であろうな?」

「ん? なんの話だい?」

……………

二人の間に沈黙が流れた。

「……………ん」

「あつごめん。もう一度言ってくれるかな」

僕が聞き返すと、それはそれは恐ろしい形相でにらみつけられ、

「このっ……! 鈍! 感! ……」

小柄な体からは到底想像のつかないような重い右ストレートが僕の
顔面へと吸い込まれた。

こうして、二日連続で同じ人物に気絶させられ一夜が明けるとい
理不尽極まりない状況が生まれたのであった。

…………… 本当に僕、なにかまずいこと言ったのかなあ？

第十話 襲撃

「先日より、要請されていた勇者の街への外出許可だが……………大丈夫か？」

「……………はい。なんとか」

晴れ上がった頬を押さえ、僕は言った。

僕を敵対視しているサテレスにまで心配されてしまった。よっぽどひどく腫れてしまっているのだろう。

「あ…………ゴホンツ。ともかく、この許可証を門番に見せれば通してもらえるはずだ」

そう言って、一枚の紙を折れに渡すサテレス。紙にはサテレスの署名が書かれていた。

「これで用は済んだだろう。さっさと部屋から出て行け。私は忙しいのだ」

語気は敵意丸出しだが、忙しいのは嘘ではなさそうだ。執務室の机の上には、山のような書類が積み重なっている。

僕の外出許可を取るのが三日もかかったのも、嫌がらせではなく本当に忙しかっただけらしい。

「うむ。サテレス殿の嫌味は置いといて、早速街に行くでしょう。妾も準備をしてこなければな」

「ああ、シルフィ様は駄目ですよ。残って下さい」

「むっ？　なぜだ！？」

「……あなたはもう少し御自分が王国の姫君である事を自覚して下さい。勇者が現れてからというもの、御自分のお仕事をなさっていないでしょう？」

サテレスの言葉がシルフィを襲った。どうやら、仕事そっちのけで僕の世話をしてくれたいらしい。

「ぐっ、し、しかし妾は陛下よりマモルの世話役を頼まれているのだ。街の案内をするのも……」

「陛下の事をおっしゃるのなら、なおさら行かせる訳には参りません。貴女になにかあれば、母君やお姉様方に申し訳が立ちません」

シルフィの母親や姉達の事を言われると、急にシルフィは黙ってしまった。

そう言えば、シルフィの肩書きはモントウ王国第三王女だったな……
…と言うことは最低でも二人の姉がいるはずだ。

シルフィの姉達だけではなく、母親にも会ったことはなかったか……

「大丈夫ですシルフィ様。このゲイルが、勇者殿をお守りしてみせます」

自信満々に言い放ったゲイル。

確かに、ゲイルほどの腕の人間が守ってくれるならこれほど心強いことは無いだろう。

だが、

「いえ、トントロス公にも残っていたたく。今日中に確認してもらいたい書類があるので」

「なっ！？」　ならばマモルの護衛は誰がするのだ！？　マモルに何

かあればそれこそ問題だろう!!」

シルフィが怒鳴る。

「一応、勇者には護衛をつけさせます。……おい、入れ」

サテレスが合図をすると、執務室の扉が開き、外から一人の兵士が入ってきた。それも少し見覚えがある人だった。

「……近衛騎士団………アーク………です」

確か、僕が魔法を使ったときに訓練場にいた兵士だ。

あのときは目をギョロツと大きく見開いて少し不気味だったが、今は半開きの状態で、印象としては少し暗い感じがする僕とさほど歳の変わらないような少年だ。

「彼が勇者の護衛役を務めるアークだ。私の元でも何度か働いた事があるが、なかなか優秀な男だよ」

サテレスが他人をほめるのであれば相当有能な兵士なんだろう。

「えーっと、アーク君で良いかな？ 僕はマモルだよろしく」

握手のために手を差し伸べると、コクツと頭を下げ、握手をしたくれた。

第一印象はあまり良いものではなかったが、素直そうないい人のようだ。

「.....」
「.....」

アーク君の案内で僕は今街に出てきている。
雄一を捜すことが目的なのだが.....

「.....」
「.....」

き、気まずい.....

さつきからアーク君が一言もしゃべってくれない。
雄一をどうやって捜すのか、方法を聞きたいのだが.....

「あー...あの、アーク君？」

「.....なに？」

「えっと...今日は人を探しにここに来たんだけど、何か良い方法はないかな？」

.....

.....無視か.....

「……………それは……勇者様……………知り合い？」

「え？ あ、ああ。そうなんだけど……………」

「……………」

「……………」

か、会話が続かない……………」

『あらあら。会話が続かないわね』

ぐっ！ エクスカリバー、言いづらいことをさらっと……………」

「……………人探し、ギルドで……………やってる……………」

「ギルド？」

「……………依頼……………出す……………受付……………で……………」

確か、ギルドは様々な依頼を請け負う万屋のような物だったか……………」
人探しもそこでやってくれるらしい。

「じゃあ、そこに連れて行ってもらえるかな？」

「……………（コクッ）……………」

無言で頷くと、再び沈黙の行進が続いた。

「……………」

「……………」

やっぱり気まずいなあ（泣）

雄一といたときは話題に事欠かなかったのに……………」

……… 良く考えてみれば、雄一を見つけたとしてもどうすれば良いんだろう。

二人で元の世界に戻る方法を考える？

確かに、できるのであれば僕も元の世界に戻りたい。当然だ。

だが、勇者としてこの世界に派遣され、なし崩しであったが勇者としての使命を請け負ってしまった以上、それを投げ出して変えることはできない。もちろん、事が終われば戻る方法も探すべきではあるが……

雄一も一緒に遊撃隊に参加してもらおう？

これはまあ、あるかもしれない。

雄一ほどの腕なら確実に戦力になる。シルフィに追い出された事も雄一の性格上、それほどは気にしていないだろう。「別に気にしてねーよ」と、笑って済ませてくれそうだ。

うん…… まあでも……… ムリか……

「面倒くさがるだろうからなあ………」

『あら？ なんの話？』

最後の言葉は口に出してしまっただけだ。エクスカリバーが尋ねてきた。

「ああ、雄一の事なん……… だけど……… あれっ？」

いつの間にか周りには俺とアーク君を除いて人がいなくなっていた。僕は大通りにいたはずで、そこにはつい先ほどまで大勢の人が行き交っていた。急に誰もいなくなったのはどう考えてもおかしい。

「エクスカリバー、これって………」

『恐らく……… 人払いの術ね。これほど大規模なのは珍しいけど………』

「……………例の僕を狙っている暗殺者ってやつか……………アーク君！
気をつけ……………っ！」

襲撃者が来ると予想し、アーク君に注意を呼びかける。だが、その必要はなかった。

アーク君が僕の方に振り向くと、訓練場で見せたギョロッとした目で俺を見つめ、殺気を放っていたからだ。

「……………参ったな…僕は気配とかが分かる人間じゃなかったはず
だったんだけど……………」

アークから放たれている殺気とは別に、周りから大量の視線が僕に注がれているのが分かる。

恐らく数にして四、五十人。

全員が僕に敵意を向けているのは間違いないな…………

「アーク君……………いや、アーク。これは君がやったことだね？」

エクスカリバーに手をかけ、いつでも抜けるようにしておく。

すると、アークがギョロッとした目を僕に向け、無表情のままつぶやいた

「……………殺せ」

それが合図だったのか、気配だけだった人たちが一斉に姿を現した。しかも、いつの間にか僕の背後には身の丈が2メートル以上にもなる男が巨大な斧を振り下ろそうとしている。

「むっんー!!」

巨漢の男が斧を勢いよく振り下ろした。

斧は土をえぐり、地面に大きな穴を開けていた。しかし、その斧は僕に当たることはない。

エクスカリバーの能力によって極限まで引き上げられた俺のスピードは、斧の軌跡を目で追いつつ、完全に躲していた。今は屋根の上に避難している。

下を見下ろすと、見えるだけでおよそ三十人のフードを被った人たちが僕を見上げていた。

「弓矢隊！ 構え！」

間髪入れずに別の男が指示を与える。すぐさま五人の男達が僕に弓を構える。

「*ventus desit hostiis est a*
風は敵を逃さず射る物なり」

指示を出した男が呪文らしき言葉を口にする。

すると、弓矢が一斉に僕に向かって飛んできた。しかもすべての矢が誘導されているかのごとく僕に向かってくる。

「ふっ……！！」

恐らく魔法で操作されているのだろうが、動体視力も上がっている僕には関係が無く、すべて剣ではじき落とした。

だが驚いたことに、はじき落とした矢が再び僕を襲った。ほとんどは折れて、矢としての機能が使えない状態にももかわらずだ。

しかも、敵は第二射、第三射と矢を放っている。

「くそ！ 灯れ！！」
littera

しつこい矢に対し、僕が唯一覚えた魔法をかける。本当はこぶし大の火をおこすだけの呪文らしいが、僕の場合消防車が駆けつけるほど大きな炎を生み出した。

結果、矢はことごとくが消し炭となった。

その光景に矢を放った男たちは仰天している。だが、驚く暇は与えない。

鬱陶しい矢が無くなると同時に、弓を構えている男達に剣を振るう。鞘から抜いていないため、打撃技として男達を襲う。

あっという間に五人の暗殺者を倒した僕にためらいつつ、他の者達がさらに襲いかかってくる。

短剣

槍

斧

トレンチナイフと呼ばれる、軍用の珍しい武器等々……

ともかく様々な武器で僕を殺そうとする。一人一人がかなりの手練れであったが、色々な事情で身体能力が上がっている僕はその悉くを躲し、返り討ちにした。

Nullia aqua non penetrare
「氷弾は鉄をも貫く！」

先ほど矢に魔法をかけた男が再び呪文を唱える。

すると、男の目の前に小石ほどの大きさの氷が漂い、発射された。

先ほどの矢よりも数段速く弾丸のような氷、しかも僕の顔面に正確に突き刺さろうとしていた。

だが、それもギリギリのところであるが、躲すことができた。

「……なっ!？」

まさか避けられると思ってもしなかった男が驚きの表情を浮かべている。

確かに、弾丸を意図的に避けられるとは思わないだろう。元の世界でそんなことをできる人間がいたなら見てみたいものだ。

「はあっ！！」

剣を構え、次は魔法をかけた男を倒そうとするが、その瞬間、僕の首元にナイフが迫ってきていることに気がついた。
僕の死角をを突いた絶妙な攻撃だ。

「うおおおお！！？」

とつさに首を横に移動させ躲した。だが、完全に躲せた訳ではなく、僕の頬には一筋の傷ができた。幸い浅い物だったため、痕も残ることとは無いだろう。

九死に一生を得た僕は、肩越しに飛び出ている腕を掴み、地面を転がる形で関節技へと持って行った。

「……………ぐっ……………！」

地面に押さえつけると、その男は僕を案内してきたアークだった。

「おまえ達は何者だ！　なんの目的で……………」

ピ……………！！

アークを押さえつけていると、先ほど魔法を使っていた男が指笛を鳴らす。

すると、その瞬間から他の男達が戦闘姿勢を解き、撤退をし始めた。どうやら撤退の合図だったようだ。

しかも、僕が気絶させた男達も抱えての撤退だ。恐らくは情報を僕に与えないようにするためだろうが、あいにく僕は今アークを押さえつけている。情報は彼から聞けばいい。

「さあ、アーク。味方は君を置いて逃げて行ったよ？ 何が目的か話してくれないか？」

「……………」

だんまりか……………まあさすがに簡単に情報が手に入るとは思っていなかったけど……………

『あらあら、話さないのなら指を順番に折っていこうかしら』

エクスカリバーさん！ 黒い発言は自重して下さい！！

「あ……………エクスカリバーはともかく、僕としても手荒なまねはしたくないんだけど……………」

「……………いい」

「ん？」

「命令……………殺す……………しない」

……………？ どういう事だ？

「君たちは僕を殺しに来たのでは無いのか？」

「……………勇者……………殺さない……………もう一人は……………殺す」

「もう一人？ なんのことだ？」

僕がアークの言葉の意図を聞き返すと、アークの表情がだんだんと

不気味な笑みへと変わっていった。先ほどまで無表情だったため、その不気味さは異常だ。

「勇者……親友……二人……出会えば……殺す」

親友……？ 親友ってまさか……

「雄一のことを言っているのか！？ 何で雄一のことを知っている！ 脅しのつもりか！！」

「……ふは……ふは……！！」

アークが声を上げて笑い始める。その態度に僕は憤慨するが、すぐに目の前の光景によって驚きへと変わった。

アークの顔がまるで砂のように変化し、崩れてしまったためだ。

「な……っ！ なんだこれ！？」

『これは……っ、身体変化の禁忌呪文！？ なんて無茶なことを……！！』

みるみるうちにアークの体全体が砂となり、風に乗って飛んでいった。

それと同時に周りに人が集まり始めた。人払いの術とやらが消えたのだろう。

「くそ……っ！ なんだったんだアレは！」

状況があまり理解できていない僕は、八つ当たり気味に地面を蹴り上げる。

すると、なぜか足下がふらつき、尻餅をついてしまった。

「あ、あれ……?」

立ち上がるうとするも、強烈なめまいが僕を襲う。

『あらあら、さすがにこれだけ動くと反動が来ちゃうわね』

「は、反動?」

『前にも言ったでしょう? 「疾光」を使いすぎると反動があるの。あれ、燃費があまり良くないのよねえ』

そ、そう言うことは早めに言ってくれと助かるんだけどなあ……

あまりのめまいに道の真ん中でうずくまる僕。

すると、それを見かねたのか一人のふくよかな女性が声をかけてきた。

「あらまあ、どうしたんだい? こんな道のと真ん中で」

薄れゆく意識の中、僕は一言だけ発することができた。

「お、お腹すいた……」

第十話 襲撃（後書き）

トレンチナイフとは軍用の格闘戦に向いたナイフのことです。

番外編 暗殺失敗（前書き）

短めの番外編です。

今回分かりましたが、ルビが苦しいです。

番外編 暗殺失敗

大通りから外れた場所にある広場。そこに五十人ほどのフードを被った男達が集まっていた。

僕を含めた暗殺者達全員だ。

「くそっ！ 勇者め……まさかあれほどは……」

「しかし隊長。これからどういたしますか？ 人払いの術を行っていた物達も撤収させましたが……」

「……… ありのままを報告するしかあるまい…… 幸い、我々の素性は勇者にはばれていないだろう。アーク、お前も余計なことは言っていないだろうな？」

この集団の隊長を務めている男が僕に尋ねる。

普段は近衛騎士団で働いているなかなか腕の立つ人だ。直属の上司であり、色々と面倒を見てくれるいい人である。

「……………（コクッ）」

とりあえず頷いておく。実際は作戦上必要の無かった情報を勇者に与えているのだが、それは黙っておく。

「よし。けが人の手当をしたらすぐに城に戻るぞ！ アーク、お前も手当を手伝ってやれ。それと……さっきの奇襲はなかなか良かったぞ。もう一人前の騎士だ」

そう言っただけで俺の頭をなでる隊長。

ああ、そうだ……この人はいつだって僕をほめてくれる。

強力な魔法を使えたら褒めてくれる。

任務に初めて成功すればお祝いしてくれる。

最近では隊長の家族にも紹介してもらった。美人の奥さんにかわいらしい娘さん。娘さんは先日五歳の誕生日を迎えたそうで、その誕生日会にも呼んでくれた。

隊長も、隊長の家族も、とても僕に良くしてくれる。本当に優しい家族だった。

だがそんなことは関係ない

Donne c
ve lli m
a r s h
r e e g e m
c a a p t u m
p r a a e d d a a e
「沼地の王は獲物を捕らえ逃がさない」

誰にも気がつかれないほど小さく呪文をつぶやく。

目には見えないが、腐敗したようなにおいがあたりに立ちこめる。

「ん？ なんのにおいだこれ？」

何人かの隊員が異臭に気がつき始める。だが、そのときにはもう遅かった。

「あれ？ ホントだ。……なん………だ？」

異臭に気がついた者から順にバタバタと倒れ始める隊員達。中には泡を吹いている者達もいる。

「うがっ……」「うげえっ」「がはっ」各々がうめき声を上げる。誰も彼も自分に何が起こったのか分かっていない様子だ。当然隊長も例外ではない。

「な、なんだ……これはっ………アークっ………」

倒れた隊長が俺の足を掴んでくる。この中で唯一無事にいる俺に助けを求めているのだろう。

僕はそれを振り払うと、もう一つ呪文を唱えた。

In laa pidd ee gaa ut tee p ee rrr aa e hoo n haa e r re e e i
「神の大地は不動なれど不変ではあらず」

僕が呪文を唱えると、広場の地面が盛り上がり、身動きがとれなくなっている隊員達に覆い被さっていく。

「……………っ！！ん—————！！」

隊長を含め、僕を除いた全員が広場の地面に飲み込まれていった。

そこはいつも通り、誰も通らず、何も無い広場へと戻ったのだ。

さて、暗殺失敗した奴らの始末は終わった。
僕の主から受け取った指示は二つ。

1、暗殺に関わった者達を全員始末すること。なお、勇者は絶対に死なせないこと。

2、勇者ともう一人の異世界人を接触させないこと。なお、もう一人の異世界人は極力死なせないこと。

勇者にはもう一人の異世界人を殺すと脅しておいたが、それは嘘だ。二人が接触すればもう一人の異世界人に危害が及ぶと思わせ、二人を会わせないためについた嘘だった。
だが、それだけでは会わないと断言はできない。
それにしたって脅しが弱すぎる気がする。

「…………勇者……………監視…必要……………有り」

羽織っていたフードを被り直し、広場を後にする。

すべては主の「計画」のために…

第十一話 舞台裏

「ごちそうさまでした」

道の真ん中で倒れた俺は、とある食堂に担ぎ込まれた。
倒れた原因は………空腹。

「まゝしかし……よく食べたね」

食堂の店員であろう女性が僕の横に積み上げられた皿を見て言った。
自分でも驚くべきことだが、通常では考えられないほどの量を食してしまった。一人前でも十分満腹になるであろうどんぶりをざっと十五人前は食べた。………一体僕の体のどこに収まったのだろうか…

「それで……エクスカリバー、反動って言ってたけど、この馬鹿みたいな食欲がそうなのか？」

周りには聞かれないほどの小声でエクスカリバーに聞く。

剣が言葉を発したとなれば、いくらファンタジー世界でも驚く人は多いだろう。

『体力を奪われる……と言った方が正しいでしょうね。空腹と言うのはその危険信号』

「なるほど……でも、こんな量の食べ物自分でもよく食べれたと思うよ。そんなに大食いでも無かったのに……」

「ところで坊や、あんた道のど真ん中で何してたんだい？　行き倒れかい？」

エクスカリバーと内緒話をしていると、店員の女性が話しかけてきた。……というか、坊やって僕のことか？

「ああ、いえ。行き倒れと言うわけでは無くてですね……」

なんといった物か……護衛の人が急に襲いかかってきて、暗殺者達と死闘を繰り広げたあげくエクスカリバーの能力を使いすぎて空腹で倒れてしまった。……なんて言えないよなあ……そもそも信じてもらえるかも怪しい。

「えつと……そうですね……いや、やっぱり行き倒れと言うことで」

「なんだいそりゃ？……まあ、いいや。坊やは他の街から来たのかい？　ここらでは見ない顔だけど」

「一応、城で働いてます。あまり街の方には出てきませんが……」

勇者として召喚をされたのだからそれでも間違いは無いはずだ。

「じゃあ兵隊さんかい？　そうは見えないけどねえ……」

僕をまじまじと見る店員さん。確かに、僕は一兵士の格好ではあり得ないようなきれいな服装をしている。

城の中で見る限り、兵士の格好はみすばらしいの一言に尽きた。もちろん、位の高い人たちはそれなりの格好をしていたが、大半はすり切れたシャツにボロボロのズボンといった出で立ちだった。店員さんが僕の服装に疑念を抱くのもうなずける。

「まあ、それはともかく……一つ教えていただきたいのですが」

「ん……？ ああ、なんだい？」

「ギルドと言う場所に行きたいのですが…場所、ご存じですか？」

「それなら大通りをまっすぐ行けばすぐに見つかるよ。でっかい建物だからねえ」

「分かりました、ありがとうございます。お金ここに置いておきますね」

僕の質問に答えてくれながらも忙しそうに働く店員さんに断ってからお金をテーブルに置く。

城を出る前にシルフィから予算として金貨を5枚渡されていたため、食事代は余裕で払うことができた。

「ああ、ちょうどだね。また腹が減ったら来な」

目の端でお金を確認した店員さん。気の良さそうな笑顔を向け、手を振った。

「……………フラン！ いい加減グータラご主人を起こしてきな！
いくら何でも寝すぎだよあの子」

「あつ……………はい！ 分かりましたアズラさん」

僕が店を出かけると、店員さんが別の女性……………と言うより女の子に指示を出していた。

二階は居住スペースにでもなっているのだろうか……………

さて、店員さんにギルドの場所を聞いてはみたものの……これからどうしようか……

「アークが言ってたことも気になるしなあ……」

僕と雄一が会えば雄一を殺す………物騒だ。

まあ、雄一なら大概の敵は返り討ちにするだろう。なにせ基本的に僕よりも強く、この世界に来て身体能力も上がっているだろうからだ……いや、断言はできないけど……

『マモル君。気になっていたのだけど……今から探す……ユーイチ君……だったかしら？ 彼は元の世界でどういった関係だったの？』

「ああ、エクスカリバーにはまだ説明していなかったね。雄一は……同じ施設……孤児院で育った僕の親友だよ。家族と言っても良いほどのね」

『そう……でも、アークが言っていた脅しだと、合流すればユーイチ君に危害が及ぶかもしれないけど……ユーイチ君は貴方のように武芸に秀でているのかしら？』

「それは問題ないと思うよ？ 彼は僕よりも強いし……」

説明の途中で僕は口をつぐんだ。

そうだ、雄一は僕よりも強い。

しかも、どんな環境でも馬鹿みたいに対応してしまう能力がある。正直、雄一の頭の悪さ以外に心配する理由はない。

もちろんただ単に、友人として心配はしている。当然だ。親友が目の下の方不明なのだから……

「けど……出会ってしまえば巻き込んでしまうのか……」

どう考えてもアークの狙いは僕だ。

神様も言っていたが、雄一がこちらへ来たのは手違いだ。だとすれば彼はこの世界において重要な立ち位置には立っていないだろう。よって、雄一が狙われるとすれば原因は僕だ。

そんな中、俺の都合で騒動に巻き込んで良いものだろうか…

はじめはとにかく出会ってから今後を決めようと思っていた。雄一の性格上、遊撃隊の任務も手伝ってくれると思う。……面倒くさいと言っただろうが…

だが、この件に関しては話は別だ。

出会った段階で雄一の意志とは関係なしに巻き込んでしまう。逆に合流して雄一に警護の人間をつければ大丈夫かもしれないが、アークが城の兵士だったこともある。下手をすれば寝込みを襲われるかもしれない。

……………

「ああもう！ 何がなんだか分からなくなってきた！！」

思わず叫んでしまう。

結局僕は雄一に会うべきなのか会わないべきなのか……

『あらあら困ったわね』

エクスカリバーがのんきに答える。

『私はマモル君がしたいようにすれば良いと思うわよ？ ユーイチ君と合流して守ってあげるか……それとも会わずに巻き込まれないようにするか……』

雄一と合流すれば、一緒に敵に立ち向かえる。だけど、寝込みを襲われたら？　そもそも味方が敵だったら？

巻き込んでしまう以上、雄一に危害が及ぶのは間違いない。

なら会わずにトラブルに巻き込まれないようにするか？……これも駄目だ。

アークが言った「会えば殺す」という言葉を全面的に信用できない。会わなくても危害を加える恐れもあるからだ。

……これは典型的な『不自由な二択』だ。今の段階で答えを明確に出すなんてできるわけがない。

……じゃあどうする？……結局僕が選ぶしか無い。
雄一に対する僕の信用度からすると……まあ、言うまでも無いな……

「……雄一とは……会わない」
『あらあら、それで良いの？　貴方が決めたことにケチをつけるわけじゃないけれど……マモル君が雄一君の事を信頼しているから？　それともただ冷たいだけなのかしら？』

彼は強い。

僕よりも武芸に秀でている。……頭は悪いが、機転は利くため心配いらない。

彼はたくましい。

順応性が恐ろしく高く、異世界という環境でもまったく問題なく生活できるだろう。

つまり……僕は雄一の事を信じている……そういうわけだ。

「雄一なら大丈夫だよ？ 彼は信用できるし信頼もできる。少なくとも、僕の評価ではそういう奴だ」

『ふふつ、『勇者様』にそこまで言わせるなんて…私も一度会ってみたいものね』

「いずれ会えるよ。勇者としての仕事を片付けて、アークの件も解決したら会いに行くよ……必ず」

今会わないからと言って永遠に会えないわけじゃない。問題を解決してから会いに行けばいいだけの話だ。

『ならどうするの？ もうギルドに着いてしまふけれど…』

いつの間にかギルドの建物が見える所まで来ていた。

店員さんが言っていたとおり、とても大きい建物だ。さすがに城よりも大きいと言うことは無いが、視界がとらえている範囲はすべてギルドの建物と言った具合のスケールだ。

「そう言えばそうだね……どうしようか」

元々、ギルドには雄一を捜すために来たわけだが、探す理由が無くなった以上無駄足だったかもしれない。

「探さないなら依頼を出しても意味がないな………ああ、でも会わないようにしたいんだから……エクスカリバー。依頼って、言うだけでできるのかい？」

『多分できると思うわよ？ 基本的に何でもやってくれる所だから』

なら念には念を入れて、会わないように依頼を出しておこう。

人探し依頼。

依頼主・マモル〓オトタケ

対象・ユイチ〓サヤマ

特徴・黒髪に黒い瞳。変わった服装。
言伝・僕を探さないでください

第十一話 舞台裏（後書き）

無理矢理に行きたい方向に持って行こうとしている感が満載です。

自分の文章能力のなさが恨めしい……

あつ、でも良いニューースもありました。

ついに！ というかようやく、ユニークアクセス数が十万を超えま
した。おめでとう僕！！

いつもアクセスしてくれている方々に感謝です！！

第十二話 王様の寝室

「勇者よ、本当に酒は飲まぬのか？ 遠慮をすることは無いのだぞ？」

「はい。先ほども申しましたが私の国では未成年の飲酒が禁止されていますので」

モントウ王国国王、ワング・ジ・アラム・モントウの寝室に俺はいた。

なぜこうなったのかというと……

「はあ……なんか疲れたね……」

『あらあら。確かに命を狙われるなんてそうは無いものね』

ギルドに依頼をしたのち、俺とエクスカリバーは城に戻ってきていた。

アークと暗殺集団との激闘の後であり、聖剣の能力も相まって幾分か体がだるい。

「おお！ 勇者よ！ 外の視察はどうであつた？」

「……へ、陛下！？」

ため息をつく俺に対し、なんと王様が声をかけてきた。しかも、普

段はサテレスを初め、大勢の側近を連れている王様にしては珍しく、
たった一人での登場だ。

『あらあら、ワング。また仕事を抜け出してきたの？ 困った人ね』
「はっはっは！ エクスカリバーよ、人間たまには息抜きも必要なの
だぞ？」

どうやら王様は仕事を放り出して逃走中のようだ。

耳を澄ますと遠くからサテレス達の声が聞こえてくる。

「陛下ー！！ 国王陛下はいずこー！！！」

「あんの馬鹿陛下ー！！ 何度抜け出せば気が済むんだー！！」

どう考えても臣下が王様にかかるべき言葉ではない物も聞こえてき
ていた。

…………… 王様の評価を改める必要があるそうだ。

「む、ここももう安全ではないか…………… おお、そうだ。先日、勇者の
故郷について聞くと約束をしておったな。今から聞こうではないか」

「えっ！？ ちょ、ちよつと……………」

断りを入れる暇もなく俺は王様に引きずられていった……………

というわけで今に至る。

「ふむ、前にも聞いてはいたが…………… 勇者の故郷は愉快な所なのだな。
馬が引かぬ馬車や鳥や飛竜よりも高く早く飛ぶ乗り物など想像もつ

かん」

この世界の文明水準は、俺が見て回った限り中世ヨーロッパに近い。魔法やこの世界独自の技術も存在するが、現代日本と比べるとはるかに劣っていると言える。

そもそも別世界を比べること自体間違いなのかもしれないが……

「それに我が気になったのは『ニホン』という国の価値観だな。『ブシドー』という価値観があるにも関わらず自分を下に見せる文化とは……あべこべではないのか？」

「一応、武士道以外にも宗教や習慣などが組み合わさった結果「謙虚さは美德」とされてきました。あまり深く考えたことはありませんが」

「ふーむ、異世界の価値観はよくわからぬが……だからこそこの世界とは隔たりがあるのやもしれんな」

元の世界でも、日本は特異な国だと思うのだが……これ以上言うと延々と説明させられる気がするのでやめておこう。

「……………話は変わるが、勇者は我が娘のことをどう思っているのだ？」

「……………本当に急に変わりましたね。シルフィ様のことは……とても活発なお方だと思っていますよ？」

「ふー……………その様子では我が娘の思いが達せられるのはいつになることやら」

『うふふ。シルフィちゃんはマモル君のそんな所も好きなんじゃないかしら？』

二人が何を言っているのか分からない。急に話が変わったかと思いきやシルフィがどうのこうの……………何の話なんだろうか。

「…………？ シルフィ様のことは（友人的な意味で）好きですよ？」
「いや…………恐らく勇者が言っているのとは違う気がするのだが…………」
『シルフィちゃんも大変ねえ』

「…………お二人が何を言っているのかいまいちよく分かりません」
「ま、まあ分からぬのならそれでもよからう……………そういえば勇者は今日街に出ておったのだったな？ 何か用事でもあったのか？」

再び話が変わった。だが、この王様の台詞で俺は思い出した。

「ああっ！ そうでした……………そのことでお話があります」
「む？ なんだ？」

「今日私は…………暗殺されかけました。犯人は…………この城の人間です」

第十二話 王様の寝室（後書き）

グダグダと申し訳ありません。

次話が終わればとりあえず雄一ルートに戻る予定です。

あと、ここでしていいのかは分かりませんが新しい小説を書き始めました。

『国作りをしよう』という国作り奮闘記を現在執筆中です。

そちらもただらと書いて行く予定なので良ければお読みください。

第十三話 出発の時（前書き）

一人称を『俺』から『僕』に改訂しました。

第十三話 出発の時

「ふむ……近衛騎士団から暗殺者が……」

王様が自分の髭を弄りながらつぶやく。

僕がアークに襲われた旨を王様に伝えたところ、苦虫をかみつぶしたような表情で黙ってしまった。

「勇者が街に出向いておった事を知るのは極わずかなはずなのだが……一体どこから情報が漏れたのか……」

「やはり近衛騎士団にいる誰か、もしくはそれを動かせる人物が怪しいですね」

「……どうであろうな、近衛を動かせるのは我かサテレスしかおらん。しかも、不審な経歴を持っていては近衛に入れぬようサテレスにも徹底させている」

暗に「サテレスが怪しい」と言っただつたのだが、王様は全くサテレスを疑っていないようだ。

そもそも、アークを僕の護衛として宛がったのはサテレスなのだから怪しまない方がおかしい。だが、見る限り王様はサテレスのことを信用しきっている。

確かシルフィが言うには……王様は騎士派でサテレスは王党派で対立していたはずだ。信用しきっているというのも問題じゃないのか？

「ともかく……この件に関してはこちらでも調べを進めておこう。勇者の友人とやらも残念だな、もし一緒に戦ってくれたなら良い戦力になってくれていたであろうに……」

「そうですね。私も彼がいたらとても心強かったです。でも……彼は面倒臭がるでしょうね」

雄一は必ず面倒臭がる。確信を持ってそう言える。

それでも頼み込んで行けば必ず助けてくれるのは分かっているのだが、基本的に面倒臭がりだからなあ……

「はっはっは！ 面倒臭いか……勇者もその友人のことを信用しているというか、見下しているというか……よくわからないな」

「い、いえ……見下してはいませんよ。信用もしていますけど……ただ彼のことを知っているだけです」

そうだ。僕は雄一のことを知っている。

年数で言えば大したことは無いかもしれないが、それでも同じ家に住み、同じ食事を摂り、勉強やトレーニングで体を鍛えてきた。

それに、彼は僕を救ってくれた。両親からの虐待や俺自身の思い込みから救ってくれたんだ。

信用……というよりは信頼するのはそれだけで十分だ。

「ふっ……そうか」

王様が優しくほほ笑む。

本当に……この王様は公務の時と比べると別人のようだ。先ほどまでの張りつめた雰囲気が一瞬で……

「陛下あ—————!!」

和まなかった。

ゆるみかけた雰囲気、水を指すようにサテレスをはじめとした大臣たちが王様の寝室に突入してきた。

「ようやく見つけましたぞ！ さあ！ 次の仕事を始めて下さい！
！」

サテレスの指示で王様があつという間に大臣たちに羽交い絞めにされた。そしてそのまま言い訳も聞いてもらえず「お助けー！！」という叫びとともに部屋の外に引きずられていった。

「ふー……陛下にも困ったものだ」

サテレスが頭を押さえながらつぶやいた。しかも額には大量の汗が流れている。王様を探すためにあちこち走り回ったのだろう……ご苦労様です。

「……む？ 勇者か……なぜここにいる？ アークはどうした」

僕が寝室にいたことに気付いたらしいサテレス。

「それはあなたが一番ご存じなのではないですか？」

「……？ 何の話だ？」

サテレスはとぼけているようだがはつきり言って、今一番怪しいのはサテレスなのは間違いない。

元々が僕を目の敵のように嫌味を言ってきたいうえ、部外者に力を借りることを嫌う王党派の筆頭がサテレスだ。極めつけはアークを僕に宛がったのがサテレスだということ。怪しくない訳が無い。

「貴様が何を言っているのかは分からないが……喜べ。出発の日程が決まったぞ」

「……………それはいつですか？」

僕がそう尋ねると、ものすごく嫌味な笑顔を向けてサテレスはこう言った。

「明日だ」

第十三話 出発の時（後書き）

ああ……やっと終わった………

皆様から大変不評だった護ルート。書いている僕自身が全然面白くありませんでした。

ええ、それはもう本当に面白くなかった。アイデアは出ないし文章破たんはするし……

まあ、ともかくようやく終わりました。一応、護ルートの改訂をしようと思っています。

次回はこれまでの主要登場人物の紹介と、護ルートの改訂箇所の説明です。

よろしく願います。

主要登場人物

『雄一ルート』

さやまゆい
佐山雄一（17）

神様によって異世界に召喚された少年。

手違いによって城に召喚されてしまうが、勇者ではないという理由で追い出されてしまう。

非常に順応性が高く、異世界に召喚された後もなんだかんだでなじんでいる。

魔剣テネブラエを所持し、武芸に優れているが魔力は一切持つておらず、代わりに『空間術』と呼ばれる能力を有する。

親友である音竹護おとたけまもるとは同じ児童養護施設で育った仲で、絶対的信頼を置いており、他方から見れば少し薄情にみられることも。

若干のオタク気質であり、フランとあってからはケモナーとして目覚める。極度の面倒臭がり。

これといったトラウマは無いが、自分の大切な人や家族、他人の家族の問題には非常に敏感で、激怒することもしばしば。

基本的に馬鹿。

フラン（15）

雄一に救われた獣人ビストロイド族の少女。

元々はエリックの奴隷であったが、雄一に買い取られた後契約を破

棄され、解放奴隷となる。

性格は温厚で、争いはあまり好まないが非常に身体能力が高い。

雄一に奴隷から解放された後も雄一の傍においてもらっており、少し恋心も抱いている様子。

テネブラエ

言葉を話すことができるインテリジェンスソード。

イスカの店で雄一に発見され、そのまま所有物となる。

持ち主を選ぶらしく、イスカ曰く『聖剣』エクスカリバーとおなじ伝説級の魔武器。

性格は雄一に似ているが、かなりの自意識過剰。自分の存在に気付いた人間には「尊敬しても良いぞ？」や「惚れたか？」などのたまっている。

能力は魔法を剣の中に収めてしまう『吸収』とその魔法を増幅させて相手に放つ『放出』がある。

デルフリンガー？ 誰それ？

アズラ

雄一とフランが住んでいる食堂の店主。

面倒見がよく、手助けもしてくれるが時折厳しいことも言う女性。

アルテナ

冒険者ギルドの受付をしている女性。

気安く話しかけてくる雄一と仲良くなり、脱出の際も手を貸してくれた。仕事とプライベートは明確に切り離すタイプ。

イスカ

雑貨屋を営んでいる少年。アルテナの弟。

珍しいものには目が無く、珍しいものを目の前にと性格が変わってしまうほど。

いじめられっ子体質らしく、雄一に力モにされている。

カール&ゴードン

北門の警備をしている兵士。

災害級を倒した後の雄一を救出し、城に連れて行った。

『護ルート』

おとたけまもる
音竹護（１７）

神様によって異世界に召喚された少年。

『勇者』として召喚されたが、慌てることも無く順応している。雄一の順応能力とは違い、騒いでも状況は変わらないという思考を持っている。

非常に頭がよく、腕も立つが、武芸に関しては雄一には勝てない様子。

過去、虐待から雄一に救ってもらったことがあり、そのことから雄一のことを慕っている。雄一には絶対的信頼を置いているが他方からは薄情とみられることも。

『聖剣』エクスカリバーを所持しており、その腕はアークナイト四大騎士を凌ぐほど。

鈍感キャラ。

エクスカリバー

『聖剣』の称号を持つインテリジェンスソード。

モントウ王国に伝わる宝とされている。

その口調は大変おしとやかな淑女であるが、時折黒い発言をする腹黒。

能力は光並みの速度で動くことができる『疾光』

もうひとつ能力があるらしいが、現在は明かされていない。

シルフィ・ド・アラム・モントウ（16）

モントウ王国第三王女。『勇者召喚』という任務を執行し、雄一及び護を召喚する。

明るく活発であるが、若干わがままな性格。

召喚の際、護に一目ぼれをし、積極的にアプローチをするが鈍感な護には相手にされていない。

見た目が幼いことを悩んでおり、そこに触れられると爆発魔法であ

たりを黒こげにしてしまっ。

魔法の腕は16歳の若さで『魔導師』の資格を有するほど。

ゲイルⅡフォンⅡトニトロス(28)

モントウ王国四大騎士で『アークナイト雷』の称号を持つ騎士。

実力的には護とほぼ互角といった実力者。

シルフィが子供のころ、養育係をしていたことからプライベートな時間ではシルフィのことを呼び捨てにしている。

ワング・ジ・アラム・モントウ

モントウ王国国王。

髭を蓄えたダンディな見た目と同じく、非常に国王らしい雰囲気を持つ。だが、プライベートな時間では非常に砕けた性格。Odontierism騎士派の筆頭。

サテレス

モントウ王国宰相。

端正な顔には似合わず、非常に嫌味な笑い方をする。Royalist王党派の筆頭で、部外者である護や雄一を疎ましく思っている。

アーク

モントウ王国近衛騎士。
護の暗殺に参加するが、意図的に失敗させたあげく、暗殺参加者を皆殺しにし、姿を消す。

『改訂箇所』

護の一人称を『俺』から『僕』に変更しました。
ミリタリーオタクの設定を無しにしました。

今後、改訂箇所があれば随時報告いたします。

第三十四話 野営中であります

「薪も拾ったし、あとは火をつけるだけ……………あれっ？ そうい
えばどうやってつければいいんだ？」

街を出てから二日目。初日は夜逃げという形でしようがなく夜中に
移動していたが、御者曰く「夜中に移動するのは危険」ということ
で俺とフランは野営の準備をしていた。

「あつ、ユーイチ様！ 私に任せて下さい」

胸を張って、集めた薪の前にちょこんと座るフラン。

目を瞑り、しばらく力んだかと思うとバチッという音をたてて薪に
火が灯った。

「おおっ！ なんだ？ 今どうやったんだ？」

「えつとですね……………こうやりました」

再び目を瞑り手をかざすと、掌の上でバチッという音をたてて電氣
が走ったのが分かった。

「なんだフラン、魔法が使えたのか？……………あれ、でも呪文を唱
えていなかったような……………」

「これは体質なんです。小さいころから雷を思い浮かべると実際に
出せるようでして」

『ふゝん、魔法つつうよりは空間術に近い感じか……………まあ、
獣人^{ビストロイド}族

は基本的に魔法は使えないからなあ」

あ？ そうなの？ 割と初耳だったんだけど……

「ま、便利な力があって助かったよ。ありがとなフラン」

俺が頭をなでてやると、えへへと照れくさそうに笑うフラン。
はっはっは。愛い奴め。

「……………っ！」

「空間術と言えば………… テネブラエ。この特訓とかめちやくちや腹減るんだけど、やらなくちゃダメか？」

俺が言うところの特訓というのは、昨日からやらされている荷物の空間術での出し入れだ。

最初はイスカに渡された袋程度だったのが今では馬車の荷台丸ごとを出し入れさせられている。

…………… はっきりに言って超つれえ…………

「おかげでイスカがくれた食料もそこをついちまったんだけど…………」

『最初にも言った通り、慣れてくれば腹もそこまで減らなくなる。

今のうちに慣れといった方が良いんだよ』

「それは分かるけど…………」

「…………… い！」

「あつ、でも初めてのころと比べてだいぶきれいに出るようになりましたよね？ 呪文も唱えなくてよくなってますし」

フランの言うとおり、一日特訓しただけでも大分スムーズに空間術の煙を出すことができるようになった。おまけに集中すれば呪文を唱えなくても、小規模なら発動できるようになっている。素晴らしきわが才能！！

「おいこら！！ いい加減にしろ！！ 無視するな！！」

…………… ええい、さつきからキャンキャンとうるさいやつだなあ……………

「なんだ？ おさげっ娘…………… ああ、小便か？」

「なんだおさげっ娘って！ アタイはエリスだ！！ それと小便じやなくて縄をほどけて言ってるんだ！！」

エリス。

街で俺が捕まえた女盗賊（子供だけど……………）

そのあと脱走して森に逃げ込んだあげく、グーラに襲われて仲間を失った気の毒な少女……………

…………… いやまあ、そんな説明はどうでもいいのだが、とにかく今、エリスは木に縄で縛りつけている状態だ。

なにせ一応犯罪者だからね。

ちなみに、俺としては女の子が小便などと言うのはどうかと思う。

「ああ、そうだエリスだっけ？ 縛られて当然だろ、盗みに脱走、最後は無賃乗車なんてしてるんだから」

「ふんっ、あんたに迷惑をかけた訳じゃないだろ」

「いやいや！ めちゃくちゃかけられてますけど！？」

なにせ、盗みをやらかした時にはエリスの仲間に殴られたし、脱走の時にはフランともどもグーラに喰われかけたし、最後の無賃乗車に関しては現在進行形で迷惑かけてるだろ。

「そうだぞエリス！ ちゃんとユーイチさんに謝れ！！」

と、横から口を出してきたのは逃亡の手助けをしてくれた御者さん。何の縁か……エリスのお兄さんらしい。ちなみに名をタイクと言う。

「本当に申し訳ありません！！ 私の愚妹がご迷惑を……ほら、お前も謝れ！！」

「……あゝ、いや迷惑つつても最終的に実害を被ったってわけでも……いや、あるか」

グーラを倒してしまったあとでなぜか国から追われる羽目になったからなあ……これ以上にならない実害だ。

「身勝手なのは承知でお願いします！ どうか我が愚妹にお目こぼしをいただけないでしょうか？」

必死で頭を下げるタイク。

まあ、妹がブタ箱行きになるとなれば必死にもなるか……

「んゝ、俺としては別に解放しても良いんだけど……」

そう言つて俺はエリスに手をかざす。

エリスの縄に空間術をかけ、縄を断ち切った。特訓の成果で呪文を唱えずに出来た。

「おっ！ やった！！」

縄が切れた途端駆け出すエリス。しかもこんな言葉を残して……

「はんっ！ 覚えてろ！！ 絶対に復讐に来てやるからな！！」
「全然反省してないしな……」

はあ、全くめんどくさい。
もう一度エリスに手をかざす。

俺の特訓の成果はかなり順調だ。テネブラエが言うにはかなり上達
が早いらしい。

呪文を唱えずに発動できるようになったうえ、多少ならば影を操る
こともできるようになっていた。

……そんなわけで煙がエリスを追いかけるように包み込んだ。

「うわっ！ なんだこれ……っ！」

辺りに響いたのはエリスの断末魔……とは違うが、ともかく再び捕獲完了！！

第三十四話 野営中であります（後書き）

帰ってきた雄一君です。

護君の口直しになれば良いのですが……

第三十五話　さらばエリス。こんにちはチンピラ

まったくついていない……

父さんに頼まれて街まで行っただけで散々な前に会った。

冒険者にとっ捕まるわ化け物に喰われかけるわ……ていうか仲間は全員喰われちゃった。名前も知らない奴らだったから別に悲しくないけど、これじゃあ仕事ができない。

化け物に襲われた後、冒険者の目を盗んで逃げたは良いけど一文無しのアタイじゃどうすることもできなかったし……

それでちょうど街を出ようとする馬車があったから荷物に紛れ込んで他の街に行こうと思ったんだけど……それが運の尽きだった。

「エリス、お前いつまで盗賊なんて続ける気だ」

「ふんっ、タイ兄だって昔は盗賊だったじゃないか。それが今じゃ御者だって？　何の冗談だ」

「あの頃の凍てつく大剣は義賊だっただろう……親父がおかしくなっただけからは他の盗賊どもが参加しだしてただの殺人集団になっちゃった」

「……！　父さんはおかしくなってるって無い！！」

声が大きすぎたかもしれない。なんかユーイチとか言う冒険者がこっちを見てる……

「どうかしたか？」

「いえっ！　なんでもありません！！」

タイ兄が冒険者のご機嫌をうかがっている。腰ぬけめ……

「どうでもいいけどとつとこの縄ほどいてよ」

「ほどいても良いが、ユーイチさんたちに復讐なんてしないな？」

「……ああ、しないよ」

「なんだ今の間は……！……はあ、ともかく次の町に着いたら下ろしてやるから、親父のところに行つて、盗賊から足洗え」

「……ふんっ」

盗賊から足を洗えだ？ 笑えない冗談だ。父さんを裏切るなんて出来るもんか！

「おらあ！！ 良いから金払いやがれ！！」

「なんでだよ！ きつちり完食しただろ！！」

「やかましいこの詐欺師野郎。どんな手品使いやがつた！！」

………なんて言うか、つくづく面倒事に巻き込まれるなあ俺。急ではあるが、俺の周りには数十人にも及ぶ男たちが俺を睨みつけている。

なんでこうなったかと言うと、単純なことなただけ………

王都を出て数日、俺たちは隣町まで来ている。

王都に比べれば大分小さい町で、どつちかと言うと村に近いぐらいの規模だ。しかも大通りには人の姿はほとんどいない。

「あゝ、やっと着いた。ケツ痛え」

馬車の乗り心地ははつきり言つてすさまじく悪かった。

なにせ馬車の揺れが直接ケツに当たる感じだったからなあ、今ケツをまくれば日本猿みたいになつてゐるかもしれない。

そんな俺を心配したのか、フランが「ユーイチ様大丈夫ですか？」と氣を使つてくれる。

「大丈夫……とは言えないな……フラン、お尻さすつてくれる？」

「えっ？……あの、いえ……えっと……」

「いや、ゴメン冗談」

俺の言葉にほつと胸をなでおろすフラン。

元の世界でこんなこと言つたら間違ひなく訴えられるな……

「それで、ここまで来れたのは良いとして。これからどうすりゃいいんだろうなあ」

ここにきてようやく気付いたのだが、俺は何か目的があつてここまで来たわけじゃない。

成り行きと言うか、御者に任せてここまで来たは良い物の……何をすべきなのか……

「とりあえずエリスを兵隊さんに渡しとくか」

『あん？ エリスならさっき逃げたってったぞ？』

「……………は？」

『いやだから、さっきどっか行っちゃったって。ついでに御者もそくさとどっかに行っただし』

「おまつ……………！ 見てたんなら言えよ！！」

そして誰もいなくなった…………… って報告だけすんな！！

「というより、兵隊の方に引き渡すのも無理じゃないですか？ ユ

ーイチ様、指名手配されてますし」

「ぐっ…………… そうだったな。ここも手配書とか回ってんのかなあ」

『手配されたのが町を出るすぐ前だったし、まだ回って無いかもしれないねえな』

確かに城を出る直前に手配されたわけだから、すぐにこの町に向かった俺たちよりも先に手配が全国に出回るとは考えにくい。交通手段が限られてるこの世界ならなおさらだ。

「じゃあその確認もしなきゃな…………… ただその前に……………」

「前に？」

「飯だ！！」

エリスのことは…………… まあ良いか。

俺たちは腹ごなしをするために食堂にやってきた。

『バルバルの店』……看板にそう書いてある。

アズラさんの店と比べて規模はでかいものの、内装は少し汚いというか匂うと言うか……ともかく少し入りづらい雰囲気が漂っていた。

「ゆ、ユーイチ様……ここ、少し怖いです……」

フランが縮こまって俺の服の裾を掴む。

フランの言うとおり、この店はなんか怖い。いや、店の雰囲気ごと

きで怖がる俺じゃないが、店にいる人間が怖い。と言うより恐い。店の客は厳つい男やセクシーな女、店員すら傷の付いた顔面で俺たちを睨んでいる。

どこぞのマフィアのアジトかよ……

「まあ、飯を食っただけだし、大丈夫だっけ」

そうフランをなだめる。正直俺もちょっと怖いよ。

「らっしやい」

俺たちが店に入ると、店員らしき男が声をかけてきた。

身長2メートルオーバーの大男。たらこ唇の厳つい出で立ちだ。

「え〜っと……この店で一番量の多い料理と……フランはどうする？」

「い、いえ！ 私は……そのミ、ミルクで」

「……あゝ、じゃあその他になんか軽めの定食を」

多分フランは、場の雰囲気にもまれて遠慮している。

気を使ってさりげなく優しさを見せる……俺ってマジ紳士。

「兄ちゃんたち、冒険者か？　なら懐もさびしいだろ。うちの大盛り料理に挑戦してみないか？」

「大盛り料理？　なにそれ？」

「ああ。それを全部平らげることができたらこの店での代金はタダってことで」

……………ん〜っと、これは多分あれだな。

大食いキャラに見られるテンプレストーリー。間違いなく損をするのは店の方だと思うけど……

「本当？　じゃあそれで」

俺がチャレンジしない理由が無い。

多分、15分くらいかな？　それくらい経つと、俺の目の前には天井に届くほどの高さのチャーハンがあった。
あからさまだなあ……

「へっへっへ。喰いきれなきやきつちり代金は支払ってもらうぞ？
占めて白金貨2枚……って速っ!？」

なんか店員が言ってるけどその間に俺はチャーハンをかき込んだ。はつきり言って人間が食える量ではなかったが、現在の俺の胃は誇張ではなくブラックホールと言っても良いくらいの状態だ。正直いくら食っても満腹になる気はしない。
ものの10分ほどで完食してしまった。

「そんじゃ追加でさっき注文したのと、後このチャーハンと同じやつ」

「ふ……………ふざけんなあ!!」

とまあこんな感じだ。

ちなみに今の状況はというと、俺に詐欺を働こうとした大男が「表へ出やがれ!」と言ったので大通りに出ている。
そんなもって、店員たちが包丁やら鍋やらを俺に向けているのに加え、なぜか食堂にいたやつらが持っていた剣やナイフを俺に向かって振りかざしているという状況だ。

「客の方もグルかよ」

「はんっ、俺たちをしらねえとはモグリだなお前」

えっ? 何? 有名人?

「俺たちはかの有名な『凍てつく大剣』だ。痛い目見たくなきゃと

つとと金だしな」

「はあ……どの世界でも、どの地域でもチンピラの言うことは同じだな。やれやれ……」

ため息もつきたくなるわ。全くめんどくせえなあ……

腹もまだ四分目位だし、さっさと終わらせて他の店に行くか。

Inter
「開け」

空間術の呪文を呟く。やっぱり呪文を唱えた方がスムーズにいくからな。

俺の足元の影が煙に変化し、膨張し始める。

「おいおい……なんだそりゃ！」

大男が慌てる。この光景を見て慌てない奴もいないだろう。

俺の影の煙がある程度膨張すると次の瞬間、煙が触手のように伸びて行き、男たちを飲み込む。

それぞれがさまざまな断末魔を上げ、煙の中に収まっていった。

「ふん。こんなもんか……」

辺りを見回すと、そこには俺とフランを残して誰もいなくなっていた。

「んで、閉じ込めたは良いけどこの後はどうすんだ？ このまま餓死させるとか？」

「いやいや、いくらなんでもそんなことはしねえよ……見てろ？」

煙を一旦消すと、もう一度呪文を唱え、自分の傍に垂直に伸ばす。

んでもって、テネブラエを鞘に収めたまま構える。

「チャーチャーラチャッチャーラ、チャーチャーラチャッチャーラ、チャーチャーラチャッチャーラチャーラチャーラっとな」

俺が口ずさんでいるのはプロ野球とかでよく流れるアレ。正式名称は俺も知らん。

「ピッチャー振りかぶって……………投げた!!」

その掛け声を合図に煙から捕らえた男が一人落下する。

「な、なんだこ……………ぶるあああつ!!!!」

ホームラン!!

雄一選手渾身の一撃です!

いやー、キレーに飛んでったな。

「『ぴっちゃー』ってなんです?」

首をかしげるフランだった。

第三十六話 活躍勇者とグータラ勇者

小説本文

「あゝ、いい汗かいた」

額に流れた汗をぬぐう。

バツティングセンターの要領で次々とチンピラ達を殴っていき、最終的にはチンピラの山が出来上がっていた。

『死屍累々だな』

「殺しては無いよ……………多分」

確認はしていないし断言はできないからな。

「……………っ！ ユーイチ様、誰かいます」

フランが猫耳をピコピコと動かしながら言う。

ああ、猫耳良いよ猫耳！！

「ん？ 誰かつて誰？」

「分かりませんが……………たくさん……………こっちを見ている感じがします」

フランが真剣な顔をしているところ悪いが、何のことかさっぱり分からん。

気配を察知するなんて芸当俺には出来ないし……………やっぱり猫耳には

感じるものがあるのだろうか。

と、少し辺りを見回してみると、実際何人かの人間がこちらを見ているのが分かった。

気配とかじゃない。物陰から俺たちを見ている姿が丸見えだったからだ。

「おい。なんか用か？」

チンピラの仲間の可能性もあるので、少し警戒しながら声をかけた。すると、身を隠せていなかった奴とは違う人間が姿を現してきた。しかも一人二人ではない。十人、いや二十人ほどの集団だ。

「あんたらなんだ？ こいつらの仲間か？」

と尋ねてみたものの、はっきり言ってそれは無いと思う。

姿を現したのはほとんどがやつれた顔をした奴らばかりだ。

今俺の傍で伸びているやつらのようなマフィアみたいな恰好もしていないし。

「……ゆ………」

集団の中の初老の男性が口を開く。

「ゆ？」

「勇者様!!」

………はい？

「どうぞ勇者様！ これもお食べください!!」

「お酒も用意しましょう………おい！ 一番いいやつ持ってこい！」

「勇者様、女はいかがですか？ 何人かお呼びしましょう」

好待遇、好接待。なぜか俺はこのような状況にいる。

大通りでこの町の町長である老人に「勇者様!!」と呼ばれた後、
なんかよく分からないけど飯をおごってくれると言うのでついて行
ったらこの状態だ。

先ほどの食堂とは別の食堂で飯を食っている。

「女の人はいりません!!」

断ったのはフランだった。………いや、俺としては女遊びも一度
はゴニョゴニョ………

って違う！ そういうことは今はどうでもよくて、

「あ、あの………なんでこんな好待遇なんだ？ しかも勇者様って何

？」

この質問に辺りが一瞬沈黙した。だが、すぐに笑い声がわきあがった。

「あつはつは！！ またまた！ 勇者様のご活躍は聞き及んでいますよ？ おーいテイルさん！ 勇者様にあれを見せて差し上げてくれ！！」

町長の呼びかけに、俺を眺めていた集団から一人の男が出てきた。

「どもども」。ヴェルム新聞社のテイル「デッサン」でーっす。よろしく勇者様（笑）」

なんだ（笑）^{かっこわるい}って、この世界でもあるのかよそのスラング……

「で、この人がなんだって？」

「うちの新聞社は大陸の情報を発信しててるんだけど……最近こんな記事が出回ってたりするわけ」

テイルが手渡したのは新聞らしき束。その一面に次のような記事が載っていた。

『ディオシータス大陸北部で騎士団による撲滅戦成功す』

近年思わしくなかった戦況が二日前に行われた攻勢により覆った！！ 騎士団は三個師団を使い魔軍を川へ追い込み、その後川辺で待機し

ていた部隊とともにこれを撲滅した。

攻撃に参加した四大騎士、アークナイト『土竜』のムーレス公の活躍により騎士団の損害は軽微と思われる。

さらに戦場にはあるうわさが流れている。

戦場にかの伝説の勇者が降臨した。勇者は黒い髪に黒の瞳らしい。勇者は戦場にいた民間人を救った後、戦場にいた敵魔族たちを掃討し、戦場に召喚された敵ゴーレムたちを剣の一振りで消滅せしめ、勝利に大きく貢献したとのこと。

上記のような噂が流れ、筆者もその姿の一端を目撃した。

さらに、巷で噂になっていく王国で行われたという秘密召喚。

裏が取れておらず、これ以上書くのは控えるが、勇者が降臨したとなれば王国の関与もあるのではないだろうか。

筆・クルト＝フィッシャー

『今日の小話』

勇者に関してのうわさが流れる他、戦場にモントウ王国第三王女シルフィ・ド・アラム・モントウの目撃情報が多数寄せられている。だが、あまりに信憑性が無いため、誰かが流した嘘話の可能性高し。

「これってまさか……護か？」

新聞を見てつぶやく。護が勇者として召喚されたことは城で聞いた姿が見えないと思ったらこんなことしてたのか……

「どう？ 国营新聞社とは違ってうちは真実を報道するのが売りなんだよね。国营新聞だと騎士団のみで敵を倒したって論調だけど、実際のところ勇者がいたことは大分信憑性が高いんだよ」

「でも、この記事って二日前に書かれたんだろ？ だったらその勇者がここにいるのはおかしいだろ。それにこんなに早く新聞が出回るもんなのか？ かなり距離があるだろ」

「そこもうちの新聞社の売りなんだよ。大陸のどこにいようと二日でお届け。飛竜配達様々さ。あと、勇者に関しては僕もそう言っただけだね、町の人が聞いてくれなくて」

さつき言っていた（笑）^{かっかわじい}ってそういう意味だったのか。俺のことを勇者じゃないと分かっていた訳だ。

「この人の言うとおり、俺は勇者様でもなんでもないぞ？」

親友は勇者だけだ。

「そ、そうなのですか？ 特徴が合っていたのでつきり……いや、でも我々を救っていただいたのは事実です。我々にとっては勇者様ですよ！」

「ん、自覚ないんだけど……俺なんかした？」

「あの店にたむろっていた『凍てつく大剣』を退治してくれたではありませんか！ 最近あの者たちのたち振る舞いは目に余るものがあります、住民の間でも頭痛の種になっていたんです。昔は違ったのに……」

昔はこのあたりも平和だったのだろうか、町人は口々に「昔は」「あの頃は」と呟いている。

ともかく、俺はこの人たちの思いがけず救っていたらしい。別に感謝はしてくれなくても良いんだけど……

『まあいいんじゃないか？ 結局タダで飯を食えている訳だしな』

テネブラエがそう言った。だが、なぜかそれで辺りの声が止んだ。

「おい……人前であんまりしゃべるなよ」

『ああん？ そんなもん俺の勝手だろうが』

珍しい魔剣を見て息を飲んだ。そう思ったんだが、どうやら町人の様子を見てみるとそうではないようだった。

「ま、魔武器……」

「まさか……この人も？」

奇異の目ではなく、恐れが目だ。そんな目で俺は見つめられていた。おかしい雰囲気居心地が悪いのか、フランが俺の服を掴む。

「何か問題があったのか？」

変な空気なので町長に尋ねると、恐る恐ると言った感じで聞き返してくる。

「ゆ、勇者様は……変わっていませんか？」

「……？」

質問の意味が分からない。

変わるって……何の話だ？

「みなさんお集まりでどうしたんですか？」

俺が首をかしげていると、店の外から誰かがそう尋ねた。

みると、町人が誰かを避けるように道を開けている。

町人が開いたその空間に、なんつーの？……神父服？姿の男性が立っていた。

眼鏡をかけた、まさにテンプレートな優しそうな神父さん。

「こんにちは」

静まりきったこの場所で、神父はただそう言った。

第三十七話 教会に盗賊に新聞社

店の中に現れた一人の神父。

ニコツと笑うと俺に対して握手を求めてきた。

「どうもはじめまして。ヒュージ・トレイエルと言います」

「ああどうも。ユーイチです」

俺がヒュージの手を握り返すと、再びニコツと笑って次はフランへ手を差し出した。

自分にも挨拶が来るとは思っていなかったフランは恐る恐るだが手を握った。

「は、はい。フラン……です」

「よろしく願います……ところで、なぜみなさんお集まりなんですか？ 表でたくさん人が倒れていましたけど……」

ヒュージの言葉に、その場にいた俺とフラン以外の人間が体をビクツとさせた。

この神父さんってそんなにビビられる存在なのか？

「いや、その……あれは……ですね」

町長が言葉を詰まらせる。傍から見ても分かるほど、何かに怯えている様子だった。

「あの方たちは……あなたが？」

俺に話を振ってきた。

「ん？ まあ成り行きと言うかなんというか」

「そうでしたか。あの人たちの素行の悪さには私たちも困っていたので助かりました。きっと罰があたったのでしょう」

少し苦笑い気味に言うヒュージ。神父と言う立場上、暴力を肯定するのは気まずいかもしれない。

「見たところユーイチさんとフランさんはこの町の方ではありませんね？ 宿の方はもうお決まりですか？」

「いや、さつき来たばかりだからまだ寝るところは決まって無いよ」「なら教会に來ませんか？ 表の方たちを懲らしめてくれたお礼として止まって行って下さい」

いやゝ、飯もタダでもらっちゃってなんか悪いな。この町に来てからはなんだかんだで良いことばかりな気がするわ。

何か言いたそうな顔をしていた町人たちをよそにヒュージについて行くと、到着したのはやはり教会らしき建物だった。

ただ、俺が元いた世界のように十字架が飾られてはなく、少し大きな建物の中に長椅子がたくさん並んでいるだけの建物だ。宗教が元の世界とは違うのだろうから当然っちゃあ当然か……

「どうぞ、ごゆっくりして行つて下さい……………エリス、ユーイチ
さんたちの荷物を運んでもらえますか？」

「あつどうも……………って、ん？ エリス？」

聞いたことのある名前がヒュージの口から出た。
ヒュージの見ている方向を見ると、

「……………げっ！」

顔をしかめたエリスの姿があつた。

「なんで行くとこ行くところお前に出会っただよ！！」

そして逃走。

だが目の前の獲物を逃がす俺ではない。あつという間に空間術でエリスを捕獲した。

「はっはっは。俺から逃げられると思つたのか？」

「だー！！ 離せ！！ いつもいつも気食悪い技で捕まえやがつて
！！」

片腕を俺に掴まれ、ぶら下がっているエリス。罵詈雑言に加え、蹴
りが俺の腹に命中しているので心も体も少し痛い。

「大体アタイを捕まえても兵士に突き出せないだろ！ 知ってんだ
ぞ！ お前がギルドで手配されてるって！！」

「なんでって言われてもな、なんかエリスが逃げるから反射的に
……………」

俺の言葉にますます暴れるエリス。

逃げなければ捕まえられなかったと知り、理不尽だと喚き散らす。

「ってか、やっぱりこのあたりでも手配回ってんの？」

「ああ？ アタイは王都で見ただけでこのあたりのことまでは……
ってなんでアタイが説明しなくちゃならないんだよ……！」

ノリツツコミをありがとう。

「……ことはここらではまだ手配は回って無いのか？ 町人も俺の顔
見て何も言わなかったし。」

「あゝ、エリスが何かしたのですか？」

置いてきぼりだったヒュージが会話に参加する。

俺はこれまでのあらましを説明した。かくかくしかじか……

「なるほど…… エリスがとんだご迷惑をおかけしたようで、申し訳
ありません」

「父さん……！ こんな奴に頭を下げることなんてないよ……！」

父さん？

この神父さんってエリスの父親なのか……それにしちゃ似てないが。

「エリス、君も謝りなさい」

「えっ！？ だって父さんが……ムガッ……」

「本当に申し訳ありませんでした。娘ともどもこの通り」

暴れるエリスの頭を無理やり下げさせ、ヒュージも同じように謝った。

すると、しばらく暴れたのちしぶしぶだが、自分の意思でボソツと「……ゴメン」と謝るエリス。父親には少しは素直なようだ。

「いやまあ、もう気にしてねえよ。エリスの兄さんにも謝らせちゃったし……親父さんにまで謝らせるつても……なあ？」

目配せにフランに同意を求める。

「えっ？ あ……そ、そうです……ね？」

「てな訳でもう頭を下げないでくれよ。なんかこっちが申し訳ない気持ちになってくるし……」

そう言うヒュージが頭を上げ、申し訳なさそうな顔をする。

「ありがとうございます……ですが、なにかお詫びをさせて下さい。……たしかユーイチさんとフランさんはこの町に来たばかりでしたね。ならエリスに町の案内をさせて下さい。ユーイチさんが強いとはいえ、この町は少し外れれば途端に治安が悪くなりますから」「えっと……じゃあお言葉に甘えて」

ヒュージの口ぶりからすると、俺は運悪く治安の悪い場所の食堂に入ってしまったらしい。フランのCANは当たっていたみたいだ。

「なんでアタイがこんな奴の道案内を……」

ぶつぶつと呟きながら、ヒュージに指示されて俺の荷物を他の場所に運ぶエリスだった。

エリスが俺たちの荷物を部屋に運んでいる間、俺たちは教会の外に出ている。

早く俺が手配されているかどうか調べに行きたいしな。

「あつ、おい！ 勇者様〜！！」

勇者様……つーことは多分俺のことだ。

呼んでるのは確か……テイルと言った奴だ。

「ん？ なんか用か？」

「今、教会から出てきたよね？ 何かさ、変なところ無かった？」

「変なところ？ 変な奴なら目の前にいるけど……」

無論テイルのことだ。

「またまた、本当に何もなかったの？ やっぱりガセなのかな？」

「何かの取材ですか？」

俺の影からひょこつと体を出し、首をかしげるフラン。

「まあね。この町に『何か』があるって言う情報があってこの町に

来たんだけど、さっぱり。あとはあの教会だけだったんだけど神父さんも良い人っぽいし空振りだね」

「『何か』って何だ？」

「それを調べに来たの。結局分からなかったけどね……はあ、上司に怒られるかもなく、何か成果を上げないと……あつ、勇者様。『飛竜配達』って興味ない？」

「飛竜配達？」

「さっきも言っただろ？ 大陸のどこにいても二日で配達！ ヴェルム新聞『飛竜配達』ってね。飛竜にお客さんのおいを覚えさせて配達するんだよ」

護のことが書いてあった新聞か……

配達手段が限られているって思ってたけどそうでもないらしいな。

「それって、護……勇者のことってまた記事にしたりするのか？」

「本当にいたら間違いなく特集記事にするだろうね」

だったらその『飛竜配達』ってやつを頼んでおいた方がいいかもしれない。護の近況報告を知ることができる出来事だったなら願っても無いことだ。

「探さないでください」って言われたけど。状況を把握するくらいなら別にいいだろ。

「それで、それっていくら？」

「年間で白金貨三枚」

.....
高え！！！！

第三十八話 食堂に縁があります

テイルが言った『飛竜配達』とやらの法外な値段に対し、しぶしぶながら財布から白金貨を3枚取り出して渡しておいた。

白金貨3枚と言えば日本円にして約三百万円だ。ぼったくりすぎるだろう……と思ったが、テイル曰く『飛竜』を育てるのは非常に金がかかるらしく、それだけの値段でも赤字ぎりぎりらしい。

だが、テイル側からしてもこれだけ高いサービスを受ける人そうそういるとは思っておらず、俺に即金で白金貨を渡されるとかなり戸惑った表情を浮かべてた。

「それで、どこを案内すればいいんだ？」

『飛竜配達』がどうのと言うやり取りの後、教会から出てきたエリスと合流したこともありテイルとは別れることとなった。

今はエリスとフランと三人で町を歩いているわけだが……

「いい加減機嫌直せよ。こっちも怒ってねえからさあ」

ブスつとした表情で俺を睨みつけているエリスの頭をなでる。施設にいたころに小さな子供の面倒を見ていたからこう言った時の対処は実は慣れていたりする。

「何度も拘束されて怒らない方がどうかしてるだろう！……っついてか子供扱いするな！！　アタイはこう見えても十三歳だ！！」
「いや、そこで勘違いはしてねえけど……」

なにせ見た目通り、そのぐらいの歳だろうなって思ってたから。

「ぐぐ………っ！　馬鹿にしゃがって……！」

ますます俺を睨みつけてきた。

どうやら大人扱いしてほしい位の反抗期らしい。対応を間違えたか……施設にいたのは小学校低学年くらいだったからな。

「まあとりあえず、このあたりをざっと案内してもらおうかな。……ああ、兵隊さんがいるところっつーか……手配書みたいなものが貼ってある場所ってあるか？」

「ああ？　このあたりに兵士なんていないよ。治安が良いからって定期的に他の街から見回りに来るぐらいだ」

兵隊がいない？　このぐらいの規模の町なら当たり前なのか？……にしても不用心だな。

「そんじゃ、手配書とかは？　俺のが出回って無いか心配なんだよ」
「あんたなんてどうなろうと知ったこっちゃないけど……すぐその食堂に貼ってあるよ………なあ、この町に見るものなんて何もないよ？　もう帰っちゃダメか？」

「ん？　ああ……まあこの町位なら俺とフランだけで見回っても一日かからないだろうし……別に帰っていいぜ」

俺がそう言つとフンッと鼻を鳴らしエリスはどこかに行った。教会はそっちじゃないぞ？

エリスに言われた食堂は教会から少し離れた場所にあった。と言うよりここは俺が飯を食っていた場所だ。チンピラに襲われた所とはまた別の食堂。

「さっき来た場所ですね」

『人ばかりで見落としてたようだな』

なにせ先ほどは俺を取り囲む形で接待を受けていたのだ。手配書があつたとしても見落としていても何ら不思議ではなかった。

だが、先ほどの好接待とは打って変わって俺が食堂に入るとたちまち店内は気まずい雰囲気覆われた。……なんで？

「なあ、なんかさっきと雰囲気が違うかい？」

「本当ですね……あつ、ひよつとして手配書が出回ったとか……？」

ひそひそ声で呟くフラン。いかな、そんなことになれば着いたばっかだけど町を出る準備をしないと……

『いや、それとは別の理由じゃねえか？ ほら、その掲示板』

「掲示板？……ああこれか」

見ると俺のすぐ目の前に掲示板があつた。気づけよ俺。

ともかく、その掲示板には何枚か手配書や連絡などが載っていたが、

俺の手配書は見る限りは無かった。

「ふう、着いて早々また脱出なんてことにはならずに済みそうだな。……でも、じゃあ何なんだこの変な視線は」

店にいたのは十数人だったが、そのほとんどが俺を見ていた。かといってそれらを見返すと目線をあからさまにそらすため何やら寂しい気持ちになってくる。

「ハブられるってこういう気持ちなのかな……」

『はぶ……なんだ？』

「いやこつちの話……ともかくこれからどうするかだな。手配書がまだ来てないつつてもいずれは来るだろうし……アズラさんの話だと国を出た方が良さそうだっけ？」

フランと今後の話をしようと席に着くと、隣のテーブルから人の声が聞こえてきた。静まり返った食堂でひととき目立つ声だ。

「あらあゝ。そんなにきれいに見える？」

「ええもちろん！ あなたのような澄んだ瞳に緑の髪の毛！ まさに女神アストラムが遣わせた天使そのものです！……」

あからさまに女をナンパしている男の声。その方向に顔を向けてみると案の定だった。

俺をこの町まで送ってくれた御者。エリスの兄。いつの間にか消えたその男はタイク。そいつが女をナンパしていた。

「ハロゝ。タイクさゝん」

俺がタイクの背中に話しかけると、振り返って俺の顔を見るなりみ

るみるタイクの顔が引きつっていった。

「こ、こんにちはユーイチさん……お久しぶりですね……」

「つってもさつき別れたばかりかだけどな。どこ行ってたの？」

「そ、その……お代は王都の方で払ってもらってましたので、もう良いかな……って」

タイクはそう言っているが、実際は逃亡だろう。しっかり縛っていたはずのエリスが逃げ出したのだからタイクが手助けしたのは間違いない。

その場にいれば俺が疑うこと必死なので逃げ出したんだろうな。

「あのお、あなたひよつとしてえ……」

慌てて言い訳を考えているタイクの背中中、ナンパされていた女が俺に声をかけてきた。

緑色の髪にマントを翻す。

男なら誰しもが目を向けてしまうほどの爆乳保持者。そいつは……

「あんたは確か……」

『アエルか！？』

……………おいテネブラエ、俺の台詞を取るな。

第三十九話　ちよつとこの空気は嫌です

「テネブちゃん達こんな所でなにしてるのお？」

グロスのようなものがきらめいている唇から放たれたのはこんな言葉だった。

正面にははっきり言って超良い女。名を確か……アエルって言ったか。

『ちよつとした手違いってやつだ。ユーイチのやつが指名手配……』

「あつ！　バカ！　そんな簡単にばらすなよ！！」

一応世間では犯罪者ってことになってるんだから！！

「あ、あの……あなたは確か……」

「あらあ、確か王都の食堂にいた子ねえ。こんにちはアエレシスです。アエルで良いわよお？」

「は、はい。フランと申します」

「あつと……自己紹介が済んだ所でなんだけど、アエル。俺が指名手配されてるってのは誤解だから……その」

「うん。ユーイチくんは良い人みたいだし信じるわよあ……あつ、ユーくんって呼んでも良い？」

めっちゃ簡単に信じたんですけどこの人。なんか詐欺とかに簡単に引っかけりそうだな……あついや、もちろん俺は無実だけど……つかユーくんて……

『エルフっつーのはな、人の善悪を一目で見分けることができるんだよ』

俺の表情から何かを読み取ったのかテネブラエがそう言った。

「あらあ、でもエルフ同士だと使えないのよねえこの力」

『何言ってんだ、エルフほど善性が強い種族はいねえだろ』

「最近ではそうでもないのよあ？ この間だって……」

「いや、そのあたりのことはさっぱりだからまた今度……って言うかタイク！ 話の続きを……って、あつ！ いない！？」

先ほどまで視界の隅で顔を背けていたタイクがいつの間にかいなくなっている。あの野郎、また逃げやがった……

「タイクさんならさっき店を出て行きましたよ？」

「フランさん。見てたんなら言っして下さいよ」

「え、あつ！ も、申し訳ありませんユーイチ様」

まあいいか……捕まえた所で何かをさせるつもりもないし。

「さっきの彼がどうかしたのお？」

俺はこれまでのことをアエルに説明した。かくかくしかじか……ってあれ？ デジャヴ？……

「そう、大変だったのねえ。ユーくんをはめた人って言うのは誰だかわかってるの？」

ユーくんと言う呼び名が定着したらしい。

「いや、犯人って言うのは良く分かってねえんだけど、多分あのサテレスとか言う奴だ。あのロン毛め……殴っとけば良かった」

「サテレスって……確か王国の宰相だったわねえ。嫌な人だけ悪い感じはしなかったなあ」

「いや！あの嫌味な感じ……あいつがやっただに違いない。無駄に長髪だし……てか、その口調だとアエルってあいつと知り合いなのか？」

「ん？長生きしてるとねえ、色んな知り合いが出来るものなのよあ」

『つーかアエルは王国の王族とも友人関係にあるんだぞ？』

「ほ、本当ですか！？すごいですアエルさん！！」

ああ。フランの言うとおり確かにすごい。

何がすごいつてあの威圧感バリバリの王様と友達になれるって所がすごい。

俺だと十秒と経たずに会話が途切れそうだ。

『それはそうとアエル。お前こんな小さな町で何やってんだ？確か宝石かなんか探してるんだっけか？』

「うん。一応一通りは見回って見たんだけどねえ。やっぱり無いみたいなお。あとはすぐ近くの教会を見てこの町も出ようと思ってるんだあ」

そっぴやテイルも教会が最後だって言ってたな。なんかそっぴやのが流行ってるのか？

「じゃあ俺たちと一緒にこねえか？　ちょうど教会に泊まる予定なんだけど、一人くらい頼めば泊めてもらえるだろうし」

「あらあ本当？　実は泊まってた食堂の人たちが捕まっちゃって宿を追い出されちゃったのお。困ってたから助かるわあ」

へえそうなんだあ……………あれっ？　食堂の人たちって、俺がブツ飛ばした奴らのことじゃね？

「ユーイチ様、アエルさんが言ってる食堂って…………」

「みなまで言うなフラン。俺たちがやったことでアエルが困っているのだったら救くってやるのが筋ってものだろう？」

「俺たちって…………さりげなく私も含まれてるんですね…………」

俺がチンピラ達をブツ飛ばしたのがばれていないようだし、罪滅ぼしってことで宿を提供すれば怨まれることもあるまい。

「うおっ！？　なんだこのデカ乳は！？」

教会に戻ると扉の前でエリスが座っていた。しかもアエルを目撃しての第一声がこれだ。この子をどうやってつけたらこうなるんだ神父さん。

「こんにちは…………もうこんばんはの時間かしらあ？」

「お、おう……で？ この女は誰だ？」

「実はかくかくしかじかで」

「……なんだかくかくしかじかって。ちゃんと説明しろ」

ちつ、漫画とかならこれで通じるはずなのにやっぱり駄目か。

「つか事のあらましを説明するのは今日で三回目だ。俺は説明キアラじゃねえんだぞ！！」

とりあえず説明。

「まあ、一人くらい増えても父さんは許すだろうけど……めんどくさいことをするなこの犯罪者！！」

「俺は犯罪者じゃねえつつってんだろ！！」

「ふんつ、どーだか。人を殺してそうな顔してるくせに」

「どんな顔だよ！ 俺のどこが犯罪者に見えるってんだ！ なあフラン！」

「……えっ？ えつと……その……」

フランが顔を背けてしまった。

えっ？ 何？ 俺って犯罪者面なの！？

……と、自分の顔面に自信を失いかけしょんぼりしている時、教会の中から怒号が飛んできた。
具体的には、

「ふざけんなクソ親父！！！！」

という台詞だった。

何事かとエリスが教会の扉を開くと、中にはヒュージの姿とヒュージの胸倉をつかんでいるタイクが教会の一番奥。でかい十字架がつりさげられている場所にいた。

「なにやってんだタイ兄!!」

エリスが叫んだが教会の一番奥にいた二人には聞こえておらず、俺たち自体気づかれていなかった。

「エリスには仕事をさせるなって言っただろうが!!」

「何言ってるんだいタイク。我々人間は神に仕えることが仕事だよ？エリス位の歳なら仕事をするのは当然じゃないか」

「そんな話はしてないだろ……！ アンタも昔はそんな奴じゃなかったのに……っ！」

「いい加減にしろタイ兄!!」

今にもヒュージに殴りかかりそうな勢いのタイクをエリスが強引に引き剥がした。

「帰ってきて早々喧嘩かよ！ 落ち着けて!!」

「エリス……ちっ!!」

舌を打ち鳴らすと早足気味にその場を後にするタイク。俺たちにも気づいていたが、この場の空気に気まづかったのか軽く一礼するだけで教会から出て行った。

「なんだっただ……アレ」

「さあ？ 親子喧嘩ってやつかしらあ」

人が怒鳴った後の痛いくらいの静けさの教会で俺たちはそうつぶやいた。この空気は俺には重すぎる……

「いやはや、申し訳ありません。お見苦しい所を……」

ヒュージがタイクに掴まれて乱れた服を整えながら話しかけてきた。

「いや、まあ気にすんな。親子喧嘩なんて良くあることだし」

俺も親ではないが施設のジジイと良く喧嘩をしたもんだ。

つつてもこんな重い空気にはならずには大概は殴り合いになって終わるんだけどな。あのジジイめ……手加減と言っ言葉を知らないくらいに本気で殴ってくるから必ずと言っていいほどボコボコにしやがる。

なんか腹立ってきたわ。

「おや？ そちらのお方は？」

アエルに気付いたのかそう尋ねてきた。

「こんばんは。今日ここに泊まらせていただくことになったアエレスです」

「はい、こんばんは……ん？ アエレスと言つと……」

ヒュージがアエルの体を改めて眺めた。と言ってもエロいニュアンスではなく、何かを確認するように全身を調べるといった感じだ。

「なるほど……あなたがかの有名な……」

「有名……？」

「いえ……ともかく、こちらでお泊りになるのはかまいませんよ。これも女神アストラムのお導きでしょう。感謝いたします我らが神よ」

そう言って手を合わせて神様に祈るポーズになるヒュージ。それと同時にアエル、フラン。そしてエリスまでもが何か神に祈る言葉を口に始めた。

なんだか俺だけが場違いのような雰囲気になってしまった。

あのー、俺一応仏教徒なんですけど……祈らなきゃダメか？

第四十話 胸と胸で昇天

「起きて下さーイー!!!!」

「あばばばばばばばばつ!!!!!!」

突然なんだと思うだろうが、こんな感じで俺は目を覚ました。

目を覚ました、と言うのは違うか……なにせ俺は現在進行形で教会にある一室で眠っているはずだからな。

教会から出た覚えは無いし、ベットから這い出た記憶すらない。だけどこの場所には覚えがある。

神様のおっさんに拉致された場所であり、アストラムとやらの電撃を喰らわされた場所だ。

今叫んだのはそのアストラムに二度目の電撃を喰らわされたのが原因なのだが……

「てめえ！ 殺す気か！！ ギャグ漫画の主人公じゃないんだから！ 天パになるだけじゃ済まねえんだぞ！！」

「あわわわ、スミマセン！ つい」

実際これでよく死なねえな俺……ハッ！ まさか俺はギャグ漫画の主人公だったのか！？

「あ、アノ……お久しぶりデス。この前はスミマセンでシタ。説明をスル前に終わってしまっテ」

「ああ、確か……胸は掌に収まる程度がちょうど良いって話を……」
「ち、違いますー！！ あなたの使命についてデスよー!!」

あれっ？ そんな話だったっけ？ 確かBカップからCカップの間で形が良いものが至高の乳房だと言う話に花を咲かせていた記憶が……

「そんな話はしていません！！」

「ぬおっ！？ 心を読まれた！？」

「一応この世界八私の支配下にあるのデ……って、そんな事はドウでもいいでス！ 早くしないトまた起きちゃいますから！！」

アストラムが涙を目にためながら必死にツツコミを入れる。

俺的にはその『使命』とやらを聞いてしまつと俺に不幸が降り注ぐ気がするから出来れば聞きたくないのだけど………とりあえず、アストラムが何を言ってもこの場では「断る！！」と言おうと思う。

「あ、アノ……だから聞こえてイマス」

くっ！ この場に俺のプライバシーは無いのか！！

「……本題に入りマスね？」

そう言つてアストラムは深呼吸を「スーハー、スーハー」とした後、若干髪の毛に隠れた目をキラッと俺に向ける。

「あなたにハ……コノ世界の新しい神様になつてもらいたいんです」
「よし断る！！………ん？ 神様？」

今神様になれって言ったかこの子？

「は、ハイ……ダメ……です力？」

と上目遣い。

ぐはぁー！！ 女の子の上目遣いほど俺の胸に響くものは無いー！！
いや……そんなことはどうでもいい。『神様になってくれ』なんて
いくらなんでも想像してなかった。
てっきり俺は

『この世界を救う救世主になってくれ！』

とか

『この世界に散らばる七つのドラ○ン○ールを集めてくれ！』

とか言われるものだと思っていたんだけど……ちょっとジョブチェ
ンジの過程を端折っていないかい？

「つーか神様って何だよ、どんなお願いだ！」

「そうデスよね……ちゃんト説明しナイと………あっ！」

「あーはいはい。そろそろ俺が目覚めますのね」

「あなたが目を……えっ！？ どうして分かったんです力？」

そりゃまあ、前回も同じことがあったからなあ。この後俺は落下し
てから目を覚ますんだろう。二度あることは三度あるって言うし……

「取り合えず今度呼ぶ時は電撃を喰らわせないでくれ……あばよ！
！」

落下する直前に放った俺の言葉は、なぜか悟ったような台詞だったとき。

状況説明。

アストラムから『神様になってください』と意味不明なお願いをされた後、お約束のごとく落下していった俺の体。
慣れと言う物は怖いもので、もうそのことで動じる俺ではなくなっていた。

そんなこんなで早朝の教会の一室。

窓から差し込む朝日と、硬くて背中が痛くなりそうなベットの上で俺は目を覚ました。

そして再びお約束。俺の左側にはフランが寄り添い、慎ましやかな胸が俺の左腕に当たっていた。

「はいはいリア充リア充」

傍から見ればとてもうらやましがられるシチュエーションだろう。当然俺もすっかり興奮している。現在も思春期の少年らしく男性特有の朝の生理現象をこらえている真っ最中だ。

だが、俺はこう考えた。

そこにあるのが当然……いやむしろこれは人の形をした湯たんぽな

のだと自分に言い聞かせた。なんとかフランを襲わないよう自分に洗脳のようなものをかけることに成功したのだ。

……たしかに、将来的にはムフフな関係になれたらいいななんて……はっ！ 何を言ってるんだ俺は。

「っーかこれ、暖かくて気持ちいいんだけど……ベツトが狭くなるんだよね」

とりあえずフランの腕を引き剥がし、ベツトの逆側に移動した。

ボイン

……うん。まさにそんな音がした。

他人からは漫画的表現かと思われるかもしれないが本当にそんな音がしたんだ。

つまり、俺の顔面がアエルの特盛りのお胸様に埋まってしまっていたというわけ。しかもアエルはほとんど服を着ておらず、肌着が一枚のぼろ裸の状態だった。

ここまでの話を聞いて『リア充爆発しろ!!』とか『はいはいテンプレンプレ』とか言う人もいるだろう。だけど良く考えてほしい。思春期の男の子が朝方に、片方には自分好みの猫耳少女。そしてもう片方には色気ムンムンの巨乳エルフのお姉さん。そんな状況に置かれた男の子はどうなるか……

気がつくと俺は川を挟んだ向こう側にいる亡きばあちゃんに手を振っていた。

おーいばあちゃん！……………って、俺はあちゃんなんて見たことなかったわ。捨て子だったし。

「うわあ！！ どうしたんですかユーイチ様！？ 鼻血なんて出て！！」

「あらあ？ どうしたの〜？」

「ってわあ！！ アエルさん……………そんなはしたない格好で……………」

「あははは、ばあちゃん誰〜？」

「し、しっかりしてくださいユーイチ様……………！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7362u/>

理不尽な神様と勇者な親友

2011年10月17日01時12分発行